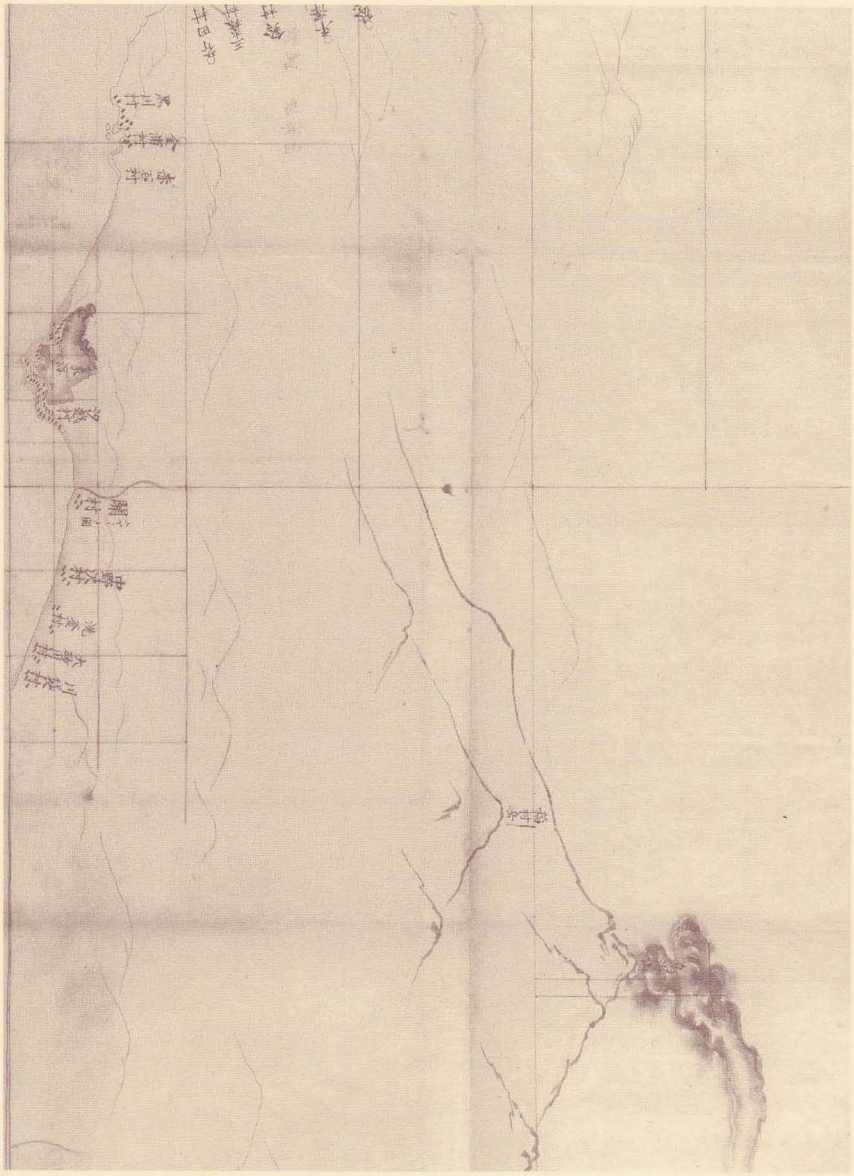
伊能忠敬研究

史料と伊能図



二〇〇八年　第五四号

伊能忠敬研究会

表紙図解説　米国議会図書館所蔵
伊能大図64号　鳥海山（部分）

第64号の西南角の部分である。噴煙を上げる鳥海山が際立ち、日本海岸には象潟が描かれている。その北の金浦（このうら）村は北前船も立ち寄った港町である。享和二年（一八〇二）九月、第三次の測量コースで、往路は新庄から内陸を横手経由で秋田（久保田）へ出ているため、津軽から羽州浜街道を南へと向かう復路にあたる。

いうまでもなく、ここに描かれた象潟の水面は、直後の文化元年（一八〇四）の象潟大地震で、およそ二メートル隆起して陸化した。それまでは汐（塩）越村で海とつながる汽水の潟で、九十九島といわれる小さな島々に松が生い茂り「東の松島西の象潟」と称される景勝地であった。紀元前四四六年（推定）の鳥海山北西部の山体崩壊による岩屑なだれが海に達して島々となり、その後発達した砂嘴により外海と分離した。鳥海山も活動期で、寛政一二年～享和元年（一八〇〇～〇一）に爆発、新山（溶岩ドーム）が形成された。地図の噴煙と合致する。稲村岳は現在の稲倉岳、鳥海山の前山のように見えるのは仁賀保、象潟方面からの眺望で間違いない。

一行は汐（塩）越村に三泊している。二日目は船で象潟諸島を測り、三泊目には天測も記録されているが、この模写図からはわからない。岸辺の古刹蚶満寺も訪れてはいるが地図には記載がない。しかし、象潟の周囲や汐越村内の測線はきっちりと描かれている。隣の関村に「ムヤ〃〃ノ関」がある。歌名所の古関で、うやむやともいう。下端の川袋村から続く三崎のあたり（隣接の70号）、宮城・山形県境の笹谷峠などをその地に比定する説もある。象潟といえば芭蕉にもふれたいが、紙面が尽きた。　鈴木純子（題字は伊能忠敬の筆跡）

目次　54号

巻頭
史跡探訪4「伊能忠敬測量之地碑」　松井 義典　一

話題Ⅰ
忠敬先生愛用の彎窠羅鍼　編集部　二
出雲・手銭家で伊能測量の古文書発見　山陰中央新報　四
「伊能大図」で土地家屋調査士が授業　千葉日報　四
唐丹湾「海上引縄測量」再現ロケ報道　胆江日日新聞　五
「伊能大図フロア展inひがしかわ」　北海道建設新聞　六
江東区に「チュ～ケイさん」　江東区報　六七

話題Ⅱ
神石高原町に設立された四基の伊能測量碑　松井 義典　八
伊能大図総覧の地名と景観（八）　星埜 由尚　一六

芳名録　河村正彦　山田寅之助　伊能 陽子　三六

研究ノート
伊能達の婿選びに奔走した伊能豊秋　佐久間達夫　二七
伊能忠敬研究（四）伊能隊の神奈川測量　石谷 春香　三八
和算の人脈（四）　安藤由紀子　四八
多摩における伊能測量（二）　佐久間達夫　五六

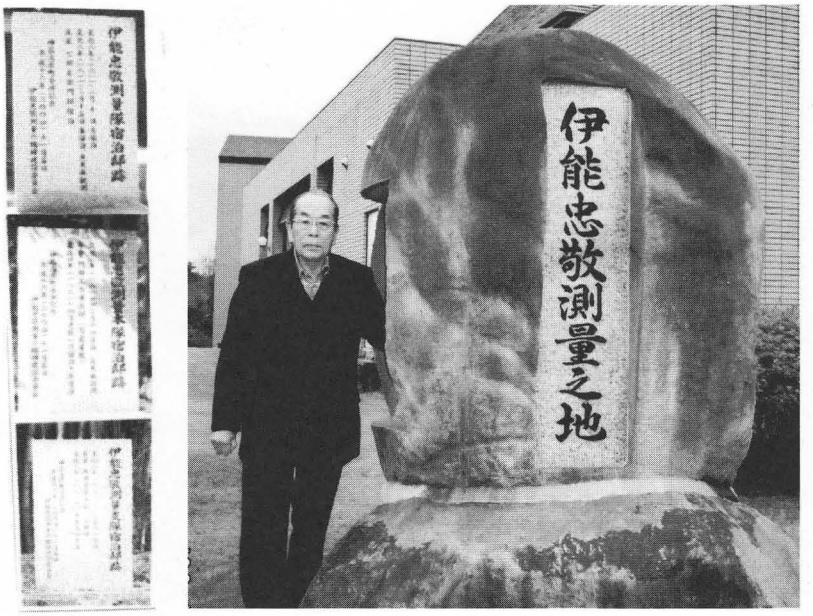
伊能塾講座
話題になったいくつかの大図写本　鈴木 純子　六〇
伊能忠敬と箱田良助　西川 治　六三

石川支部だより
「能登さいはて資料館」出前展を開催　河崎 倫代　六八

忠敬談話室
例会案内　新沢 義博　七〇
お便りから　日々の話題　お知らせ　編集部　七一
表紙図解説　鈴木純子

史跡探訪4　伊能忠敬測量之地碑（及び測量隊宿泊邸跡碑）

◇所在地　広島県神石郡神石高原町時安五〇九〇　三和の森「ウィンズコートホテル」敷地内　◇設立者　伊能忠敬測量の地碑建設委員会　◇設立年月日　二〇〇四年十一月五日◇設立経緯　伊能忠敬の神石郡内測量を顕彰するとともに神石高原町の町村合併を記念して設立された。



材石は地元の建設現場から堀り出された花崗岩の自然石。以前三等三角点が存在していた場所に立つホテルの玄関前東側に建立された。神石高原町の発足式は当時町有だったこのホテルが会場となった。（「伊能忠敬測量之地碑」を紹介する松井義典会員）

神石高原町合併記念「伊能忠敬測量之地碑」を尋ねて

広島県福山市在住　松井義典

案内人

神石高原町は二〇〇四年十一月五日、広島県神石郡内の油木町・神石町・豊松村・三和町が合併して誕生しました。この合併を記念し、旧三和町時安の三和の森リゾートの三等三角点跡に「伊能測量之地碑」が設立されました。横面に伊能忠敬の功績と設立の趣旨を記し、裏面には測量隊一行の神石郡内に於ける足跡図を刻しています。

測量隊は三次から府中、神辺、箱田、神石を通り、新見へと抜けて行きました。この測量行に随行した先祖がおりましたことが伊能忠敬研究会とのご縁となり、神辺の菅波寛さんのお誘いで入会しました。この地は菅茶山、箱田良助など伊能忠敬と縁の深いところであります。

伊能測量隊一行が宿泊した庄屋の邸のうち三輪七郎左衛門邸は、約三百年に及び子孫の方が酒造業を引き続いで営み、よくその面影をとどめておりますが、年寄・門田久治良翁邸は、現在松川正男氏宅及び東孝子氏宅となっており、また庄屋であった矢田貝正都邸跡は現在中平克之氏宅の西に在り、いずれも世の移り変わりを感じます。

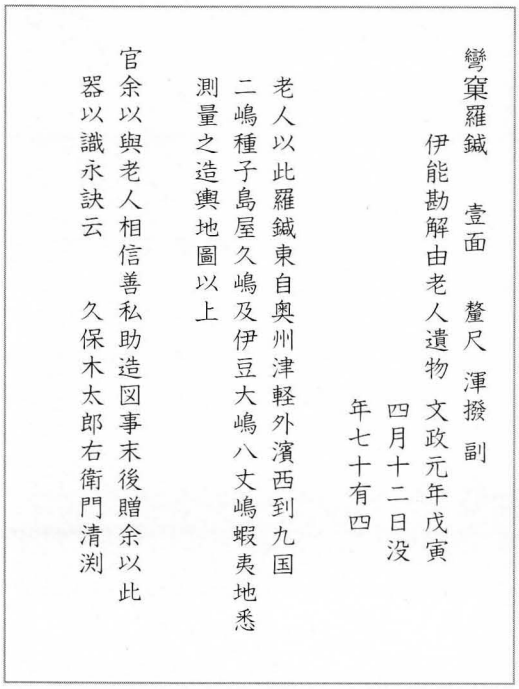
「伊能忠敬測量之地碑」は、神石高原町合併記念として、伊能忠敬測量之地碑建設委員会の設立になったものであります。神石高原町が益々発展することを祈念すると共に、伊能忠敬が第七次測量（九州第一次測量）の帰路、この内陸部にまで足を踏み入れて測量されたことに思いを馳せ、多くの方々がこの自然に恵まれた高原町にお出かけくださり、忠敬先生の偉大さに接して貰いたいと願うものであります。

（まつい　よしのり・歯科医）

【八頁「神石高原町の四基の伊能測量碑」も併せてお読みください。】

真鍮の重みとジャイロの滑らかな動きが手に伝わってくる。目盛は方位を表す十二支が逆目にふられ中心には忠敬考案の水晶の針受が光る

収納袋は藍色の厚手の木綿地に藤の花の模様。白和紙を赤糸で縁取るように縫いつけてある。携行の便宜のためか長い真田紐がついている



彎窠羅鍼　壹面　釐尺　渾撥　副

伊能勘解由老人遺物　文政元年戊寅
四月十二日没
年七十有四

老人以此羅鍼東自奥州津軽外濱西到九国
二嶋種子島屋久嶋及伊豆大嶋八丈嶋蝦夷地悉
測量之造輿地圖以上

官余以與老人相信善私助造図事末後贈余以此
器以識永訣云　久保木太郎右衛門清渕

蓋裏の来歴書には「伊能勘解由老人遺物」とある。「釐尺（ものさし）渾撥（コンパス）」は所在不明。「四月十二日没」は「四月十三日没」の誤記か

箱書は伊能図で見覚えのある清渕の筆跡。清渕は漢学者で忠敬の親友だが旅行嫌いだったという。地図の記入や文書の作成で大いに忠敬を助けた

久保木清渕に贈られた忠敬先生愛用の彎窠羅鍼

この彎窠羅鍼は伊能忠敬が測量で方位測定に使用し、のちに久保木清渕に贈られたものである。使用方法は盤面に折り畳んである２枚の真鍮板を直立させ、両板にあけられた細隙を通して覗視する。箱の蓋裏に書かれた「伊豆大嶋八丈嶋」には忠敬は渡航していないが、この彎窠羅鍼は隊員に携帯されて参加したということであろうか。忠敬先生と苦労を共にした彎窠羅鍼は久保木氏の所蔵を経て今は東大の片隅で静かに眠っている。　**（東京大学総合研究博物館地理部門所蔵）**

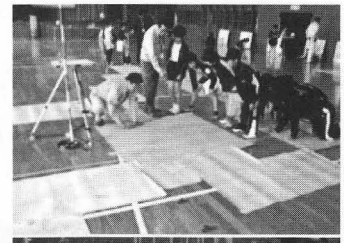
出雲・手銭家で伊能測量関連の古文書見つかる

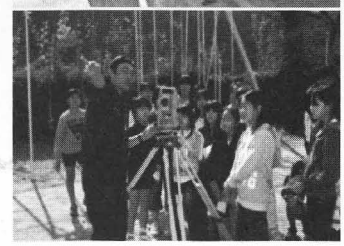
伊能測量隊が第五次及び第八次測量で島根半島を訪れた約二〇〇年前の古文書が、島根県出雲市大社町の手銭家の蔵から見つかった。手銭家は同町に十代、三百年あまりも続いている旧家。古文書は同家にある手銭記念館（手銭白三郎館長）を中心に解読が進められている。報道によれば、二年前に蔵の点検をした際に古文書が見つかっていたが、その中に伊能測量隊が来訪した時の準備や対応について記録した和紙袋「天文方御通行之節諸書附」があった。和紙袋には綴（つづり）六点と明細帳があり、一八〇六年と一三年の測量の様子を記載。これまでの研究では、最初の測量の天文方の役人は十四人で、夜通したいまつをともして三人で警備に当たったことや測量で打ったくいの数、江戸への飛脚代の記載から間断なく連絡していた様子などが分かったという。また、伊能は病気により最初の測量は弟子に任せ、悪天候になった二度目は、測量より出雲大社の参拝を優先させたことも明らかになった。伊能忠敬記念館の紺野浩幸学芸員（45）は「測量した現地の対応が分かり、忠敬の人物像もうかがえる貴重な資料」と評価。手銭記念館は企画展を開き公開した。

上　見つかった古文書　左　手銭記念館

平成二〇年七月五日　山陰中央新報

「伊能大図」で土地家屋調査士が特別授業





千葉県東金市布田の市立源小学校（小関健一校長、児童数一三四人）で地元の土地家屋調査士らが「伊能大図」を使って四年生と六年生の児童らに特別授業をおこなった。報道によると、特別授業に参加したのは同校四年生二十三人と、六年生二十四人。四年生は今年七月に伊能忠敬記念館を見学していた。

伊能図を通して測量への関心を深めてもらおうとボランティアで講師を務めたのは七人の土地家屋調査士たち。伊能忠敬記念館から借り受けた「伊能大図」の関東地方部分の複製を体育館に広げ、特別授業を展開した。児童たちは「このあたりが今のディズニーランドだ」などと興味深そうに見入っていたという。また校庭では「歩測」体験や最新機器での測量の実演もおこなわれた。

平成二〇年一一月一六日　千葉日報

唐丹湾「海上引縄測量」再現ロケを報道 ― 正確さと苦労を実感

六月七日に行われた「海上引縄測量」の再現TVロケが新聞で報道された。

伊能測量隊が三陸海岸で行った「海上引縄測量」を岩手県釜石市の唐丹湾で再現、その様子については七月二〇日に開催された今年度総会で講演「再現！海上引縄測量」でも公開されたが、このロケの様子と関係者のコメントが紙上で紹介された。

新聞によると、唐丹の歴史を語る会の木村正継さん（61）は「忠敬の測量では1147間（2088㍍）。現在の漁港の状況を考慮すれば、忠敬の測量がいかに正確であったかが分かる」と話し、参加者の新沼裕さん（71）は「資料だけではわからなかったが、いい体験になりました。昔は船も手こぎだったろうし、大変な苦労だったのでは」と思いを巡らせていたとのこと。地元の人々のコメントには伊能忠敬の測量に対し、あらためてそのすごさを実感した驚きと感動がにじみ出ていた。

（資料提供　さいたま市在住　矢能彰会員）

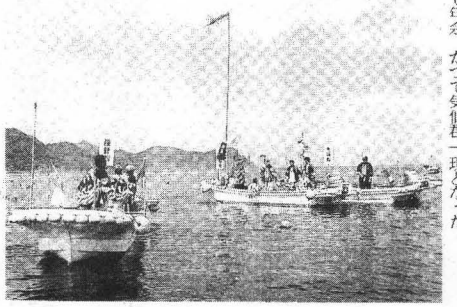
第三種郵便物認可　胆江

伊能忠敬の偉業体感

207年ぶりに測量再現

釜石・唐丹湾

江戸時代に全国を測量して歩き、「大日本沿海実測図」を作製した伊能忠敬（1745―1818）が気仙沼沿岸を測量してから200年余。かつて気仙郡だった釜石市の唐丹湾で、忠敬の実測方法を用いた「海上引き縄測量」が実施された。全国でも初めての試みで、207年ぶりの再現となった。



忠敬は奥州海岸測量の途中、1801（享和元）年9月23日に越喜来村から唐丹村に到着した。翌日、大石の海岸から船に乗り、引き縄を使って対岸の仏ケ崎まで実地測量している。

今回の試みは、テレビ番組の収録の一環。忠敬が207年前、唐丹湾で海上引き縄測量した場面を、当時と同じように再現しようと、地域住民や唐丹町漁協の関係者らが撮影に協力した。

伊能忠敬研究会の渡邊一郎名誉代表（78）＝東京都在住＝がロケの陣頭指揮をとり、当時の資料などに沿って綿密に再現された。タレントのパンチ佐藤さんが、海上引き縄測量を体験した。

「親船」「羅針船」「先縄船」「跡縄船」「梵天船」など役割ごとに7隻の漁船を使った。間縄を張り、海岸線に沿って1時間がかりで距離や角度を測定した。

測量の結果、大石の海岸から本郷の仏ケ崎までの直線距離は1133間（2062㍍）と分かった。唐丹の歴史を語る会の木村正継さん（61）は「忠敬の測量では1147間（2088㍍）。現在の漁港の状況を考慮すれば、忠敬の測量がいかに正確であったかが分かる」と話す。

参加者の新沼裕さん（71）は「資料だけでは実感がわかなかったが、いい体験になりました。昔は船も手こぎだったろうし、大変な苦労だったのでは」と思いを巡らせていた。

（東海新報）

梵天を高く掲げた船は「梵天船」。梵天竿の下に「御用旗」が見える。
梵天船の右に並んでいるのは「先縄船」、手前は「羅針船」である。
いずれの船の乗組員も祭半纏を着込んでいる。

２００８年９月１３日
胆江日日新聞（東海新報より）

「２００８伊能忠敬大図フロア展ｉｎひがしかわ」

小中学生・父兄が伊能図に驚きと感動

北海道上川郡東川町で八月二八日から三一日まで「２００８伊能忠敬大図フロア展ｉｎひがしかわ」が開催されました。会場の東川町農村改善センターには伊能大図の北海道部分のフロア展示、当時の測量機器のレプリカ、説明パネル、関連古地図の展示が行われました。会場は旭川近郊の農村地帯ですので、主に東川町内の小中学生や父兄が中心で、一日あたり二〇〇人程、合計で七〇〇人を超えるたくさんの人々が来場しました。実践者としての伊能忠敬が広く認識されることによって、他産業においても市井の技術者が評価されることを願っています。この度はあらためて伊能忠敬の、小中学生を中心とした「教育」への貢献度も高く評価されてもよいのではと考えさせられました。

（旭川市在住　安川義巳会員）

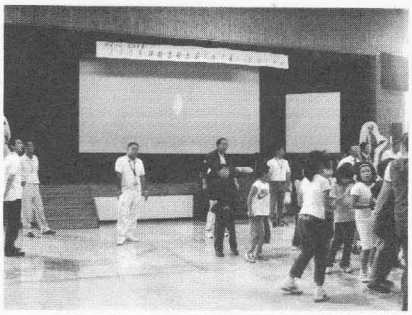
「大図フロア展 in ひがしかわ」

主催：東川町、東川町教育委員会

共催：国土地理院北海道地方測量部

上川調査設計協会、道北若力会

会場の東川町環境改善センター



（写真上）農村改善センターのフロアに展示された伊能大図と見学にやってきた子供たち。

（写真左）会場では道北若力会が案内役や歩測指導を担当。多くの子どもたちが「測量・歩測体験コーナー」や「大図説明ツアー」を楽しんだ。

北海道建設新聞

2008年(平成20年)8月30日(土曜日)

(8)

「伊能忠敬大図フロア展ｉｎひがしかわ」

見事な仕事ぶりに驚き

案内役の道北若力会メンバーの説明に集まる子どもたち

200年前の偉業に感激―。「2008伊能忠敬大図フロア展ｉｎひがしかわ」が28日から東川町農村改善センターで始まり、来場者は地図づくりの見事な仕事ぶりに驚いている。

6月3日の「測量の日」を記念し、東川町などが主催した。入場は無料で、31日まで。

大図（複製品）を提供した国土地理院と、06年に「伊能大図フロア展ｉｎあさひかわ」を開催した上川調査設計協会が共催。協会の二世会である道北若力会が案内役を務めた。

会場のフロア一面には大図の北海道部分を張り出した。ダイナミックな構図は中2階の観覧席から眺めることもできる。

このほかにも伊能忠敬にまつわるパネルやもっと昔の古地図、明治にさか上る東川周辺の地図、伊能隊が使った測量道具（レプリカ）を展示している。

案内役の一人、若力会の吉岡克宏会長は「緯度が何°あるか分かると、地球の大きさが分かった。忠敬はそれが知りたくて北海道までやって来た」と来場者に解説し、歩測体験コーナーでは歩き方をやって見せた。

東川小6年の上田悠介くん（11歳）は「歩測が楽しかった。地図が正確なのでびっくりした」と目を輝かせた。隣町の東神楽町在住の主婦、畑中弘子さん（38歳）は「地図を見るのが好きなので、前から興味があった。とても面白かった」と話していた。（旭川）

神石高原町に設立された四基の伊能測量碑

松井義典

神石高原町の誕生と伊能測量記念碑

二〇〇四年十一月五日、広島県神石郡内の油木町・神石町・豊松村・三和町が対等合併し、神石高原町として発足しました。この町村合併を記念して、神石郡内に四基の伊能測量記念碑が建立されました。この間の経過については、記念碑建設実行委員会事務局長・入江勝氏の「記念碑建設の経過」と題する一文に記されております。また、三和の森に設立された「伊能忠敬測量之地碑」（一頁「史跡探訪」に掲載）の左面には記念碑建設実行委員会により「記念碑設立の趣旨」が刻まれております。それらをご紹介して解説に代えさせていただきます。

◇「記念碑設立の経過」（原文横書き）

・二〇〇三年早春、神辺町観光協会長で国道三一三号線ロマンチック街道の提唱者であるキングパーツ株式会社社長の高橋孝一様から、「伊能忠敬研究会による現地調査の結果、三和町時安のウィンズコートホテルの所在地が測量地点であると断定された。この世界的な偉業を後世に伝承したらどうか。」と初対面の私に切り出された。唐突のこのお話を丸山英三三和町長に報告したところ、三和町観光協会で取り組むのが至当とのアドバイスを頂いた。

・二〇〇三年七月一五日、三和町観光協会事業部会に提案。

八月二七日、記念碑建設実行委員会を組織する。

以後数回の委員会会議の結果、以前三等三角点が存在したウィンズコートホテルの玄関前東側に位置を決定。材石は、一連の観光施設駐車場建設地から掘り出された自然石とした。

この間、種々の資料による検討を重ねたが、測量日記から神石郡内の三箇所で宿泊したことが判明。その宿泊邸跡の記念碑も建設することとし、次の位置に各々建設した。

＊三和町下井関の松川正男様宅入口

＊豊松村中平の中平克之様宅西

＊油木町油木の三輪酒造株式会社正門入口

・建設施工は、福山市加茂町の三好石材工業株式会社によるもので、神石高原町合併記念事業とし、三和町の閉町式に供覧すべく九月二八日に一切の工事を竣工した。この事業費は総額二〇〇万円で、次の補助金及び寄付金によるものです。

三和町　一〇〇万円　来見財産区　五〇万円　三和町観光協会

一〇万円　実行委員会　一〇万円　神辺町　高橋孝一様　一〇万円

福山市　松井豊様　一〇万円　福山市　入江寿則様　一〇万円

この間、時安区民会代表として実行委員になられ、本建設委員長の大役を引き受けて頂き大変なご心労を煩わした平田行雄様に深甚な謝意を表するところです。

記　事務局長　入江　勝

◇記念碑設立の趣旨

伊能忠敬の測量日記には神石各地を測量した史実がある。それによると、時安村にも立ち寄り飛地少々測量したと記述されているが、場所を特定することはできない。かつてこの付近に三角点の標識があったことから、現在地に近い場所ではなかろうかと推測する。

忠敬の偉大な業績を称え、永く後世に伝承して地域活性化に寄与することを目的に、町村合併事業として碑を建立する。

平成十六年（二〇〇四）十一月五日

伊能忠敬測量の地碑建設委員会

四つの伊能測量記念碑

一、主碑「伊能忠敬測量之地」について　写真上

高さ二・五m、幅一・五mの自然石の正面に題字、他の三面に伊能忠敬ならびに伊能測量隊の事績が刻されております。以前三等三角点が存在した跡ということで、ウィンズコートホテル玄関脇に位置を決定しました。

◇伊能忠敬の功績（石碑の左面の碑文）　写真中・上

近代的測量法を学んだ忠敬は五五歳から七三歳までの間、足かけ十七年にわたり北海道から九州まで地球一周を越える四万四千kmを測量し、天体観測地点約千二百箇所に達した。没後後継者により業績をまとめた日本初の実測地図「大日本沿海輿地全図」完成の基を築いた。

◇神石の足跡【原文訳】（石碑の右面の碑文）　写真中・下

文化八年（一八一一）二月一四日　忠敬隊は百谷村（福山市）を午前五時に発って北に向かい、藤尾村、犬塚、坂瀬川村（三和村）に入り、時安村で飛地を測り、太刀洗、井関村を経て下井関の年寄久治郎宅に午後二時過ぎに着き宿泊し、夜は天体観測をした。

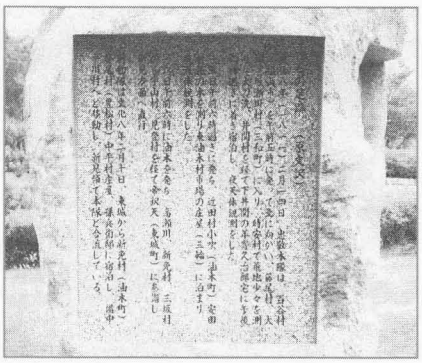
一五日午前六時過ぎに発ち、近田村小吹（油木町）安田村花の木を測り東油木村市場の庄屋（三輪）に泊まり、夜天体観測をした。

一六日午前六時に油木を発ち、高瀬川、新免村、三坂村から宇山村、見登村を経て帝釈天（東城町）に参詣し、新見方面へ直行。

別動隊は文化八年二月十日、東城から新免村（油木町）笹尾村（豊松村）中平村庄屋、孫兵衛邸に宿泊し、備中平川村へと移動し、新見宿で本隊と合流している。

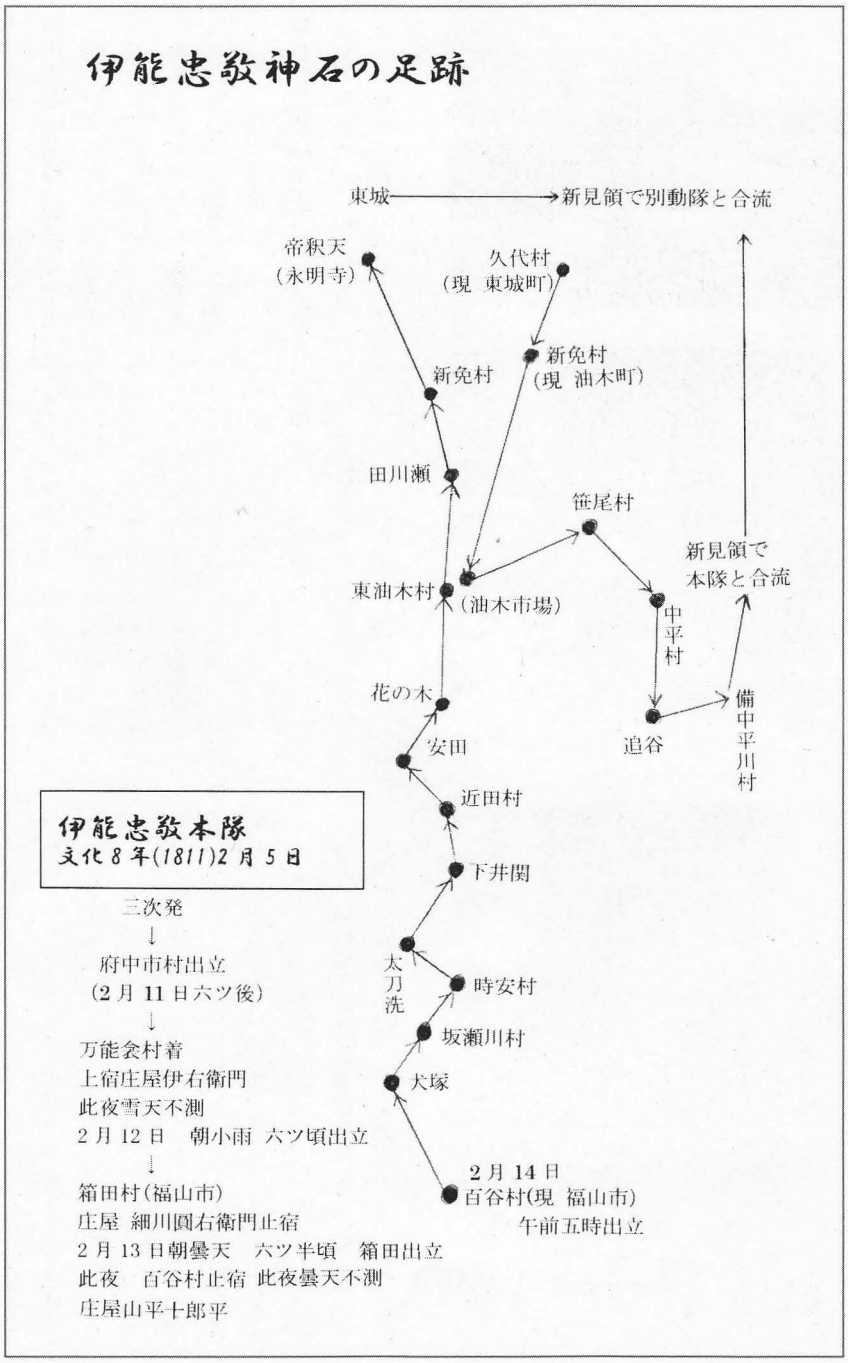
◇神石の足跡図（石碑の裏面の碑文）　写真下

測量隊の神石郡内の行程を地図に矢印であらわす。次頁に略図を示す。



◇伊能測量隊の第七次測量

伊能忠敬第七次測量隊（第一次九州測量）は山陽道を下り神石宿泊。地元の漢詩人で頼山陽の師である菅茶山の訪問を受けた。文化六年（一八〇九）十一月二十八日神辺を去って九州路に向かい、文化八年（一八一一）二月三日　三次五日市本町に帰路到着。箱田村庄屋　細川園右衛門、西中条村庄屋　松井弥次兵衛が三次に出むいて出迎える。なお、右の足跡図は帰路のものである。



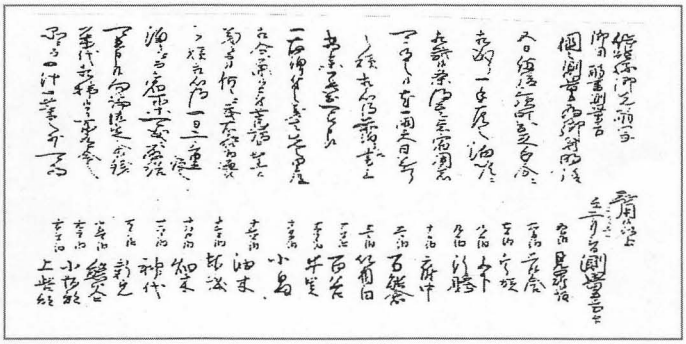
◇伊能忠敬日記による行程

二月十一日　朝晴天、六ッ后（午前六時過）府中市村出立。広谷村、中須村、新市村、寓村、戸手村、昼食中島村、万能衾村着。止宿庄屋伊右衛門。此夜曇天不測。

二月十二日　朝少雨、六ッ頃万能倉出立。上岩成村、下加茂村、下岩成村、道上村、西中条村、徳田村、箱田村、湯野村、下御領村。同夜　箱田村　庄屋細川園右衛門へ止宿。

二月十三日　朝曇天、六ッ頃箱田出立。上加茂村、下加茂村、野村、百谷村止宿。庄屋山手十郎平。此夜　曇天不測。

二月十四日　朝曇　七ツ半後（午前五時）出立（百谷村）、服部紗村、藤尾村、坂瀬川村、井関村止宿。



伊能様御先触（おさきぶれ）写

◇神辺で菅茶山より漢詩を贈られる

文化六年（一八〇九）第七次測量隊（九州第一次測量）は往路十一月二十七日備後国御領に入り、神辺本陣　菅波武十郎に宿泊した。

菅茶山は伊能忠敬を訪ねて歓談する。『補訂鄭註孝経』を贈られる。

（伊能忠敬）

【このとき菅茶山が忠敬を詠んだ漢詩を贈った。次頁下欄参照】

この九州測量の帰途文化八年（一八一一）閏二月三日正午過、三次市五日市本町到着。この日箱田村庄屋　細川園右衛門、大江村　谷東平、西中条村庄屋　松井弥次兵衛は途中まで出迎えた。

○第七次測量隊のメンバー

内弟子箱田良助は細川園右衛門の次男であり、供侍松井沢次は松井弥次兵衛の次男である。

（二）第七次測量隊メンバー

忠敬　供侍　成田豊作
　　黒田藤吉
　　従者　清七

天文方下役　坂部貞兵衛　供侍　①松井沢次
　　従者　下河辺政五郎
　　従者　青木勝次郎
　　従者　永井甚左衛門
　　従者　②植田文助
　　梁田栄蔵　箱田良助
内弟子
棹取り　平助　長蔵

計十八人（十七人／成田豊作は津久見市の鳩浦で帰される）

①松井沢次　西中条村庄屋、松井弥次兵衛　次男
②箱田良助　箱田村庄屋、細川園右衛門　次男

◇箱田村で良助の実家に止宿

伊能忠敬第七次測量日記（九州測量より帰路）の文化八年（一八一二）閏二月十二日の段には、箱田村の止宿が庄屋・園右衛門で箱田良助の実家であったことが記されている。

伊能忠敬第七次測量日記（九州測量より帰路）

文化八年（一八一二）
閏二月十二日　朝小雨、六ツ頃万能倉出立測量同前、与、下、上、箱、平、同所字妻ノ神より初　備後深津郡上岩成村、安那郡下加茂村（百）印を残、四丁五十七間上岩成村字正渡、安那郡道上村、夫より　左御料所、前澤支配　西中条村、右福山領　徳田村、御領所、右側箱田村、福山領湯野村、左右同同村字　沖湯野、夫より同下御領村国分寺巳年測道碑ニ　繋　一里一十二丁一十八間一尺、合一里一十七丁一十五間一尺　九ツ前頃立戻り、箱田村着、止宿庄屋、園右衛門　良助親ノ家、此日終日雨、西中条村庄屋、弥治兵衛、彦太郎案内、中津領安那郡百谷村止宿、山手十郎平代伴蔵、庄屋、伊十郎代、佐右衛門来ル。

「箱田村着、止宿庄屋、園右衛門　良助親ノ家・・」

◇余話・福山藩と函館戦争

伊能測量から五〇余年後、箱田良助の二男・榎本武揚は旧幕軍勢力を率い、箱館五稜郭に拠って新政府軍に抗した。このとき福山藩は箱館に出兵、藩兵約五〇〇人が榎本軍と戦った。福山藩同士が戦っていたようなものであったが、七重村の戦いで福山藩兵は榎本軍に撃退され、青森まで敗走した。第十代藩主・正桓の時のことである。なお、ペリーと開国条約を結んだ老中・阿部正弘（一八一九―一八五七）は七代目藩主であり、福山藩と幕末・維新は縁浅からぬものがある。

菅茶山から伊能忠敬に贈られた詩

伊能先生奉命測量諸道行次見問賦贈

（伊能先生命を奉り諸道を測量し、行次いで問うに見え賦して贈る）

酒肆蔵名臥故邱　酒肆名を蔵して故邱に臥し
豈図幕檄命飛輶　豈図らんや幕檄飛輶を命ぜんとは
璿璣坐括三千界　璿璣坐して括る三千界
分率行量六十州　分ち率いて行く量る六十州
已識馬援能聚米　已に識る馬援能く米を聚るを
不従楊炯問浮舟　楊炯に従い浮舟を問わず
奚嚢我亦収河岳　奚嚢我亦た河岳を収め
愧把生涯供漫遊　愧らくは生涯を把ね漫遊に供せしを

【出典】『黄葉夕陽村舎詩』後編三―六

【大意】伊能先生は酒店を次世代に譲り、隠居の身となり故郷の山河を供とせん。はからずも幕命により飛び回るとは。測量具とともに座して広い天地を纏める。分担して率い、いくいく計測するは日本全国。すでに知っている馬援の故事を。川柳の鮮明な輝きに従って船を浮かべるを厭わず測量行。私も詩嚢に中国の名勝たる黄河と五岳にちなんだ風景を詠じて収めよう。

※編集部註　馬援（BC　14～49）は後漢の武将。六十二歳で出陣を願い出て光武帝に「矍鑠たるかな、この翁」と称され「矍鑠」の語源となった。

二、「伊能測量隊宿泊邸跡碑」（油木・下井関・中平）について

◇庄屋七郎左衛門邸跡（神石高原町油木乙一九三〇番地　三輪酒造前）

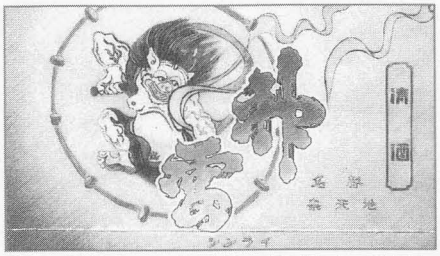
当家は享保元年（一七一六）より酒造家を営み、伊能忠敬本隊及び支隊が宿泊した文化時代は庄屋を務め、また酒造家を営んでこられました。現時まで三百年の面影を残しており、今も盛業中でありまた子孫も健在であります。

左の写真は名主であり酒造家であった伊能家と同じく、庄屋を務め酒造業を営んできた旧油木町油木の三輪節雄氏邸の表門と庭の様子。

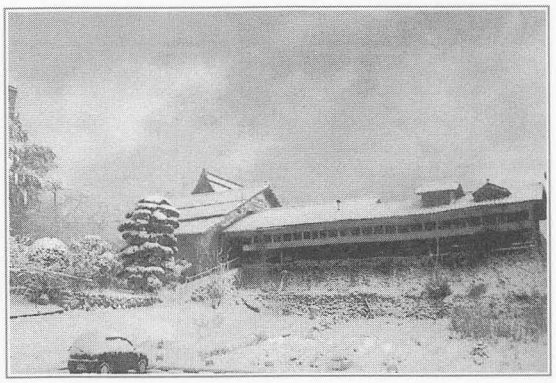
庄屋七郎左衛門邸は本隊・支隊ともに宿泊した邸であります。

往時を伝える三輪酒造の門構

三輪酒造前に立つ宿泊邸跡の碑



清酒「神雷」の名は神の宿る国・神石に由来する



石垣の上に建つ三輪酒造　裏側から見た雪景色

伊能忠敬測量隊宿泊邸跡

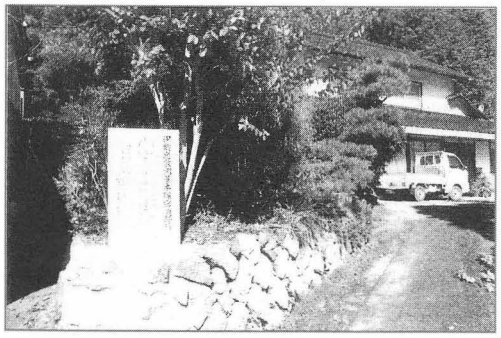
文化八年（一八一一）二月十日　支隊泊
文化八年（一八一一）二月十五日　本隊泊　夜天体観測
庄屋　七郎左衛門邸宿泊
神石高原町合併記念
平成十六年（二〇〇四）十一月五日
伊能忠敬測量の地碑建設委員会

◇年寄門田久治良翁邸（寄定屋敷）跡（神石高原町下井関）

伊能測量隊の本隊が宿泊した年寄・門田久治良翁邸は旧三和町井関にあり、現在は松川正男氏邸および東孝子氏邸となっております。

伊能忠敬測量隊宿泊邸跡

文化八年（一八一一）二月十四日泊、夜天体観測
年寄　門田久治良翁邸（寄定屋敷）
文政四年（一八二一）四月忠敬一行宿泊十年後没
神石高原町合併記念
平成十六年（二〇〇四）十一月五日
伊能忠敬測量の地碑建設委員会



松川正男氏邸の前に立つ石碑

門田翁は測量隊宿泊の10年後に死去した

◇庄屋矢田貝孫兵衛正都邸跡（神石高原町豊松中平）

庄屋・矢田貝孫兵衛邸跡は旧豊松村中平にあり、現在は中平克之氏宅の西に測量隊宿泊邸跡の石碑が立っております。

伊能忠敬測量隊宿泊邸跡

文化八年（一八一一）二月十一日　泊
庄屋　矢田貝孫兵衛　正都邸
文政三年（一八二〇）享年五四才没
神石高原町合併記念
平成十六年（二〇〇四）十一月五日
伊能忠敬測量の地碑建設委員会

今は笹藪となった道端に立つ宿泊邸跡碑

庄屋・孫兵衛は測量隊宿泊の９年後に没した

＊四基の伊能測量碑の所在地＊

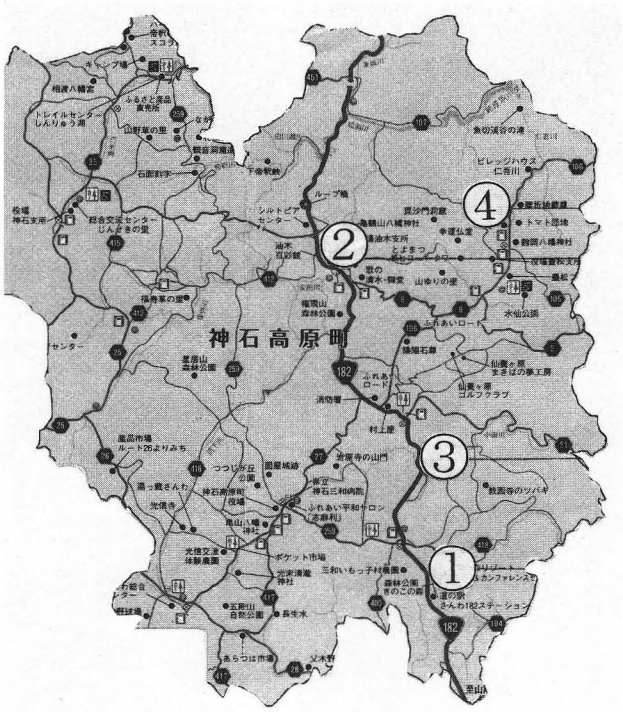
①「伊能忠敬測量之地碑」（旧三和町）時安五〇九〇　三和の森

②「庄屋七郎左衛門邸跡碑」（旧油木町）油木乙一九三〇

③「年寄門田久治良翁邸跡碑」（旧神石町）下井関

④「庄屋矢田貝孫兵衛正都邸跡碑」（旧豊松村）中平

（まつい　よしのり・歯科医）



「神石高原町ガイドマップ」神石高原町観光協会より

編集部＊神石高原町について＊

人口約一一、五〇〇人

◇神石高原町（じんせきこうげんちょう）は標高約五〇〇ｍの中国山地に位置する森林と高原の町。二〇〇四年一一月五日に神石郡内四町村（油木町、神石町、豊松村、三和町）の新設合併により誕生した。主な産業は農業、畜産業及び観光。国定公園「帝釈峡」や大化の改新以来の歴史に育まれた文化遺産をもつ。七世紀中頃、孝徳天皇がこの地独特の流星をご覧になるため滞在したという星居山がある。

＊六三頁「伊能忠敬・箱田良助と菅茶山」も併せてお読みください。

国土地理院「ウオッちず」より

伊能大図総覧の地名と景観（八）

星　埜　由　尚

小田原・箱根

小田原は、第二次、第五次、第六次、第八次、第九次と通過回数も多い。大久保加賀守の城下で十一万三千石、当時の藩主は、俊才として知られた大久保加賀守忠真（ただざね）である。大久保忠真は、老中として幕政に関与し、藩政においても財政の改革、人材の育成などに大きな功績を残したといわれている。*1

大図には、大きな城郭が描かれ、大久保加賀守居城と大きく記されている。大図の小田原城下の家並みの描き方をみると、関本から小山へと北に向かう測線と東海道の測線に沿って家並みが描かれており、現在の地形図にみる市街の広がりとその構造は変わらないように見える。北へ向かうと、城下の町並みの切れるあたりに「荻窪村寺町」という地名がある。これは、アメリカ大図では「荻窪村吉町」となっており、おそらくアメリカ大図が正しく、国会大図の誤写であろう。その付近で、測線を横切る川があるが、現在の地形図を見ると山王川であると考えられるが、その付近は地形図からも寺院の多いことがわかる。河口には山王原村がある。

第3図は箱根である。「箱根の山は天下の険」と言われているように、東海道最大の難所であったことはよく知られたことである。このような難所を芦ノ湖（蘆湖）の湖岸を一周して測量しているほか、小田原から早川の谷を通過して仙石原を通り御殿場に抜ける測線と湯本から箱根の宿を通って三島に抜ける測線、宮城野から箱根に抜ける測線と測線を密に配置して測量している。享和元年（一八〇一）六月一日、第二次東海岸測量において三島宿を出立し、箱根宿まで測量し、箱根権現に参詣したと測量日記には出ている。大図には、箱根権現と大書されている。箱根宿に止宿した次の日、畑宿から湯本村に抜けて小田原城下に至っている。

第五次測量においても、小田原から畑宿、箱根宿に宿泊し、次の日は三島までと第二次の時とは逆方向で同じ経路を測量している。このときは、測量区間を二つに分け、二手に手分けして測量している。箱根宿では、関所前で測量したほか、箱根権現の別当寺である箱根山東福寺の門前まで測量している。箱根権現は、現在の箱根神社で、明治の神仏分離までは、東福寺が箱根権現の中心をなしていた。

第1図　大図第99号小田原

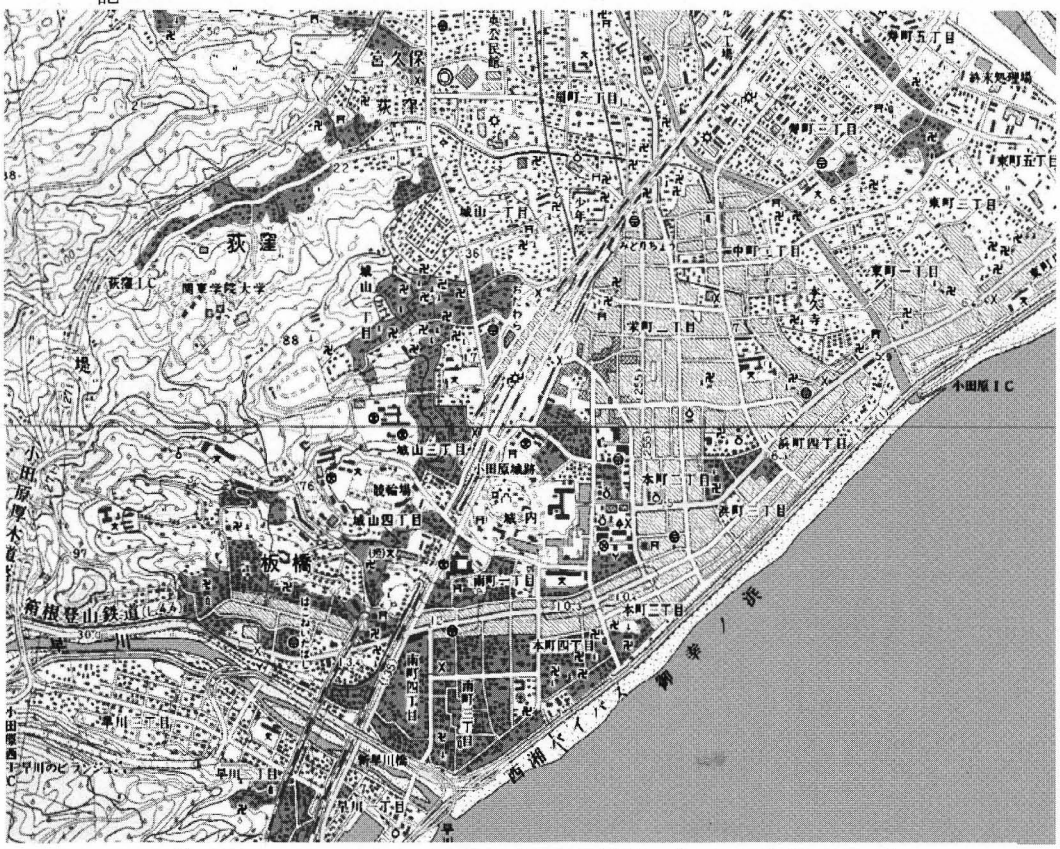
第九次伊豆七島測量も終わりとなり、測量隊は、御殿場から箱根に入り、箱根には二月二九日に仙石原に止宿してから三月九日に湯本村を出発するまで、箱根の測量に従事している。まず、宮城野村木賀から蘆の湯を通過し箱根宿まで測量し、箱根宿には数日滞留して蘆湖の湖岸線を測量している。その後木賀まで戻って木賀から宮ノ下など早川沿いに測量し、湯本へ

*1 工藤寛正監修「江戸時代全大名家事典」による。

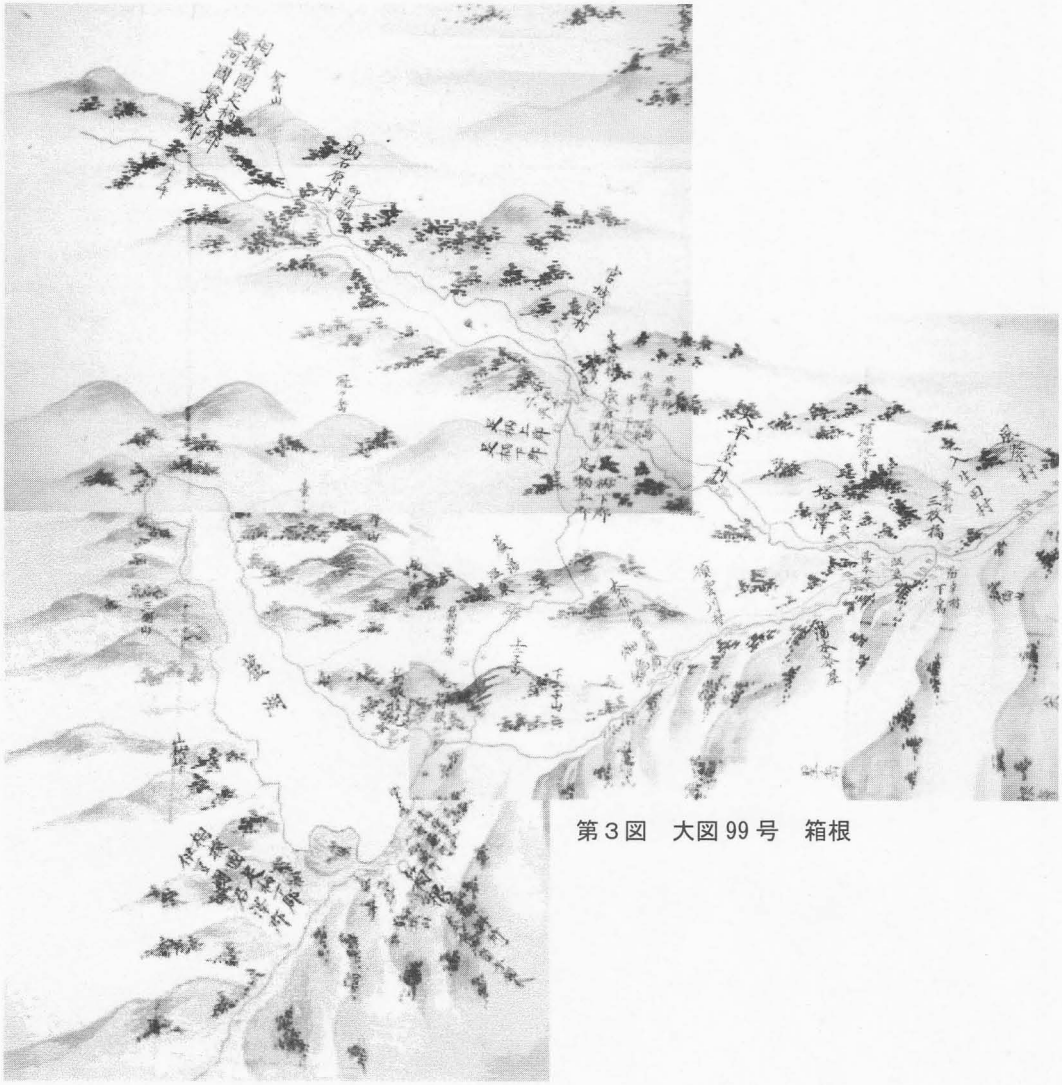
到着している。この間、日記には、温泉や名所の記載も多い。宿所も温泉宿にしており、全国測量の終わりに近づき、総帥である忠敬は老齢のため参加しなかったこともあり、温泉で羽を伸ばしている様子もうかがえる。

大図にも、温泉の記載が多く、温泉と記載されているところをあげると、木賀温泉、底倉温泉、堂ヶ島温泉、蘆ノ湯温泉、塔ノ澤温泉、湯本温泉である。これらの温泉は、現在でも有名な温泉で、観光客がにぎわうところである。また、箱根の山々についてもその山名が記されている。それらをあげると、臺ヶ岳、神山、駒ヶ岳、上二子山、鞍掛山、山伏峠、三國山、ウトウ峠、金時山、冠ヶ岳といった山の名前が見える。地形図と対照すると、これらの山名のうち、現在台ヶ岳とされている山は、大図において冠ヶ岳と記されている山の位置に当たるように思われる。逆に、地形図では、冠ヶ岳は神山のすぐ北にある小突起の山である。また、ウトウ峠と書かれている峠は、金時山との関係から見て現在の乙女峠に当たると考えられる。ウトウと乙女は音が似ており、明治以降に改名したのであろうか。ウトウ峠から下りた仙石原村には御関所と注記されている。箱根関の裏関所として仙石原に設けられていた。測量日記によると仙石原での測量では、要害の地であるため、仙石原関所の役人が付き添いでついてきたと書かれている。箱根の関は、有名であるが、仙石原に関所があったことを知る人は少ないだろう。双方とも小田原藩が管理していたそうである。

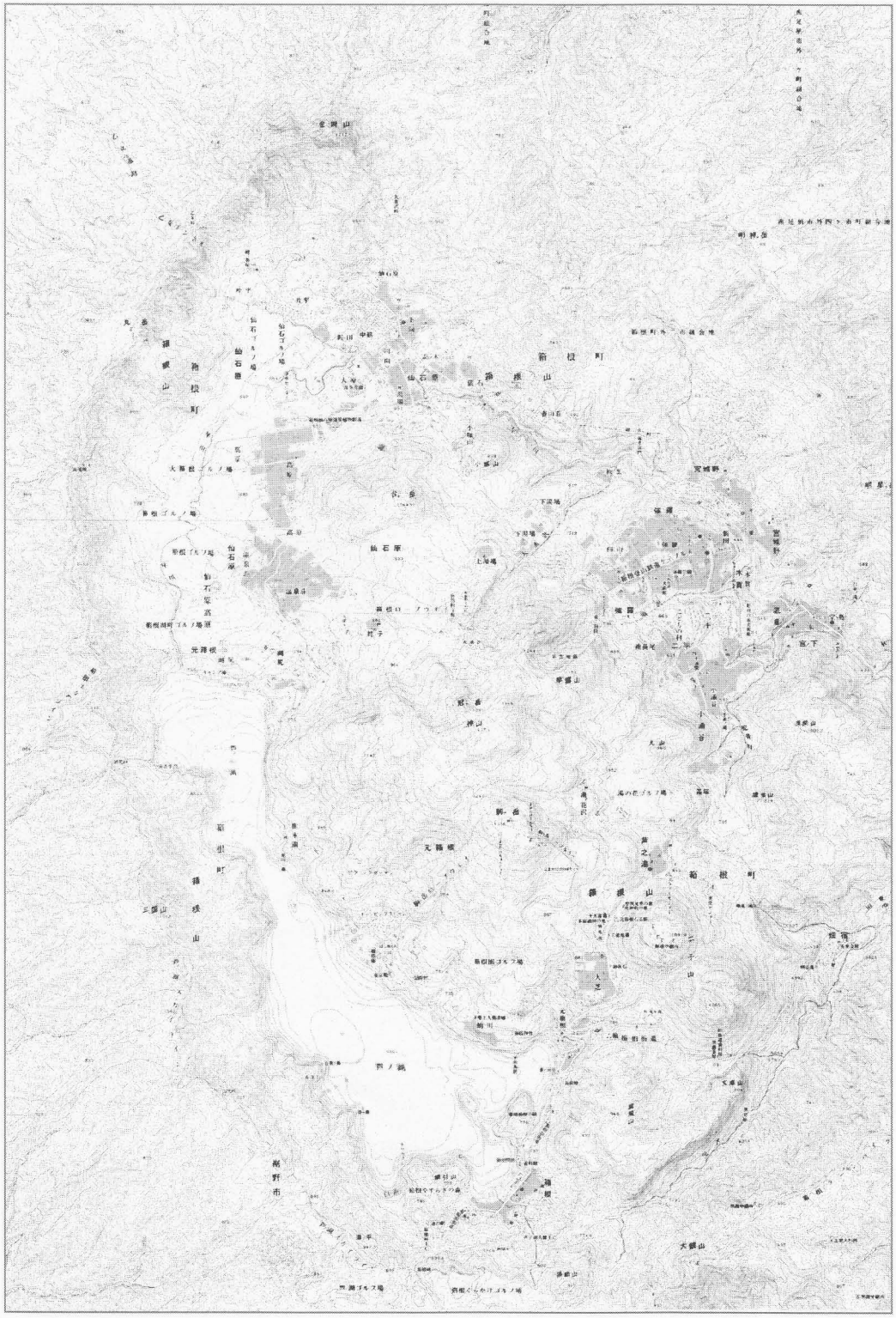
芦ノ湖湖岸の測量には舟を用い、湖岸の細かな地名が測量日記には多数記されているが、大図には省略されている。芦ノ湖は、早川の水源で、現在の地形図を見てもわかるように、芦ノ湖北



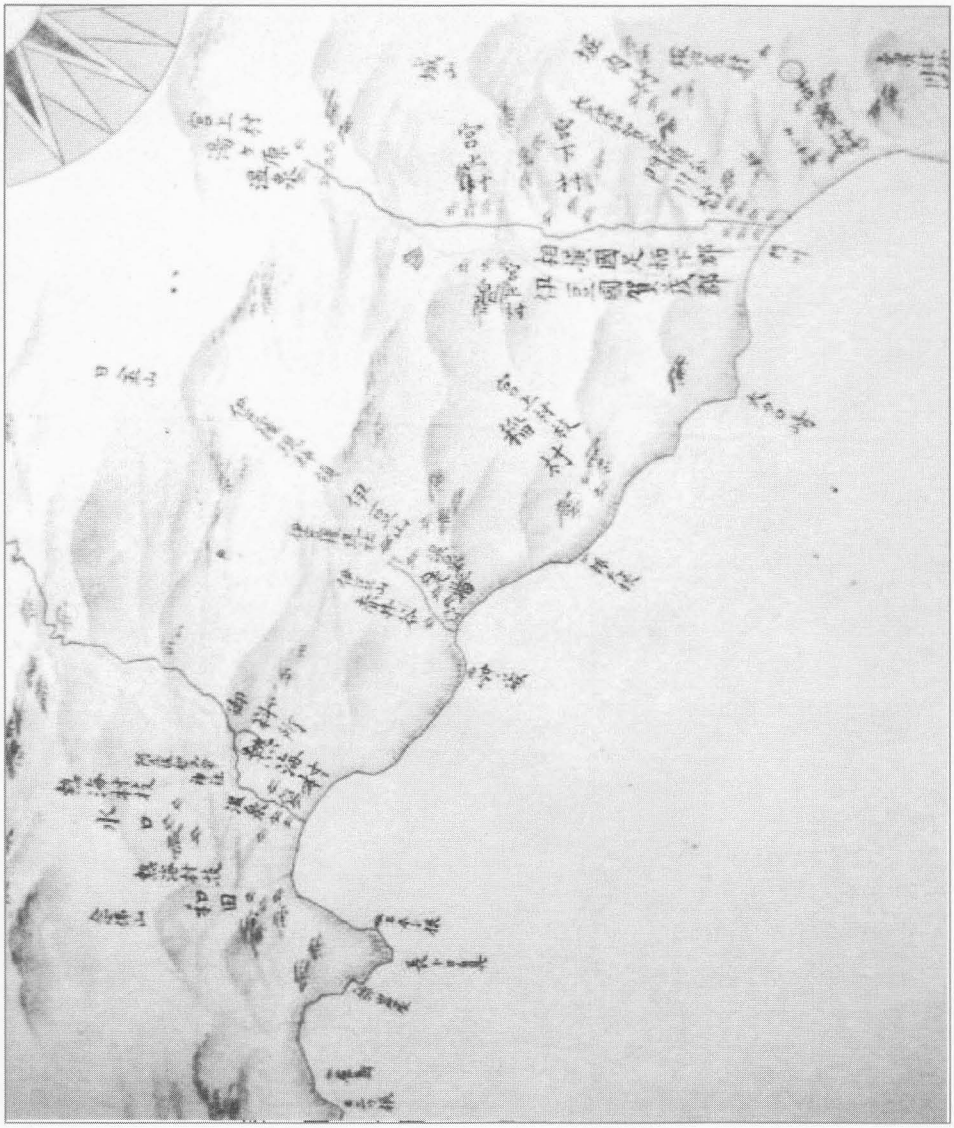
第２図　２万５千分１地形図「小田原北部」「小田原南部」の一部



第３図　大図 99 号　箱根



第４図　箱根周辺彩色地形図



第５図　大図 100 号　熱海・湯河原

第６図　２万５千分１地形図　「熱海」

岸の台地を刻んで早川が北流し仙石原で東に流れの向きを変えている。大図を見ると蘆湖と仙石原の間には山並みが描かれていて、早川が蘆湖を水源とするようには描かれていない。これは、おそらく、芦ノ湖北岸の小高い台地を分水界と考えて山並みを描いたのであろう。芦ノ湖湖岸の測量を行っているが、早川が芦ノ湖から流れ下ることには気がつかなかったのであろう。

熱海・湯河原

第5図には、熱海、伊豆山、湯河原の温泉を描いている。これら三カ所の温泉は現在も有名な温泉場で時季を問わず観光客の多いところである。伊能測量隊は、第二次と第九次の測量においてこの海岸を測っている。第二次は享和元年(一八〇一)四月二六日から五月三日まで七泊している。測量日記によれば、この間に忠敬は、持病の痰を発し、地図の下書きを行っている。湯治も兼ねたのであろう。測量日記には温泉のことはあまり記されていないが、伊豆山にも温泉のあることを記し、伊豆山は村とは言わず、伊豆権現神領三〇〇石であることの記載がある。*2

第九次測量は、忠敬の参加はなかったが、測量日記には名所の多いことなどが詳しく述べられていて、熱海周辺だけで相当の日数を費やし文化十二年(一八一五)から文化十三年(一八一六)の暮れから正月には熱海に長逗留をしている。文化十二年の十二月十四日に伊豆の網代湊から熱海に到着して以後、一六日までは熱海に滞在し、熱海を拠点に周辺を放射状に測量している。一七日に伊豆山、一八日一九日と湯河原、二〇日真鶴、二一日二二日と根府川、二三日に小田原と止宿して二四日には再び熱海に戻り、二五日に初島に渡ったのち、二六日から歳を越して翌文化一三年の正月二五日まで熱海に滞在した。熱海の周辺では、一ヶ月以上も費やしているが、特に年末年始に熱海に一ヶ月逗留しており、この間に地図の下書きを行ったのは勿論だが、長期間にわたった測量も最終に近づき、温泉で疲れを癒すと言うこともあったのではないか。

伊豆山では伊豆権現のことが測量日記に詳しく述べられており、海岸の測線から分岐し伊豆権現まで測っている。海岸から坂道となり下の権現といわれる多数の社殿を見ながら行く。薬師堂や観音堂などがあり、仏堂が続く。日記によれば、さらに一の鳥居、二の鳥居を過ぎ、本社殿に至り、測量打ち止めとする。「式外天下第二の惣廟関東惣鎮守走湯山東明寺明鏡院伊豆御宮、神体千手観音と僧家にて崇む」と日記には記され長文なので引用しないが、当時の神仏混淆の様子がよくわかる。「御朱印高三百石、已前は二百石の処、御当家関原御一戦御利運御祈祷後神君百石を増し賜り。都合三百石拝領」とあり、伊豆権現は、社領三〇〇石を与えられていた。礼拝してから下り、海岸の走り湯の温泉屋に止まっている。走り湯には、湯壺が七カ所あり、湯壺から筧を渡して滝のように流し、そこには冷水がわき出ていて、ちょうど湯加減がよいといったことも記されている。湯壺は非常に熱く、酒の燗をするという。「温泉壺方九尺計なり」とあるので、三メートル弱四方の源泉であったということだろう。

湯河原も、河岸の門川村から分岐し、温泉まで打ち上げ測量を行っている。日記には、「此辺に伊豆山大門ありし故此村の名あり」と記され、門川村の地名の由来を述べている。大図には、宮下村と宮上村の村名が見られるが、湯河原は宮上村に属している。「此辺名所日金山高し」と日記には書かれており、このあたりからの日金山の眺めがよか

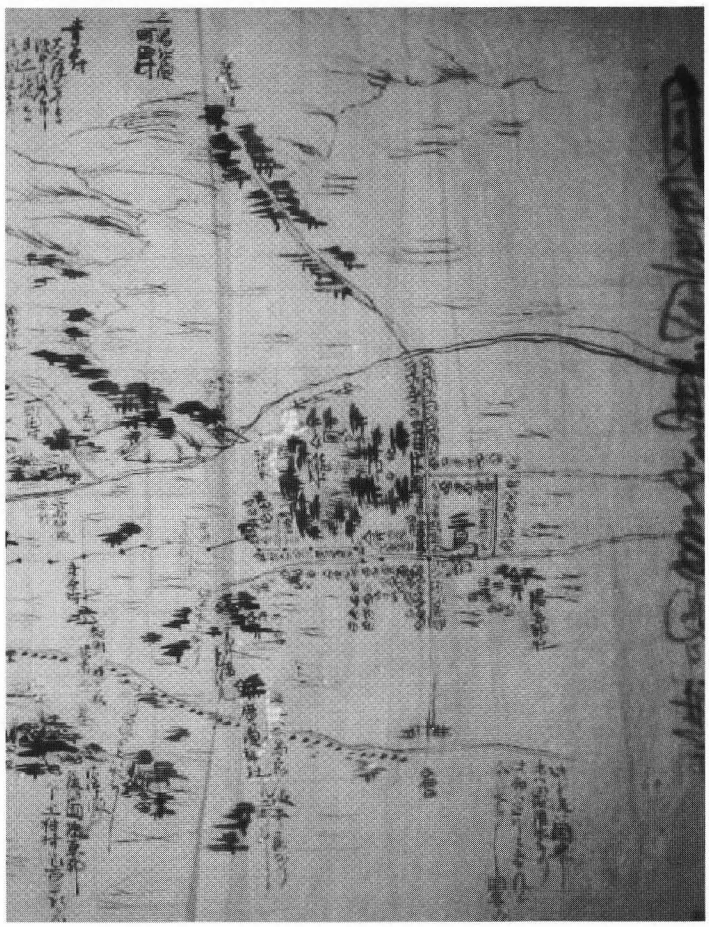
*2佐久間達夫「伊能忠敬測量日記本州東海岸測量篇」

ったのであろう。宮上村泉のそばに立派な甍が描かれているが、これは日記から判断すると肥田山保善院という禅宗の寺であろう。「黒印高拾石壱斗七升七合」との記載がある。この寺は北条家の時代から代々の小田原藩主の寄附があると日記には記されている。

三島・沼津

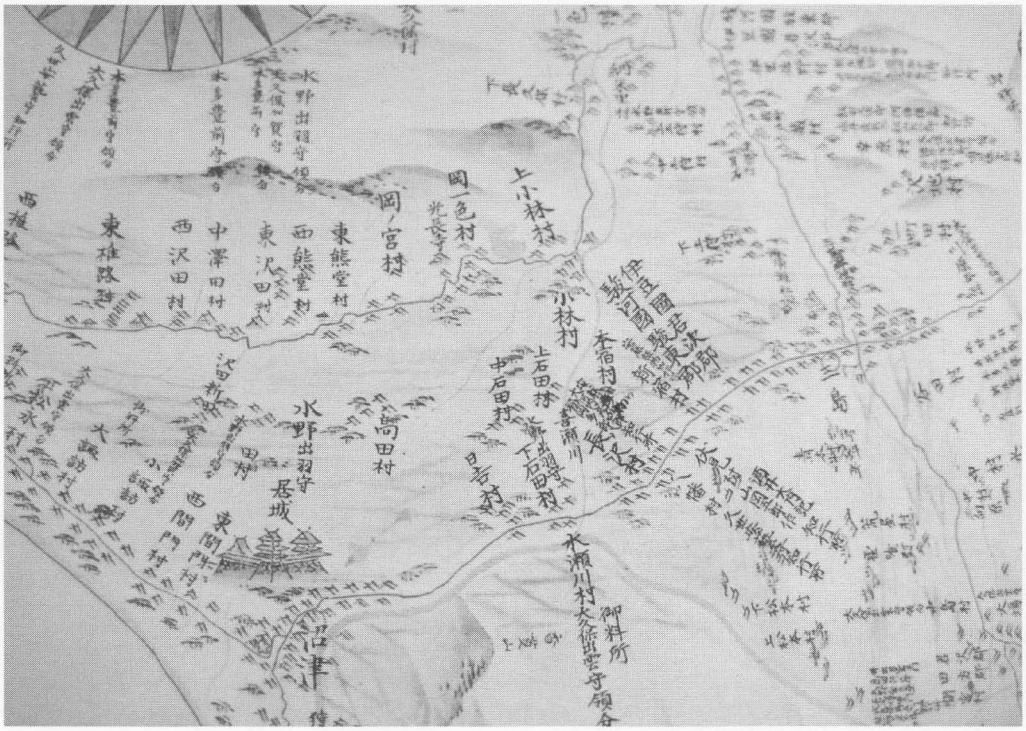
三島・沼津のあたりは測線の密度が高い。第二次、第四次、第五次、第九次の測量で沼津・三島とその周辺の測量を行っている。第五次測量では、行き帰りとも東海道を通って測量しているが、第二次においては、伊豆半島から沼津・三島を通り、熱海に山越えしている。第九次の測量においては、修善寺方面や富士山麓、愛鷹山麓の測量を行っている。第四次では、狩野川の河口から海岸を測量している。第二次測量の時には、享和元年（一八〇一）四月三〇日に、三島宿において師の高橋至時が送った量程車を受け取り、韮山代官の手代山田佐四郎という人が、韮山代官へ算術や暦術の指南をしている参州吉田（現在の豊橋）の斎藤九郎佐衛門を連れてきて測量暦談に及んだと測量日記には書かれている。*3

三島は大きな宿場である。三嶋明神社と廣瀬社の二つの神社が描かれている。三島明神は、御朱印高五三〇石で豆州一ノ宮である。第九次測量の測量日記には「三嶋明神鳥居繋。それより神前迄打込。」とあり、大図の上で三嶋明神社に向かって分岐した短い測線がこれに当たるのであろう。三嶋明神は御朱印高五三〇石で、周りには、社家町が広がっていることが測量日記に記されている。さらに、「（前略）三島明神鳥居左柱より始、天城通下田道測量、ヤ印迄一町二十一間。従是式内神社へ打上げ。」とあり、これは、三島から修善寺へ向かう測線から分岐する短い測線がこれに当たるのであろう。現在この位置には、楊原（やなさはら）神社が三島大社の摂社として存在する。廣瀬社は、現在の三島駅のすぐ南にある楽寿園にある。



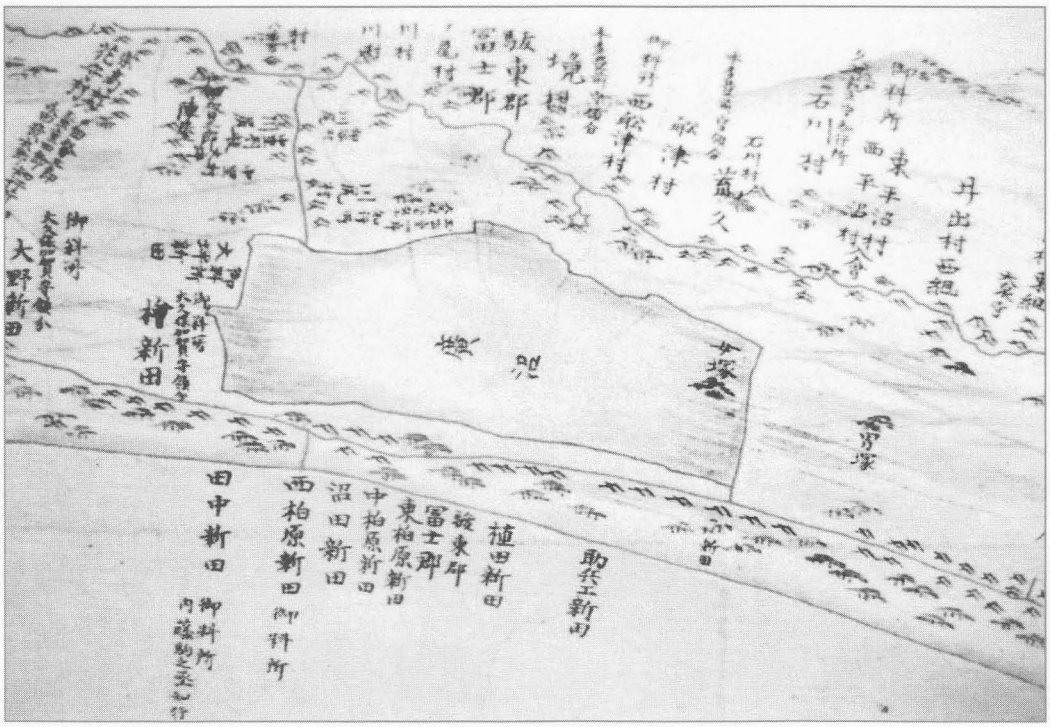
第７図　麁絵図（三島の部分）　（伊能忠敬記念館蔵）

*3佐久間達夫「伊能忠敬測量日記本州東海岸測量篇」による。



第８図　大図 101 号　三島・沼津

第９図　２万５千分１地形図　「三島」「沼津」の一部



第10図　大図101号　浮島が原

第11図　2万5千1地形図　「吉原」「沼津」の一部

測量日記には「左六町計畑中式内広瀬神社、(中略)此社廻り溜池あり。自然湧水にて是を千貫樋にて伊豆駿河へ、用水へ引水上なり。左畑中一町許田地中より水元桜川水上也。」とあり、現在も見られる池が当時は用水として伊豆駿河を潤していたことが記されている。大図にも池が描かれている。第7図の麁絵図にも、三島大社が社叢に囲まれている様子が描かれているほか、廣瀬神社、楊原神社が描かれている。

沼津は、水野出羽守三万石の城下町であり、宿場町でもある。水野出羽守とは、水野家八代忠成で、享和二年(一八〇二)に先代忠友の死去にともない、藩主となっている。水野忠友は、老中として権勢を振るった人で水野家中興の英主といわれている。忠成は、忠友の婿養子となった人で、元は旗本の次男であるが、老中に昇進し、五万石まで加増されている。*4

愛鷹山の山麓を通る測線に沿って小林村、上小林村、岡一色村の村名が見える。そこには、池と光長寺という寺院が描かれている。池は、現在の地形図を見ると、門池と注記された池がありこの池であろう。光長寺は、法華宗本門流の大本山である。辻之坊、南之坊、東之坊、西之坊、山本坊の五つの塔頭があり、桜の名所でもある、仏教説話を集めた「宝物集」は、国の重要文化財になっている。

浮島が原

第10図は、東海道原と吉原の間に広がっていた浮島が原の図である。大図には、廣沼と書かれた沼があり、周囲を測量され、測線に囲まれている。多数の小河川が流入しているが、沼の輪郭は、明瞭ではない。

*4工藤寛正編「江戸時代全大名家事典」による。

草色で周囲が塗られており、葦芦が茂り、湿地と沼が遷移して湖岸は不明瞭であったのであろう。このあたりからの富士山の眺めは素晴らしいものであった。

廣沼と駿河湾の間には東海道が通り、東、中、西の柏原新田の地名がある。柏原は、原と吉原の間の宿で、鰻の蒲焼きが名物であったそうである。

男塚、女塚があり、松の木様の樹木が描かれている。「東海・木曾両道中懐寶圖鑑」*5には、男島、女島と沼の中に存在する島が描かれている。広い沼沢地の中に突出した島があったのであろう。現在、浮島が原は完全に埋め立てられ、往時を偲ぶよすがもない。男塚、女塚も地形図上にも痕跡すらない。

第1図、第3図、第5図、第8図、第10図は、国立国会図書館所蔵の伊能大図の一部である。「伊能大図総覧」から引用した。
第2図、第4図、第6図、第9図、第11図は、(財)日本地図センターの彩色地形図の一部を引用した。
第7図は、伊能忠敬記念館所蔵の麁絵図(三島の部分)を引用した。

(ほしの　よしひさ・代表理事・(社)日本測量協会副会長)

*5天保十三年(一八四二)　人文社複刻

伊能達（みち）の婿選びに奔走した伊能豊秋（とよあき）

佐久間　達夫

伊能忠敬が、佐原村（現千葉県香取市佐原）の伊能三郎右衛門家の婿養子に入ったとき、三郎右衛門家の後見人であった伊能豊秋（通称七郎右衛門）は、三郎右衛門家三代景満の二男・景忠が、常陸国浮島村（現茨城県稲敷市浮島）の高瀬外記の娘を娶とり、佐原村八日市場に分家した伊能七郎右衛門家の四代目である。

●　婿選びに奔走

伊能豊秋は、享保七年（一七二二）に出生。明和九年（一七七二）五月二十三日に五十一歳で死去するまで、家業に励み、本家（伊能三郎右衛門家）や村政に献身的に尽くした。なかでも、三郎右衛門家で、「達」が先夫・景茂に病死されたことを憂慮し、ミチの母・民の生家であり、タミの実兄であった南中村（現千葉県多古町南中）の平山藤右衛門季忠と協力してミチの婿選びに奔走した（「旌門金鏡類録」伊能家系年譜）。

豊秋は、当初、季忠の三人の男子の中の一人か、分家の平山儀左衛門光賛の二男泰光をミチの婿にと所望した。しかし、季忠は、「日蓮宗の教義から宗派を変更してまでも、他の氏を嗣がせることはできない」と、断った。

そこで、季忠の妻・トウの弟である上総国戸田村（現山武市戸田）の麻生某に白羽の矢をたてたが、これも話がまとまらず、姻戚の上総国小堤村（現横芝光町小堤）の神保貞恒の二男・三治郎をミチの婿に推薦した。

ミチの婿選びの経過については、「伊能豊秋日記」に次のように記してある。

資料一　伊能豊秋日記　宝暦十二年　　伊能忠敬記念館所蔵

一月一八日　三郎右衛門方に養子の相談御座候。

一月二一日　三郎右衛門方より養子の儀に付き、上総へ参り見届け呉れ候様御頼みに御座候。

一月二四日　三郎右衛門養子の儀に付き、中村へ罷り越し、右養子相談、藤右衛門へ申し談じ候所、上総辺に宜敷き仁、これ有る由申すに付き、右相談仕り度き儀相頼み、尤も此方親類共へも申し聞かせ追ってお願い申すべき段申し談じ中村に泊まる。

一月二五日　三郎右衛門養子の儀、藤右衛門方へ相頼み、罷り帰り申し候。夜の五ツ時に当村へ着仕り候。

一月二六日　養子の儀、三郎右衛門へも中村様子申し聞かせ候。

二月二二日　川船御役所の儀に付き、佐原屋（庄兵衛）へ参り申し候処、榎様御帰り申さず由にて、帰りかけに小網町へ立ち寄り、治郎右衛門殿に御意を得、三郎右衛門養子の儀申し談じ候処、治郎右衛門相違これ無く候。

二月二七日　三郎右衛門方より養子の儀に付き、聞き合わせに飛脚の忠兵衛参り、早速罷り帰り申し候。

四月一七日　今日、中村の藤右衛門見舞い申し候由。

四月二六日　たち花町、油屋平兵衛方に中村藤右衛門参り居り候に付き、三郎右衛門養子聟、先達て相頼み置き候故、久兵衛同道罷り越し申し候。

六月一八日　中村藤右衛門参り、三郎右衛門方にて、平右衛門、下拙罷り越し候えば、三郎右衛門養子の儀、藤右衛門方より相談御座候。

八月　三日　中村藤右衛門より三郎右衛門養子の儀に付き、手紙参り申し候に付き、三郎右衛門方寄り合い、右養子、年若にて気に入り申さず由、承わり申し候。

九月二四日　三郎右衛門養子の儀、段々相談仕り候え共、片付き申さず所、今日、坂田村神保三治郎と申す仁へ取り掛かる積もりに罷り成り申し候。

十月二三日　中村藤右衛門、三郎右衛門養子の儀に付き見舞い。

十一月二九日　三郎右衛門養子相極り、此方へ引き取り日限相談仕り候。養子なかうど三郎右衛門にて下拙と申し候え共、縁引き仕り平右衛門に仕り候。

十二月七日　日和吉、三郎右衛門婚礼に付き、ちょうしより座頭見舞いに参る。祝儀ごぜ共に銭三貫弐百文にて仕り候。さわ市、為市両人へ渡す。

十二月八日　日和吉、三郎右衛門方婚礼。中村迄迎え久兵衛、中村より荷物人足、岩部新田にて此方人足共請取り、中村人足へは祝儀仕り罷り帰り申し候。

養子の儀は、坂田郷の内小堤村と申す所、神保氏、中村藤右衛門方養子の積もりにて三郎右衛門方へ遣わされ申し候。中村藤右衛門、坂田神保利右衛門倅利八送り参り候。此方三郎右衛門親類共罷り出て婚礼首尾よく相調い申し候。

十二月九日　日和吉、三郎右衛門方にて、町内百姓の内、其の外拠ろ無き方振舞い御座候。

十二月十日　日和吉、三郎右衛門養子源六、親類其の外今日相廻り申し候。第一、牧野先祖石とうへ参り、御隠家隠居、代官名主七右衛門方へ見舞い。佐原親類其の外、永沢治郎右衛門、忠右衛門、半十郎、仁兵衛、半右衛門、八郎兵衛、平左衛門、市兵衛、兵左衛門、十左衛門、組頭藤左衛門、伝右衛門、浜宿名圭三右衛門、机山、甚右衛門、新宿茂左衛門、権之丞、次郎左衛門、平右衛門、七左衛門、太左衛門、止宿名主七右衛門。

十二月一七日　永沢治郎右衛門方、三郎右衛門養子源六振舞いに付き、平右衛門、茂十郎、下拙参り候。

「伊龍豊秋日記」には、三郎右衛門家の養子の相談は、宝暦十二年一月十八日から記されている。その後、紆余曲折の結果、同年十一月二十九日に神保三治郎に話が纏まり、仲人は、伊能一族の伊能平右衛門（現香取市佐原諏訪神社宮司の祖）に依頼することになった。

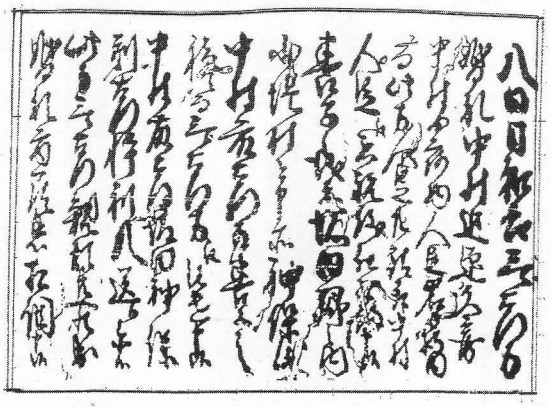
婚礼は、同年十二月八日に行なわれ、南中村の平山季忠が仮親となり、平山家へは、三郎右衛門家の番頭柏木久兵衛が迎えに行き、平山家からは季忠が、神保家からは忠敬の父の兄の子・利八（神保家八代幸宗の幼名）が、佐原迄三治郎を送ってきた。

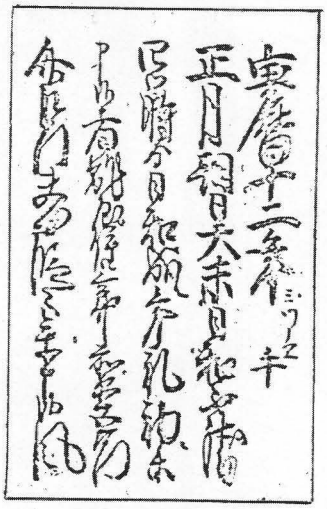
資料二　伊能七郎右衛門家略家系図

伊能景満（三郎右衛門家三代）
- 長男景善（四代）
- 長女
- 二男景忠（七兵衛）
  - 八日市場へ分家
  - 七郎右衛門家の始祖
- 三男兵左衛門　田宿分家

二代七郎右衛門
- 三代幸左衛門
  - 四代豊秋
    - 享保七年出生
    - 明和九年五一歳没
    - 妻　文化十三年八一歳没
    - 五代忠閭（たださと）
      - 宝暦九年出生
      - 天保一三年八五歳没
      - 妻　潮来村榊原吉右衛門の娘　文政十年没
      - 二男七之助（幸左衛門）
        - 佐原村新地へ分家
        - 宝暦一一年出生
        - 文政五年　六二歳没
      - 六代俊則……十一代楯雄
        - 永沢忠四郎俊安の長男
        - 安永九年出生
        - 嘉永三年七一歳没
        - 妻　ミ子
        - 常陸国　海老沢三左衛門の娘

伊能忠敬の婚礼の日の様子（伊能豊秋日記）





伊能豊秋日記
伊能忠敬記念館所蔵

伊能忠敬が、伊能家の主人となって数年後の明和六年（一七六九）六月、牛頭天王社（八坂神社）の祭礼で、本宿組の名主後見であった伊能忠敬（二五歳）と、浜宿組の永沢治郎右衛門俊順（二六歳）とが

山車（だし）の引き回しのことで責任をとり、義絶してしまった。

佐原村で両家といわれていた伊能家と永沢家の義絶を心配した親族の伊能権之丞と伊能茂左衛門は、伊能豊秋宅を訪れ、二人の和解の仲介を願った。そこで豊秋は、権之丞宅で、浜宿組名主五郎兵衛、本宿組名主藤左衛門、それに権之丞、茂左衛門の出席を願って、めでたく両家の和解へと導いた。（「伊能家家牒」「伊能豊秋日記」）。

● 儒学や俳諧での交流

伊能豊秋の長男・忠閭は、常総地方（常陸国・下総国）で、俳諧の師匠となり、大勢の弟子たちに、この道の指導に当った。牧野村の古刹・妙光山観福寺の本堂の前に、

暖（ぬくもり）を　ふり敷く物の　おぼろ月

伊能式部　藤原鳳後

常陽潮来筆弟中建之

天保四巳年二月。

という俳句が、自然石に刻字されている。

また、潮来市の海雲山長勝寺の仏殿前に、文治年間に源頼朝が植えたといわれている「文治梅」と並んで、

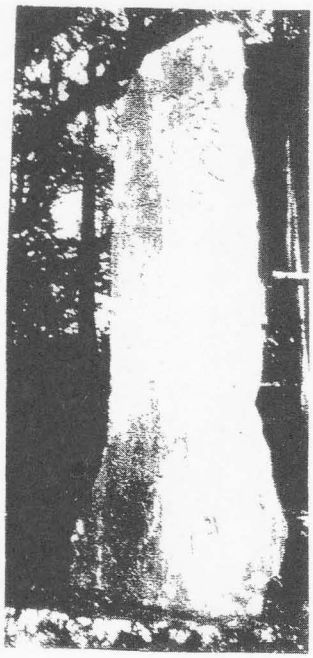
古乃者那也　曾毛加麻久良能　鐘乃銘　鳳後

（この花やそも鎌倉の　鐘の銘）

文永十一戌年仲冬

筆弟建。

という句碑が建てられている。この二つの句碑は、刻字されている文字から忠閭の弟子たちが建立したものである。このことから、忠閭がこの道にたけていて、弟子たちに慕われていたことが推察される。



伊能忠閭（鳳後）の句碑

香取市牧野　観福寺

伊能忠閭の句碑　潮来市　長勝寺

窪谷妙真の歌碑

潮来市　浄国寺

晩年の忠誾は、妻の生家である潮米村の榊原吉右衛門（現当主賢次）の屋敷内に居住し、門下生の指導に励んだ。したがって、忠誾夫妻の墓石は、神原家の菩提寺である潮来市の浄国寺の塋域にある。忠誾の戒名は、「鳳後院岱宗忠誾信士」、妻は「修善院階誉道宣恭貞信女」という。

浄国寺には、忠誾と縁戚に当る「窪谷セヤ」の歌碑も建っている。セヤは、佐原村の永沢治郎右衛門家の分家・忠右衛門尚俊の娘である。潮来村の窪谷維則に嫁いだが、夫に早死され、子供もなかったが、再婚もしないで「妙真」と名乗り、近隣の女子教育に携わると共に、和歌や書の道に励んだ。文政十三年三月十四日、六十八歳で死去。戒名は、「相誉貞節妙真信女」という。セヤ死後、門人たちが、セヤの徳を慕って歌碑を建てたのが、浄国寺の歌碑である。

「忠敬先生日記」によると、セヤは、文化十三年二月九日、江戸亀島町に住んでいた伊能忠敬を訪問している。このとき、忠敬は七十二歳、セヤは五十四歳であった。

資料三　永沢忠右衛門家の略系図

永沢忠右衛門家尚俊
伊能七左衛門の子
享保十九年出生
文化元年七一歳没
妻　永沢治郎右衛門征俊の娘

忠四郎俊安
永沢半右衛門の子
文政九年六九歳没
妻　その

セヤ（妙真）
潮来村窪谷維則に嫁ぐ。
宝暦十三年出生
天保元年六八歳没

吉郎兵衛俊定
妻　ソヨ

俊則
伊能七郎右衛門忠誾の養子
安永九年出生
嘉永三年七一歳没
妻　ミネ

伊能忠敬の四番目の妻といわれている「大崎栄」は、伊能忠誾・窪谷セヤと同時代の人である。エイは、窪谷セヤの嫁ぎ先や、忠誾の妻の生家にも近い常陸国清水村（現潮来市清水）の大崎次郎兵衛の娘である、といわれている。エイは、伊能忠敬の儒学の師である久保木清淵について学び、その後、江戸へ出て、忠敬の蝦夷地測量の地図作成に協力したが、数年にして忠敬のもとを去ったようである（「星学手簡」『香取民衆史』）。

なお忠敬が、蝦夷地測量で旅にでている時、忠敬は、忠誾の弟・幸左衛門にエイの面倒を依頼している。

伊能忠誾（一七五九～一八四二）、窪谷セヤ（一七六三～一八三〇）、大崎栄（一八〇〇、蝦夷地の地図作成）について述べたが、これらの人々は、伊能忠敬（一七四五～一八一八）、久保木清淵（一七六二～一八二九）、宮本茶村（一七九三～一八六三）、それに血縁関係にあった永沢治郎右衛門一族と、儒学や俳諧などを通して交流がなされ、互いにこの道に励んだことが推察される。

香取市佐原の伊能忠敬記念館には、忠敬自筆の「偶記」という記録があり、国の重要文化財に指定されている。これは、忠敬が、佐原を出立して江戸へ登ったとき、旅路で月などを詠んだ歌で、七首記され

ている。（記述年不詳）

資料四　偶記　伊能忠敬記念館所蔵

○　九月十日、佐原村越立いでて。

・なか武連者　者や故郷の　山々も
　雲かく連して　見へ須成介り
（眺むれば　はやふるさとの　山々も
　雲隠れして　見へずなりけり）

●　其夜、船中に而、月越見て。

・秋の夜の　く満なくさへし　月影は
　四方に水を　敷しかと見ゆ
（秋の夜の　隈なく冴えし　月影は
　四方に水を　敷しかと見ゆ）
・風吹者　村雲ちりて　秋の夜乃
　波間にうつる　影春める月
（風吹けば　村雲散りて　秋の夜の
　波間に映る　影そめる月）

●　夜半后、月の入る越見て。

・さへ渡る　月のいつ古可　山の者に
　かか里て今者　見へ須成介り
（冴え渡る　月のいづこか　山の端に
　掛かりて今は　見へずなりけり）

○　九月十二日、朝、白井の原越通里て。

・秋の野の　道ふみ分けて　行く旅は
　朝露深く　袖もくちなん
（秋の野の　道ふみ分けて　行く旅は
　朝露深く　袖もくちなん）

○　十三日之夜、明月（名月）越見て。

・秋の夜乃　名尓お茂月の　中定る
　く満なくさへし　影の志付けさ
（秋の夜の　何をも月の　中きめる
　くまなく冴えし　影の静けさ）

○　十四日之夜、目前に、雁南幾渡る越見て。

・秋の夜乃　く満南く春める　月影に
　女でてや雁の　鳴渡る月
（秋の夜の　隈なくすめる　月影に
　目出てや雁の　鳴き渡る月）

佐原村・潮来村付近図　伊能忠敬関係地名

番号	近世の村名	現在の市町村名	ことがら
一	高浜村	石岡市高浜	伊能忠誨の妻・くに出生地（笹目八郎兵衛の娘）
二	古渡村	稲敷市古渡	大川治兵衛成顕出生地（小川弥右衛門の子・成定の娘婿）
三	浮島村	稲敷市浮島	伊能七郎右衛門景忠の妻出生地（高瀬外記の娘）
四	清水村	潮来市清水	伊能忠敬の内妻・栄出生地（大崎次郎兵衛の娘）

五	潮来村	潮来市潮来
		永沢忠右衛門尚俊の娘・セヤの嫁ぎ先（窪谷維則の妻） 伊能忠閭の妻の出生地（榊原吉右衛門の娘） 宮本茶村（儒学者）の出生地 浄国寺（伊能忠閭夫妻の墓地） 浄国寺（窪谷セヤの歌碑） 長勝寺（伊能忠閭の句碑）
六	津宮村	香取市津宮
		大川治兵衛成定出生地・墓地 久保木清淵出生地・墓地
七	佐原村	香取市佐原
		伊能忠敬婿養子先（伊能三郎右衛門家） 伊能豊秋出生地 伊能忠閭出生地 永沢忠右衛門尚俊宅
八	牧野村	香取市牧野
		観福寺（伊能三郎右衛門家墓地） 観福寺（伊能忠閭の句碑）
九	岩部村	香取市岩部
十	南中村	多古町南中
		平山藤右衛門季忠出生地 伊能長由の妻・たみ出生地
一一	太田村	旭市太田
		伊能忠敬の娘・篠の嫁ぎ先（加瀬修助の妻）
一二	小堤村	横芝光町
		神保貞恒（伊能忠敬の父）出生地
一三	戸田村	山武市戸田
		平山季忠の妻・トウ出生地
一四	龍ヶ崎村	龍ヶ崎市
		伊能忠敬の娘・琴の嫁ぎ先（松田丈右衛門光遠の妻）

香取市佐原の諏訪神社裏の展望台から茨城県方面を望むと、手前に利根川の本流がゆったりと流れ、その向こうに新島十六島、潮来、牛堀の家並が眺められる。

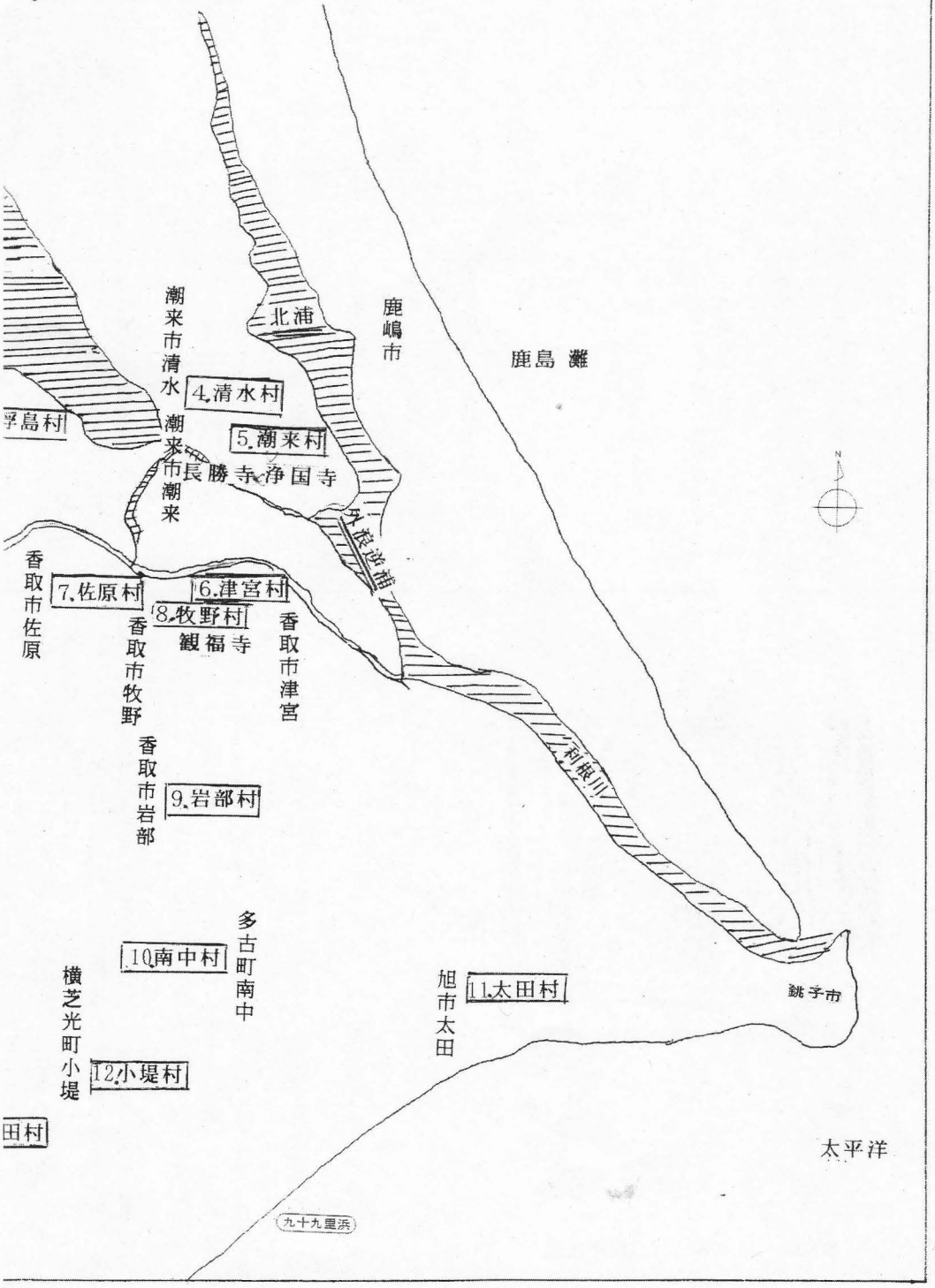
かってこの地域は、「香取の海」と呼ばれ、その後、北浦、外浪逆浦、霞ヶ浦と呼称された広大な湖沼と利根川によって水運の中継基地として栄えていた。

したがって、湖岸の村々には、河岸問屋や船持ちが出現し、人々や荷物の往来が繁くなった。また、それによって、学問の交流や、新たに姻戚関係ができていった。なお、伊能忠敬が佐原の伊能三郎右衛門家に入り婿してからは、忠敬の出生地、上総国九十九里浜に近い村々の家との婚姻が多くなる。前述したような人々がそれを物語っている。

（さくま　たつお・伊能忠敬研究家）

多古町　日本寺　江口俊子氏画

佐原村・潮来村付近図

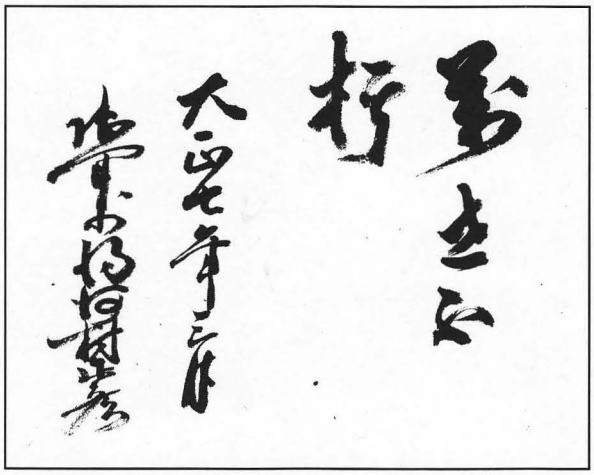

北浦
鹿嶋市
鹿島灘
潮来市清水
4.清水村
浮島村
5.潮来村
潮来市潮来
長勝寺
浄国寺
外浪逆浦
香取市佐原
7.佐原村
6.津宮村
8.牧野村
観福寺
香取市津宮
香取市牧野
香取市岩部
9.岩部村
利根川
多古町南中
10.南中村
横芝光町小堤
12.小堤村
11.太田村
旭市太田
銚子市
田村
太平洋
九十九里浜
N

石岡市高浜
1.高浜村
つくば市
茨城県
土浦市
霞ケ浦
稲敷市古渡
2.古渡村
稲敷市浮島
3.浮
竜ヶ崎市
14.竜ケ崎村
利根川
手賀沼
印旛沼
成田市
千葉県
13.戸田
山武市戸田
東京湾
千葉市

芳名録より

―佐原伊能家を訪れた人々―

伊能陽子



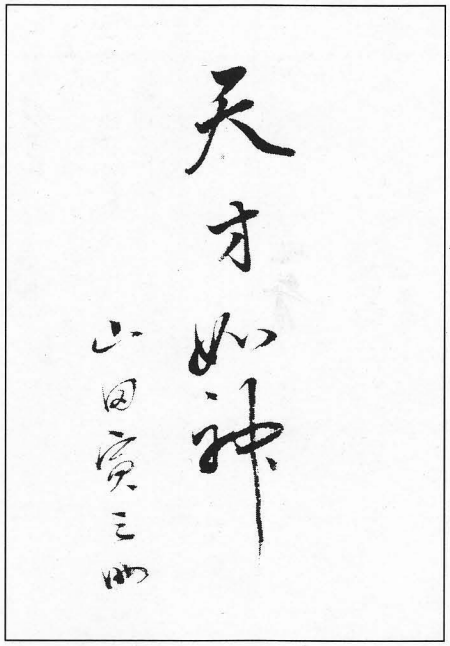
萬世不
朽
大正七年三月
陸軍少将　河村正彦

河村　正彦
かわむら　まさひこ（一八六八～一九二四）

山口県出身。陸軍中将。明治三十年陸軍大学校を卒業（十一期）日清戦争、日露戦争に出征。大正七年、陸軍中将として歩兵学校校長に就任。

※揮毫は大正七年三月なので少将となっている。陸軍歩兵学校は明治四五年、現千葉市天台に創設された。慌て者の私が海軍と思い込んで、白根さんにお手数をかけてしまった。陸軍の方のご来訪は珍しいこと。

（フリー百科事典『ウィキペディア』）



天才如神
山田寅之助

山田　寅之助
やまだ　とらのすけ（？　～　？）

※第一六号から三八号まで三十人あまりの方の墨跡をご紹介したが、判読できない、どなたか分からないという壁にぶつかり、三九号から四五号までお休みをしてしまった。
気を取り直して再開、会員のご協力や前田編集長のインターネット検索に頼っているのだが、今回、山田寅之助氏が二人現れ、またも悩みの種ができてしまった。
新潟県立巻中学校（現　巻高）第十代校長と仙台五橋教会の牧師さん、どちらの山田さんであろうか。私としては「神」にこだわって牧師さんではなく、校長先生であろうと考えたのだが。
年齢を推定したり、ご縁を辿ったり新しい挑戦を楽しんだり悩んだりが続くようである。どうぞご協力を・・・。

（いのう　ようこ・伊能忠敬研究会顧問）

研究レポート『伊能忠敬』（四）

伊能忠敬の第二次測量

石谷春香

第六章　伊能忠敬の第二次測量

一　第二次測量

伊能忠敬は神奈川県を第二次。第四次、第五次、第六次、第七次、第八次の測量の時に通っています。

この中で神奈川県の海岸線を測量したのは第二次測量の時です。

この第二次測量の時の神奈川の様子を詳しくみてみます。

忠敬は第一次測量の成功によって、第二次測量もできるようになりました。最初は前回測量できなかった蝦夷地の西海岸を希望しましたが、断られました。そのかわりに三浦半島、伊豆半島、房総半島、東北の太平洋岸の測量の許可がおりました。第二次測量は前回よりもていねいに測量するため歩測でなく間縄で測ることにしました。第二次測量は六人です。

伊能忠敬（五十六歳）
平山郡蔵
平山宗平（平山郡蔵の弟）
伊能秀蔵（敬慎）（忠敬の二男）
尾形慶助
嘉助

中央出版『日本を足で測った男』画　神江里見

出発は一八〇一年（享和元年）四月二日（いまの五月十四日）三浦半島、伊豆半島を測量し一度、江戸に帰り記録の整理をします。六月十九日（いまの七月二十九日）には今度は房総半島から東北地方の太平洋岸を測量。下北半島を一周して十一月三日（いまの十二月七日）に三厩につきました。帰りは奥州街道で江戸に十二月七日（いまの一月一〇日）に帰りました。

第二次測量は全部で二三〇日間。伊能隊の旅行全距離は二九五一km でした。忠敬は第二次測量で神奈川県を一八〇一年（享和元年）四月二日（いまの五月十四日）から二十六日（六月七日）まで測量しています。

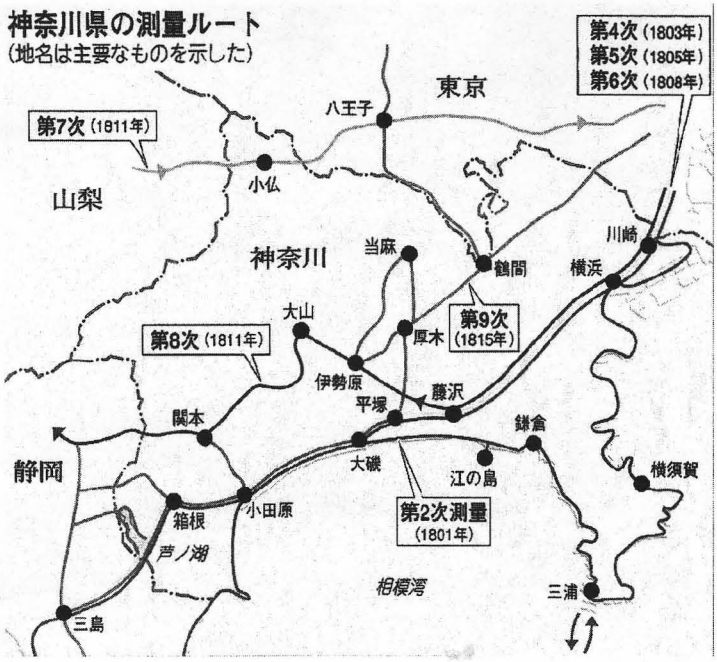
二　第二次測量の測量日記

伊能忠敬の『測量日記』から第二次測量出発から神奈川県の部分を見てみます。

一八〇一年（享和元年）四月二日（いまの五月十四日）朝よりくもり。五ツごろ（いまの八時ごろ）平山郡蔵、平山宗平、伊能秀蔵、尾形慶助、嘉助の六人で富岡八幡宮に参拝して出発。伊能家の関係者の人は品川まで見送り。「村田」という料理茶屋で昼食して別れる。午後より小雨。八ツごろ（いまの二時ごろ）より中雨。七ツごろ（いまの四時ごろ）に川崎宿に到着。郡蔵、秀蔵、慶助は手分けして大森、羽田の海岸沿いを測量し夕方川崎で合流。川崎宿（いまの川崎市川崎区川崎）新田屋平三朗宅に宿泊。

四月三日（いまの五月十五日）朝より雨。逗留。六郷川（いまの多摩川）の川幅を測量。夜、天体観測。川崎宿（いまの川崎市川崎区川崎）鶴屋十右衛門宅に宿泊。

四月四日（いまの五月十六日）五ツごろ（いまの八時ごろ）出発。郡蔵、宗平、秀蔵は川崎から大師河原へ分かれる。忠敬は慶助を連れて東海道を測量。東子安村、西子安村、新宿村、神奈川宿、芝生村を測量。八ツ半後（いまの十時ごろ）ようやく到着。大師河原より市場村までの約四里を案内なしで、雨の暗い中を帰ってきたので遅くなる。忠敬は事前に知らせておいたのに案内人がいないので怒りました。保

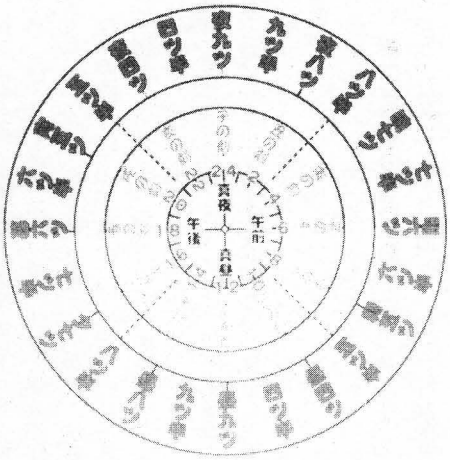


土ヶ谷宿（いまの横浜市保土ヶ谷区保土ヶ谷）桔梗屋利兵衛宅に宿泊。

四月五日（いまの五月十七日）五ツ半ごろ（いまの九時ごろ）より晴天。戸部村、横浜村、北方村を測量。村の人たちが間縄を手伝う。八ツごろ（いまの三時ごろ）本郷村に到着。夜、天体観測。本郷村（いまの横浜市中区本牧）組頭幸蔵宅に宿泊。

四月六日（いまの五月十八日）朝、くもり。五つごろ（いまの八時ごろ）出発。根岸村を測量。竜頭村で昼食。磯子村、公田村、雑色村、中原村、杉田村を測量。八ツ半ごろ（いまの三時ごろ）富岡村に到着。夕方より雨。富岡村（いまの横浜市金沢区富岡）十郎左衛門宅に宿泊。

四月七日（いまの五月十九日）朝より小雨。逗留。地図の整理をする。昼より大雨。富岡村（いまの横浜市金沢区富岡）十郎左衛門宅に宿泊。



四月八日（いまの五月二十日）前夜より大雨。逗留。地図の整理。船便で江戸表に手紙を出す。夜、天体観測。富岡村（いまの横浜市金沢区富岡）十郎左衛門宅に宿泊。

四月九日（いまの五月二十一日）晴れ。五つごろ（いまの八時ごろ）出発。小紫村、寺前村、洲崎村を測量。町屋村で昼食。能見堂まで測量。赤井村、宿村を測量。夜はくもり。町屋村（いまの横浜市金沢区町屋）五郎左衛門宅に宿泊。

四月十日（いまの五月二十二日）朝より晴天。五つごろ（いまの八時ごろ）出発。野島から測量。瀬戸明神、三艘を通り、室木へ出る。一覧亭。室木で昼食。浦郷村に行き、鉞切、深浦、榎戸、日向を測量。浦郷村に宿泊。宿はとても悪い。浦郷村（いまの横須賀市浦郷）市左衛門宅に宿泊。

四月十一日（いまの五月二十三日）朝より晴天。五つ前（いまの午前八時前）に出発。田浦村にて舟越、池ノ谷津を測量。長浦村を測量し、逸見村にて昼食。夜、天体観測。横須賀村（いまの横須賀市横須賀）鈴木忠五郎宅に宿泊。

四月十二日（いまの五月二十四日）朝より晴天。五つ前（いまの午前八時前）に出発。深田村、海辺に人家なし。公田村、大津村、伊勢町を測量。夜、天体観測。走水村（いまの横須賀市走水）十左衛門宅に宿泊。

四月十三日（いまの五月二十五日）朝より晴天。五つ前（いまの八時前）に出発。鴨居村、三軒家、腰掛、東浦賀を測量。九つ半後（いまの一時）に西浦賀に到着。ここより下田港まで先触を出す。西浦賀（いまの横須賀市西浦賀）伊勢屋忠兵衛宅に宿泊。

四月十四日（いまの五月二十六日）朝、くもり。五つごろ（いまの八時ごろ）出発。久比里、内川村、八幡村、野比村、長沢村、津久井村を測量。昼ごろより晴れて、夜はくもり。上宮田村（いまの三浦市上宮田）丹蔵宅に宿泊。

四月十五日（いまの五月二十七日）朝七つ半（いまの五時ごろ）に大地震。六つ後（いまの六時）に出発。菊名村、金田村、松輪村を測量。このあたりの海岸は岩場で難所である。毘沙門村、宮川村、向ケ崎村

を測量。七つ前（いまの四時前）に三崎港に到着。城ケ島の役人が来て話を聞くと、城ケ島へは道もなく、船もないというので遠くから測量。夜は曇りで天体観測できない。三崎町（いまの三浦市三崎）浅屋与治右衛門宅に宿泊。

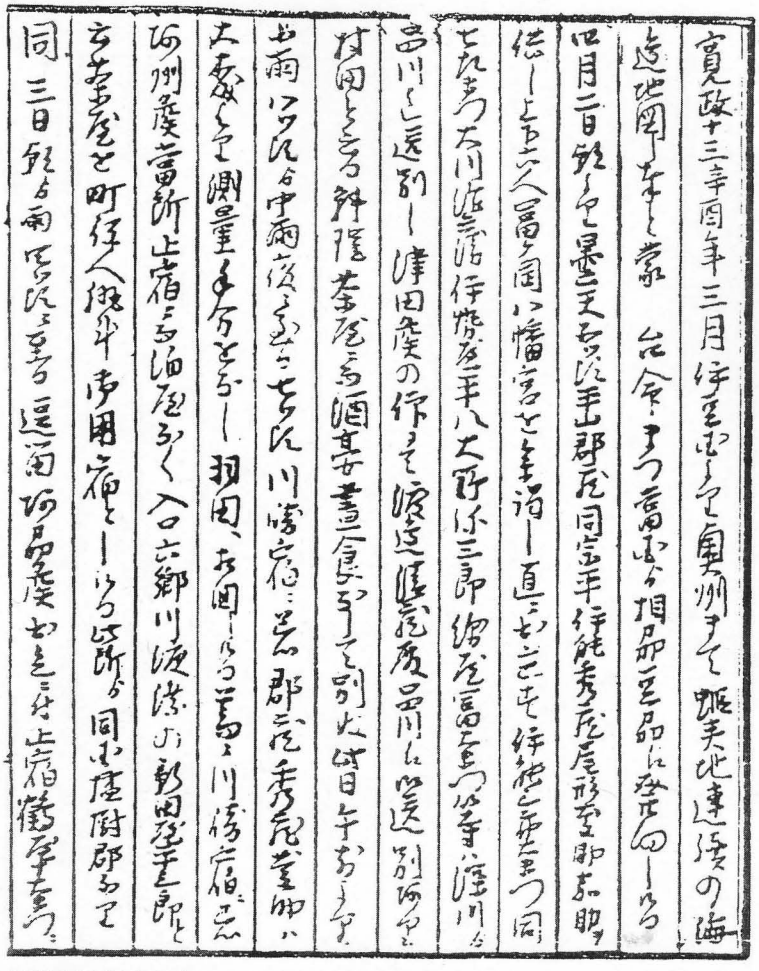
四月十六日（いまの五月二十八日）朝、くもり。六つ半ごろ（いまの七時ごろ）出発。城村、二町谷村、諸磯村、網代村、三戸村を測量。八ツ半ごろ（いまの三時ごろ）下宮田村に到着。夜もくもり。下宮田（いまの三浦市下宮田）新三右衛門宅に宿泊。

四月十七日（いまの五月二十九日）くもり。六ツ半ごろ（いまの七時ごろ）出発。和田村で雨に会う。長井村を経て、四ツ後（いまの十時ごろ）雨がやむ。森村、大和田村、長坂村に到着。七ツ後（いまの三時ごろ）佐島村に到着。七ツ後（いまの四時）より雨が降り出す。夜は大雨。佐島村（いまの横須賀市佐島）青池儀兵衛宅に宿泊。

四月十八日（いまの五月三十日）雨。逗留。終日くもり、ときどき小雨。佐島村（いまの横須賀市佐島）青池儀兵衛宅に宿泊。

四月十九日（いまの五月三十一日）朝より小雨。午後も中雨。夜は大雨。佐島村（いまの横須賀市佐島）青池儀兵衛宅に宿泊。

四月二十日（いまの六月一日）朝、晴れ。五ツごろ（いまの八時ごろ）出発。芦名村、秋谷村、下山口村、一色村、堀内村、三ケ浦、桜山村を測量。小坪村に到着。夕方、雷雨。六ツ半（いまの六時）すぎより晴れる。夜、天体観測。小坪村（いまの逗子市小坪）十郎右衛門宅に宿泊。



（伊能忠敬記念館蔵）

第二次測量（本州東海岸）出立の日の「測量日記」（1801年 寛政13年4月2日）

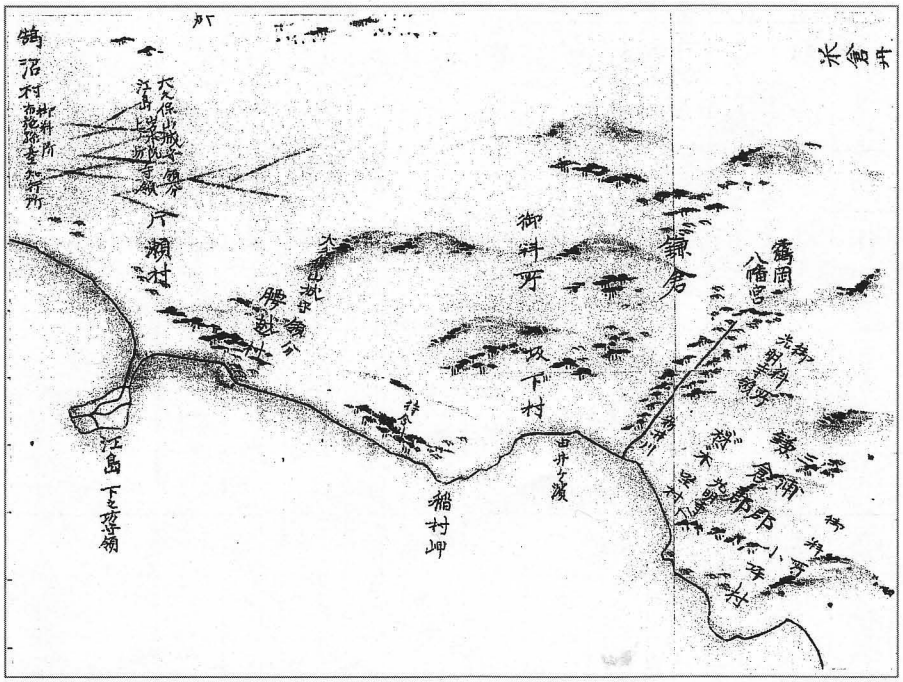
四月二十一日（いまの六月二日）朝、晴れ。六ツ半（いまの七時）出発。乱橋、材木座村、光明寺。由比が浜より鶴岡八幡宮まで歩測。それより測量しないで参拝。建長寺、円覚寺、大仏、長谷村、坂下村、稲村ケ崎、腰越村へ。当初、その腰越村に宿泊予定であったが、江ノ島に歩いて渡れるというので宿を江ノ島へ変更。江ノ島（いまの藤沢市江ノ島）夷屋吉右衛門宅に宿泊。

四月二十二日（いまの六月三日）朝、くもり。六ツ半前（いまの七時前）より江ノ島に海岸を測量し、江ノ島弁才天を参拝。岩屋まで測量。泊まったところで昼食。出発するころより小雨。片瀬村、鵠沼村、高座郡小和田村を測量。茅ケ崎村、南湖に八ツ半ごろ（いまの三時ごろ）に到着。茅ケ崎村南湖（いまの茅ケ崎市南湖）江戸屋八郎左衛門宅に宿泊。

四月二十三日（いまの六月四日）朝、くもり。六ツ半ごろ（いまの七時ごろ）出発。柳島村、高座郡須賀村、馬入川、平塚新宿を測量。大磯宿にて昼食。陶綾郡国府本郷村、国府新宿村、二ノ宮村の塩海を経て八ツ半（いまの三時）山西村の梅沢に到着。夜、天体観測。山西村（いまの二宮町山西）蔦屋藤八宅に宿泊。

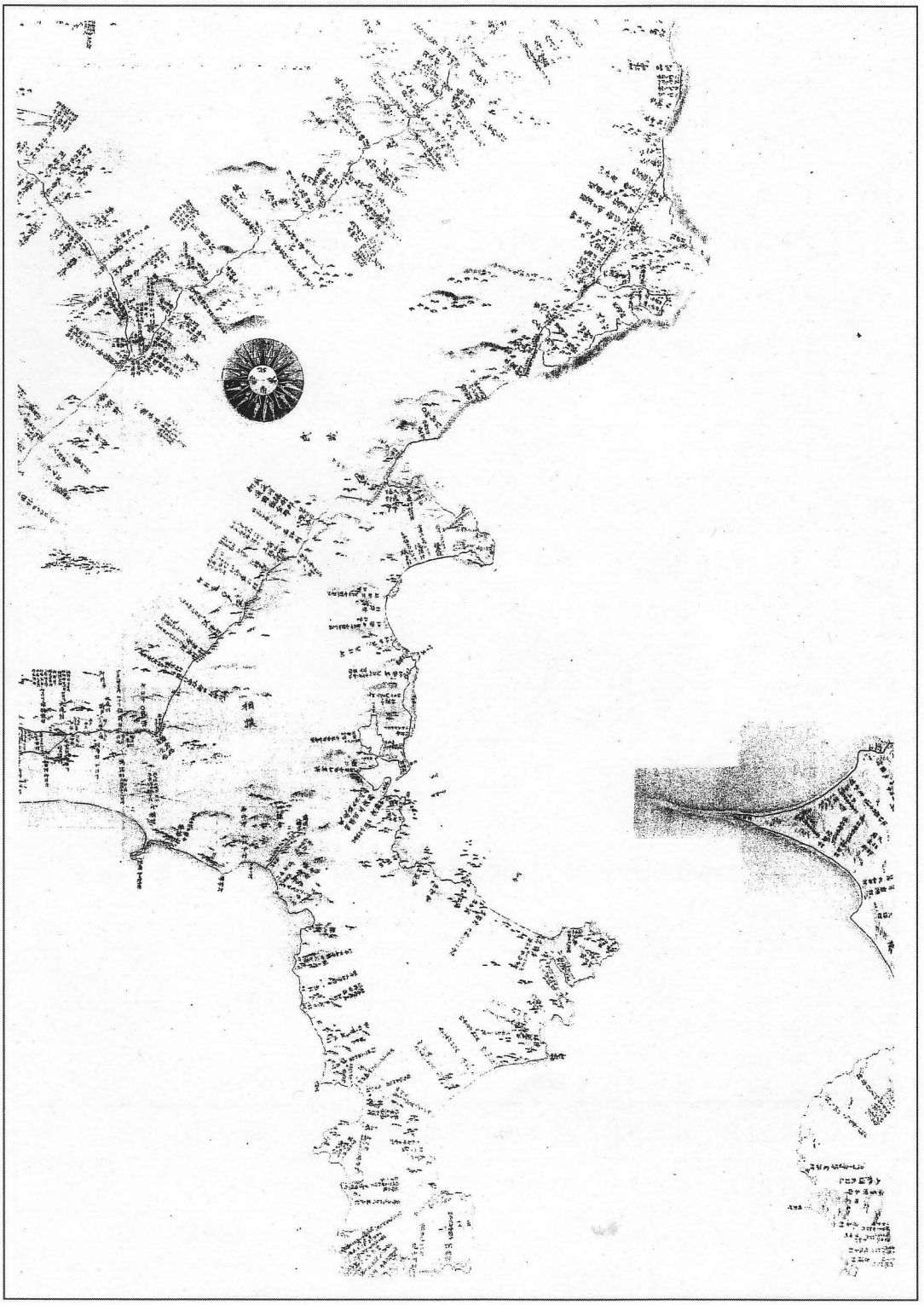
四月二十四日（いまの六月五日）朝、晴れ。六ツ半ごろ（いまの七時ごろ）出発。足柄下郡押切村、町谷村、前川村、国府津村、小八幡村、酒匂村を測量。酒匂川を運台で渡る。網一色村、山王原村、小田原浦、千度小路早川村、石橋村を測量。頼朝公石橋山の軍場。米神村、根府川村に七ツ半ごろ（いまの五時ごろ）到着。宿は家も庭もきれい。夜、くもりでも四ツごろ（いまの一〇時ごろ）より晴れ、天体観測。根府川村（いまの小田原市根府川）広井長十郎宅に宿泊。

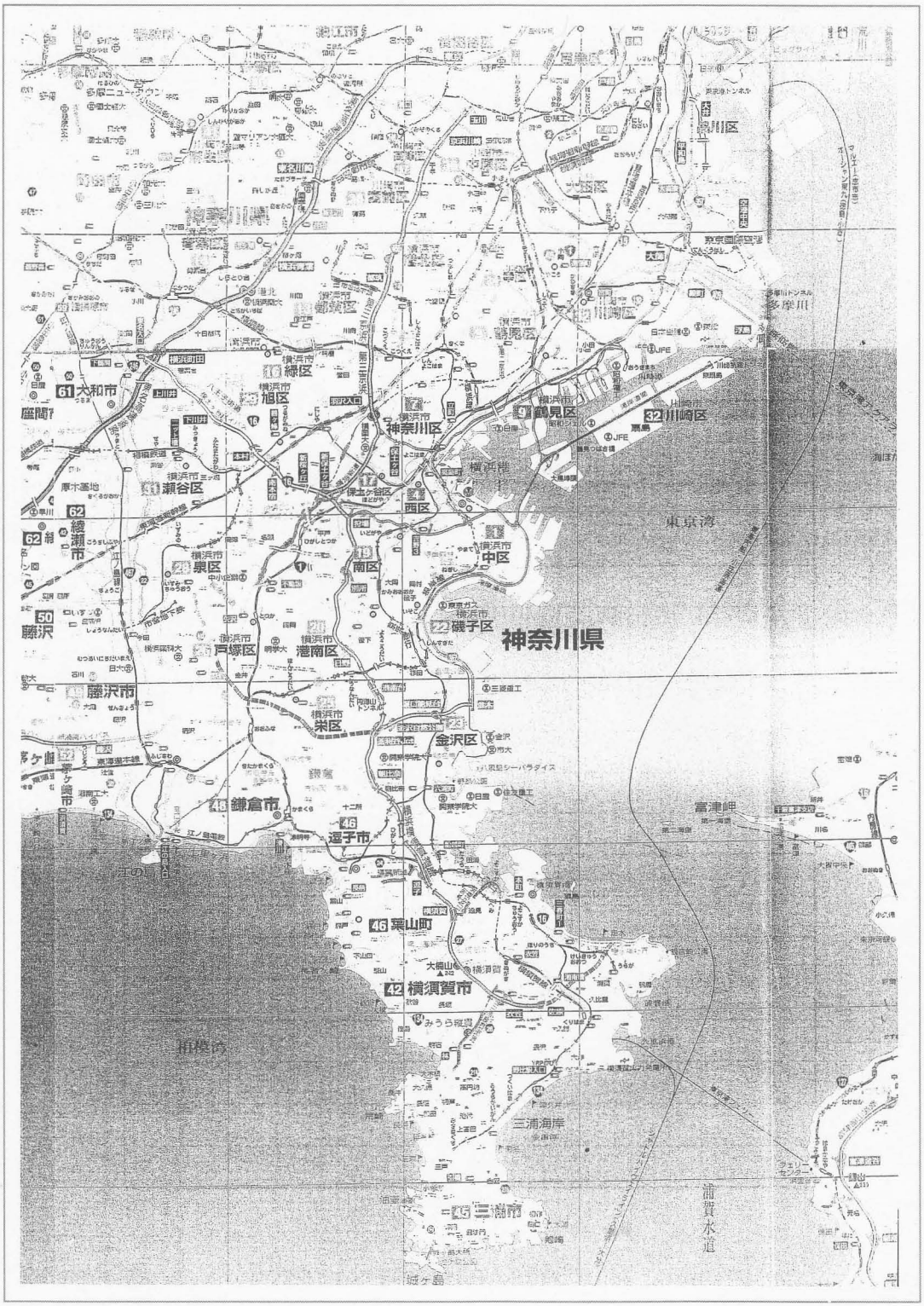
四月二五日（いまの六月六日）朝、晴れ。五つごろ（いまの八時ごろ）出発。根府川関所で関所役人に通行手形をもっていないのでもんくを

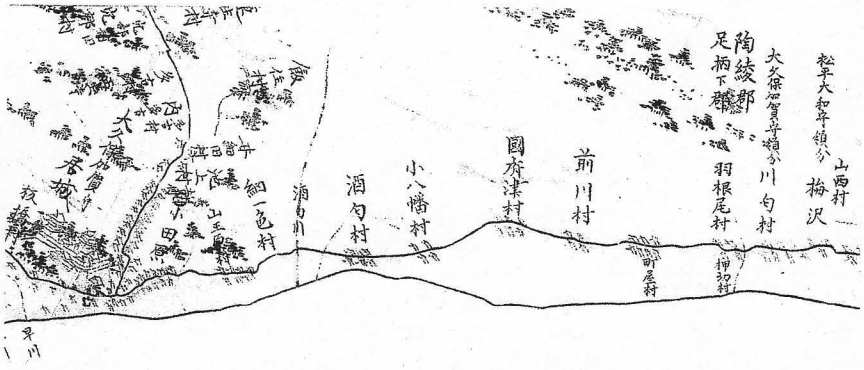


鵠沼～片瀬村～江ノ島～腰越～稲村岬～由比ヶ浜～鎌倉～鶴岡八幡宮～材木座村～小坪村

日数	日付	今の日付	宿泊地	いまの市町村名
1	4月2日	5月14日	川崎宿	川崎市川崎区川崎
2	4月3日	5月15日	〃	〃
3	4月4日	5月16日	保土ヶ谷	横浜市保土ヶ谷区保土ヶ谷
4	4月5日	5月17日	本郷村	横浜市中区本牧
5	4月6日	5月18日	富岡村	横浜市金沢区富岡
6	4月7日	5月19日	〃	〃
7	4月8日	5月20日	〃	〃
8	4月9日	5月21日	町屋村	横浜市金沢区町屋
9	4月10日	5月22日	浦郷村	横須賀市浦郷
10	4月11日	5月23日	横須賀村	横須賀市横須賀
11	4月12日	5月24日	走水村	横須賀市走水
12	4月13日	5月25日	西浦賀	横須賀市西浦賀
13	4月14日	5月26日	上宮田村	三浦市上宮田
14	4月15日	5月27日	三崎村	三浦市三浦
15	4月16日	5月28日	下宮田村	三浦市下宮田
16	4月17日	5月29日	佐島村	横須賀市佐島
17	4月18日	5月30日	〃	〃
18	4月19日	5月31日	〃	〃
19	4月20日	6月1日	小坪村	逗子市小坪
20	4月21日	6月2日	江ノ島	藤沢市江ノ島
21	4月22日	6月3日	茅ヶ崎村南湖	茅ヶ崎市南湖
22	4月23日	6月4日	山西村	二宮町山西
23	4月24日	6月5日	根府川村	小田原市根府川
24	4月25日	6月6日	吉浜村	湯河原町吉浜




神奈川県
東京湾
相模湾
三浦海岸
浦賀水道
横浜市
鶴見区
神奈川区
川崎区
緑区
旭区
神奈川区
保土ケ谷区
西区
中区
南区
磯子区
港南区
戸塚区
栄区
金沢区
瀬谷区
泉区
大和市
綾瀬市
藤沢市
鎌倉市
逗子市
葉山町
横須賀市
三浦市
城ケ島
富津岬
多摩川
東京湾アクアライン



小田原～酒匂村～国府津村～前川村～町屋村～川匂村～押切村～山西村梅沢

岩村～江浦村～御関所～根府川村～米神村～石橋村～早川村～小田原

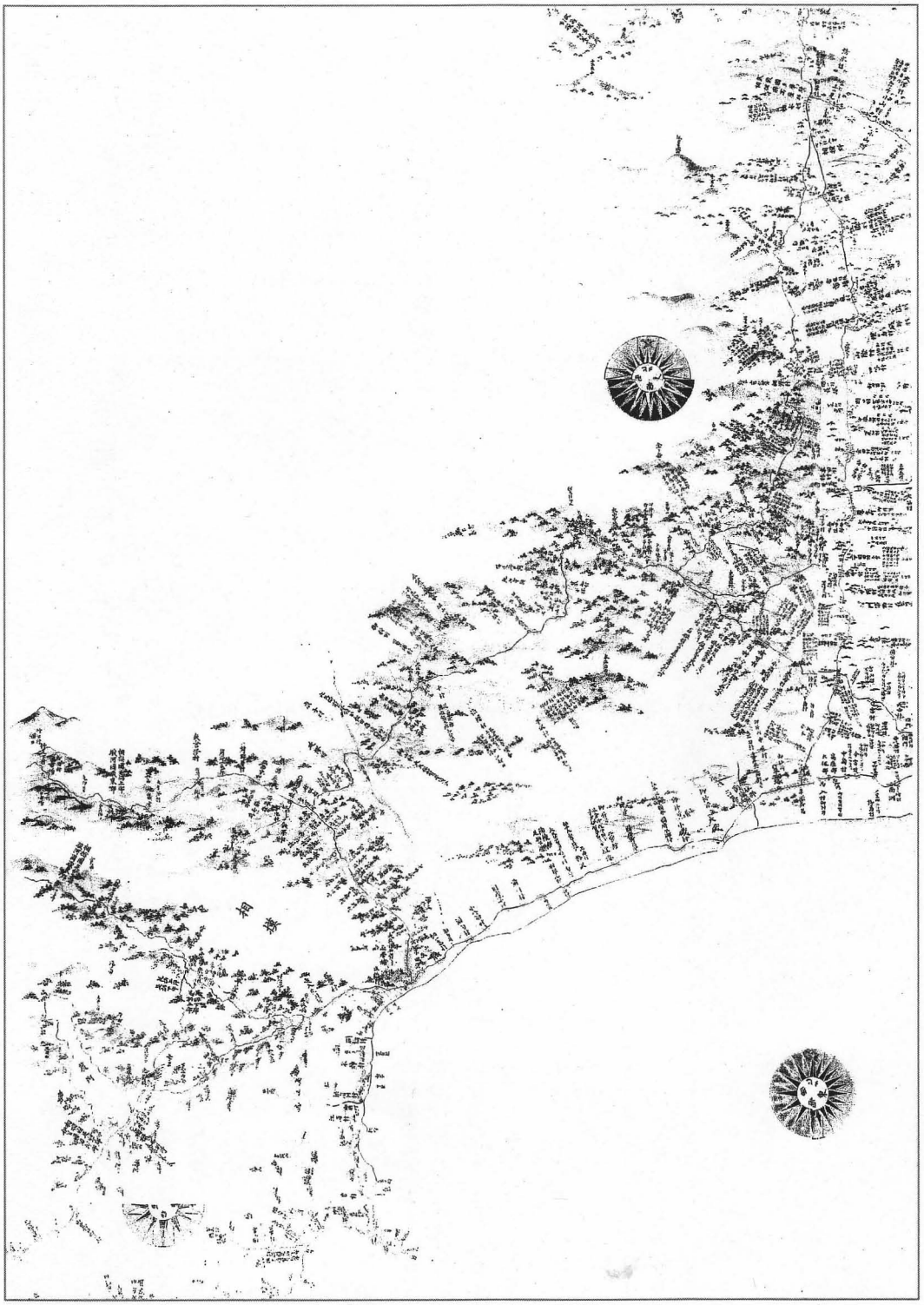
つけられる。しかし手形をもっていなくても通行できると勘定所から言われていたのでその場をおして通る。江浦村、岩村、真鶴村を測量。吉浜村、土肥に七ツ前（いまの四時）に到着。村には四〇軒ほどあり、初島が見える。宿は畳が新しい。夜、天体観測。吉浜村（いまの湯河原市吉浜）彦右衛門宅に宿泊。

四月二六日（いまの六月七日）曇り晴れ。五ツ前（いまの八時）出発。門川村に至る。・・・・・・そこから伊豆半島を回って江戸に六月六日（いまの七月十六日）に帰りました。

三　神奈川県の地図

『伊能大図総覧』という大きな本があります。その本から神奈川県のところの伊能図をコピーしました。大きな地図なので家に帰ってはり合わせていきました。しかし！地図と地図をつなぎ合わせようとしたら合わないのです！よーく見ると一〇km の長さが地図によって違うのです。本にのっている地図の縮尺が違っていたのです！二〇kmが地図で一〇cmになるように計算しなおしてまたコピーしなおしました。近くのセブンイレブンに何度も行きました。そしてようやく神奈川のところの地図ができました。現在の地図も同じ縮尺でコピーしました。並べてみるとほとんど同じです。海岸線を見ると横浜や川崎の埋め立てのところがだいぶ違っています。それから二枚を重ねてすかしてみると、なんだかびみょーにずれています。でもよくできていると思います。

（いしや　はるか・文教大学付属中学校三年）



和算の人脈（四）

安藤由紀子

九　九十九里へ

文化四年（二二歳）　九月、尾形啓次郎は住みなれた忠敬宅をとうとう**家出**してしまった。忠敬の『江戸日記』には「晴天　尾形退去」とあり、退去先は記されていない。しかし測量日記と江戸日記から抜書きしてみると、尾形に寄り添っていた人たちが分かる。

文化三年	21	**3-12** 蒲刈嶋着(途中参加) **11-15** 帰着　治兵衛と**飯高吉太郎**出迎え **12-** 謹慎処分を受け、間もなく取り消しとなる
文化四年	22	**9-3** 『尾形退去』
文化五年	23	**1-25** 四国測量の見送り（大川治兵衛同伴）
文化六年	24	**1-18** 四国測量の出迎え（**飯高吉太郎**同伴） **1-19** 『**飯高吉太郎** 香取顕治、上総へ行並帰村ニ付、暇乞いニ来る』
文化七年	25	この年大川治兵衛、没 （網掛け部分は測量不参加）
文化八年	26	**11-25** 九州第二次測量、参加

文化三年、途中参加の尾形を、大川と一緒に出迎えた人の中に、**飯高吉太郎**の名が見える。「和算の人脈一」でふれたように、最初の測量の時、尾形は忠敬に連れられて、九十九里の飯高家へ立ち寄った。吉太郎は飯高家の継嗣である。忠敬の兄貴分、飯高惣兵衛は文化二年に没し、彼はその孫にあたる。

文化五年（二三歳）　尾形は、自分は参加しなかった第六次の四国測量隊の出発を、大川治兵衛と一緒に見送りに行った。

文化六年（二四歳）　一月一八日品川宿の手前までそのチームを出迎えに出た時、治兵衛の名はなく、今度は**飯高吉太郎と**一緒だった。

翌一九日、尾形は吉太郎に連れられて、忠敬に「暇乞い」に来た。忠敬の「江戸日記」に『飯高吉太郎　香取顕治（また別名登場！）、上総へ**行並帰村**ニ付、暇乞いニ来る』と記されていて、九十九里へ**行ったのは**尾形であり、**帰村した**のは吉太郎であることが示されている。忠敬の記載は簡にして要を得ている。この日に尾形は、飯高家に引き取られたことが分かる。

したがって彼は、行方不明の四年間のうち、前半は母のいる大川家に、後半は九十九里の飯高家にいたのである。

彼が飯高家に引き移ったきっかけは、津宮の大川治兵衛の病状ではなかったかと思われる。翌年彼は亡くなっている。享年、五九。

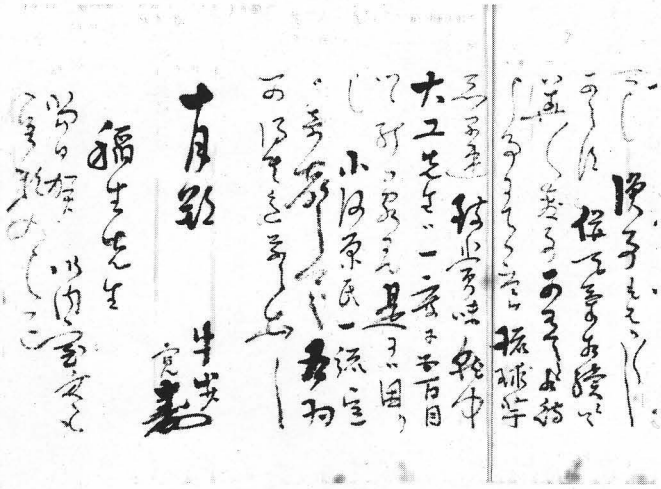
十　飯高惣兵衛家

忠敬の生まれ故郷、九十九里片貝村の飯高惣兵衛家は、困った時に

忠敬が最後に頼る親友の家であった。勘当された長女イネ夫婦を見守ったのも、飯高惣兵衛であった。

旧世田谷伊能家文書（伊能忠敬記念館蔵）に、勘当されて片貝で米屋を営んでいた夫婦宛の飯高惣兵衛書簡がある。夫の伊能盛右衛門は惣兵衛の甥にあたり、片貝では、稲生三郎次と名乗っていた。

〇一七　飯高惣兵衛書簡　稲生三郎次あて　十月一日



漁事もはかばかしくありません　しかし好天が続けば華々しい事もあるかと、待っているところです　今日琉球芋（サツマイモ）が届き、さっそく賞味いたしました　とりわけ大工の先生は、一度に五〇〇匁ずつ平らげるお客で、これには閉口しました。

年次は分からないが、寛政七年夫婦が勘当されてから惣兵衛が没する文化二年までの間に書かれたものである。両家は近くでもあり、日頃から親しく行き来していたことが察せられる。なお最後から二行目の「御内室さま」はイネを指している。

忠敬は飯高家をあてにして、安心して身内を勘当できたのかもしれない。「あとは何とかやってくれるだろう」と考えていたのだろう。この家は彼の勘当の後始末をする家であったのだ。

「暇乞い」は当時、長の別れを意味する。尾形の心理状態では、浅草で一人暮らしをしていた会田宅へ挨拶に行くとは思われない。実父はどうしていただろうか。忠敬の『江戸日記』一月一九日の条は、次のようになっている。

> 一月一九日　朝晴る　飯高吉太郎　香取顕治上総へ行並帰村に付、暇乞に来る　伊能平右衛門も朝後に来る　会田算左衛門来る

父親は、やはり別れに来ていた。忠敬が知らせてやったのだろう。何を話したのかは記されていないが。

文化七年（二五歳）

この年大川治兵衛が亡くなって、尾形は大きな後ろ盾を失った。もう二五歳になっていた。「学問をしたい」と寝る

間も惜しんで勉強を始めた一九歳のときから数えると、まる六年がたっていた。大川の死が、尾形に**立ち直り**をうながしたのは確実である。

またこの年、片貝の夫婦にも変化があった。夫、三郎次（盛右衛門）が亡くなり、イネは出家し妙薫と名を変えて佐原に帰った。

十一　立ち直り

文化八年（二六歳）～

一一月二五日出発の九州第二次測量の隊員名簿から、再び尾形の名が登場する。またこの測量からは、マネージャーは故大川治兵衛に代わって、妙薫が務めた。

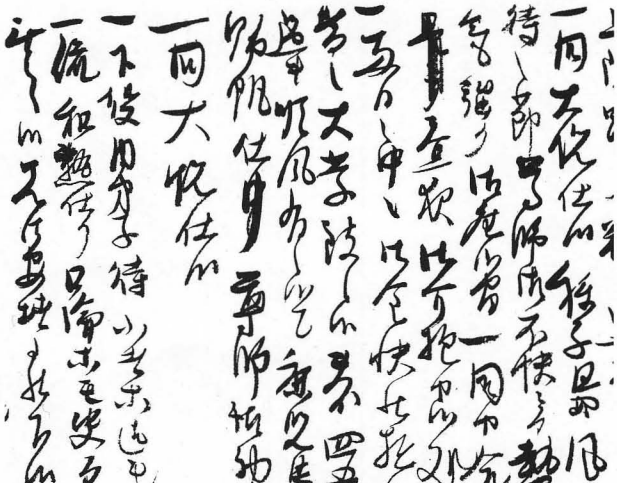
次は、難航した屋久島・種子島測量が無事終わって、ほっとした尾形が、妙薫にあてた手紙である。初めてマネージメントに携わった彼女は自分が集めた小者たちの動静が気になっていた。尾形はこのあとの部分で、一人ずつ論評を加え、さかんに褒めて安心させようとしている。

内弟子の中に、領主の家老の縁者で、コネで加えた新米がいた。並はずれた近眼で、おまけに字が下手であった。「迷惑の様子でしたが、身のためと思い、算術と習字を厳重に仕込み」今では下役同様に役目をこなすようになったと、報告している。リーダーの資格十分である。

この測量は困難で、最も長い（足かけ四年）仕事だったが、チームワークは最高で、「熟練の一隊」だったらしい。

〇二三―一　尾形謙二郎書簡　妙薫宛

文化九年五月二四日



種子島で風待ちの時とき、尊師はご不快で高熱を出されました
一同相談のうえ昼夜介抱申し上げましたところ、一両日で全快されました　みな大喜びでした　四、五日して順風となり、鹿児島へ帰帆することができました　尊師はじめ一同、大悦いたしました

一、下役、内弟子、侍（下僕）、小者にいたるまで、全員仲が良く、口論など一切いたしません　まずはご安心ください

一年後対馬測量中の忠敬が妙薫にあてた書簡を見ると、一行は彼にとって、最も満足のいくチームだったことが分かる。

七　伊能忠敬書簡　妙薫宛　（千葉県史料より）

文化一〇年四月二七日

このたびは一同精一杯励んでくれますので、七〇近い翁になって歯も痛み元気もこれまでのようではなくなってしまいましたが、何事も差支えることなく、腹の立つようなことも起こらず、大いに満足していますから、ご安心ください。測量（天測のこと）については、尾形が丹精込めて努めてくれ、夜分などは大いに助かります。

この測量のときは、忠敬も老い、初めからずっと自分でやっていた夜間の天体観測が苦痛になり、ベテラン尾形に出番がまわってきたことが分かる。

夏になって、副隊長の坂部貞兵衛が五島の福江島で病死した。忠敬はすっかり気落ちしてしまったが、二ヶ月後に松江城下から出した手紙には、次のように書かれている。尾形に坂部貞兵衛の代役が勤まるなんて、すごいことだ。

九　伊能忠敬書簡　妙薫宛　（千葉県史料より）

文化一〇年閏一一月二日

坂部病死につき、お察しの通り、御用向きの差支えを心配しましたが、このたびは幸せにも、尾形謙治を連れてきましたので坂部の役を同人へ申しつけましたところ、懸命に働き、十分間に合っています。そうでなかったら、老年の私はずいぶん難渋したことでしょう。

十二　婿入りの仲人は？

文化一二年（三〇歳）～

尾形は最終献上図の作成中も、箱田良助と共にその中核であったが、間もなく御家人のお婿さんになる。婿入り先は神楽坂に住む渡辺氏で、薄給の幕府普請方であったが、ともかくも、やっと武士の資格を得た。天文方には空きがなかったのだろう。

忠敬は内弟子たちの婿入り先の世話もやいていた。江戸日記にも、ほかの内弟子たちについてあれこれ思案していているシーンがある。それなのに、高い評価を与えていた実子同様の尾形についての言及は一か所も見つからない。義理がたい忠敬にしては、きわめて不自然なことである。すでに当てがあるかのような印象を受ける。

義父渡辺右衛門は、長崎（天領）で仕事中に急死してしまったが、普請方の現場監督であったから、和算に通じた人である。実父会田算左衛門も利根川流域工事の現場監督であり、高名な和算学者だから、その人脈の中に渡辺氏がいたことは容易に想像できる。もしかしたら、弟子だったのかもしれない。したがって、婿入り先の縁を取り持ったのは、実父会田算左衛門だったにちがいない、と思われるのである。

次の表は、文化一二年の忠敬「江戸日記」から会田算左衛門の来訪を抜き書きしたものである。めったに現れない会田が、こんなにたびたび訪れる時期は他にない。

会田は五月ごろに話を持ってきたように見える。七月中に結婚したらしいから、姓だけは「渡辺」と変えてあるが、事情を知らなければ、側線の部分が同一人とはとても判断できないだろう。彼の名前についての、忠敬の無頓着ぶりがよく分かる。

文化一二年 五月九日	会田算左衛門、来る
七月二〇日	会田算左衛門、来る
七月二四日	会田算左衛門、来る
七月二八日	尾形謙次郎儀、牛込神楽坂 御普請役渡辺右衛門方へ養子に取極、引越し申候
八月二日	渡辺啓次郎、かぐら坂より帰る（普請方から天文方へ出向したため、亀島町の忠敬宅へ泊り込むことになったらしい）
文化一三年 二月三日	渡辺啓次郎、測量御用出役被仰付候事（正式任命）
二月二二日	会田算左衛門、来る

このころ地図製作は多忙をきわめ、新婚早々の尾形（一三年には渡辺慎と改名）は一時忠敬宅へ「帰って」きたようだ。会田は作図の様子も見に来ている。息子が正式に府内測量を拝命したのち、会田はまた亀島町を訪れているが、これが最後になった（一年後、没）。

一〇月一七日に月食があった。慎は前日府内測量を終えて、亀島町へ泊り、月食観測後直ちに府内測量に戻った。『日記』には「渡辺啓次郎、食測後直ちに量地出勤」と記され、忠敬の最晩年の仕事の支えであったことが分かる。忠敬が事績を書き残すように遺言するとすれば、彼以外にはいなかった。

会田算左衛門から始まった人脈の輪は、渡辺慎の普請方（和算の専門集団）就職で完結したといえるだろう。

十三　普請方、渡辺慎

文化一四年（三二歳）～

「和算の人脈 二」でも触れたように、この年渡辺慎は、三人の親に死別した。先ず実母大川氏、次いで養父渡辺右衛門、一〇月になって実父会田算左衛門が没した。養父の職は現場監督であるから、すぐに工事方を継がなければならない。天文方へ出役となっていた彼は、府内測量はやり遂げたが、作図は追い込みのところで辞めざるを得なくなった。一二月五日付けの妙薫あて書簡では、上司に事情を訴えてみたが「役所風」の壁は厚く、現地出張に決まった無念さが述べられている。

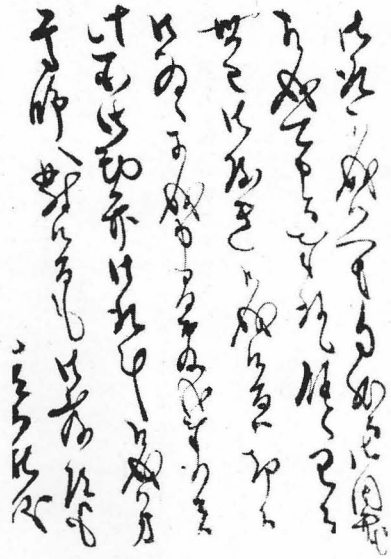
忠敬が没した翌文政元年四月一三日には、彼はまだ赴任前だったと思われる。

文政二年（三四歳）

この年、渡辺慎は赴任先の京都にいた。妙薫は、甥忠誨の地図献上式の晴着を、京都で仕立てたいと思っていて、江戸出立の慎に注文しておいた。次は、その「熨斗目（のしめ）」を発送したことを知らせる、長い書簡の一部である。妙薫は、「忠敬在世中と違い、作図中の人びとが思うように仕事をしてくれない」と前便で訴え、たいへんあせっていたらしい。また慎の方は、新しい京都での仕事と暮らしに慣れないでいる。二人は、忠敬死去という現実とその境遇の変化に適応できず、愚痴をこぼし合っていたらしい。

〇二三―四・五　渡辺慎書簡　伊能妙薫宛

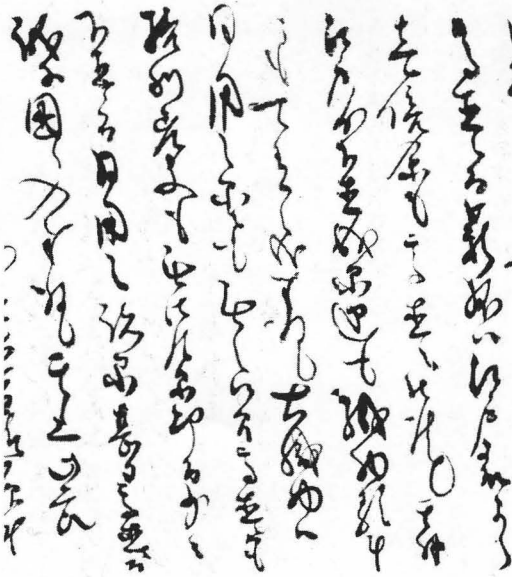
文政二年一〇月一八日



御用向きの方は、いくらおせきたてになっても、大勢の事ゆえ、思うようにはなりますまい。お下役や弟子たちの気受けが第一とお考えになれば、自然にうまくゆきます。あまり悪世話をおやきになっては、かえってお為になりません。このところ、よくお考えください。尊師に対する孝道にもとらぬように。

忠敬没後、地図の仕上げは、順調でなかったようだ。妙薫はあせっているのに相談相手がいなくなってしまった。「悪世話」を焼いている妙薫の様子は、同情に値する。

次に、慎自身の長い愚痴が続く。この年米価が下がって諸品値上がりし、幕府が蔵前取りのために救済策を講じたことが年表にも記されている。



薪などは、江戸の倍もする高値です。江戸より安いものといえば、織物ぐらいのものでしょうか。織物など日用品でないものが、かえって安いのです。日用品はとても高く、困っています。

豆腐・油揚げ・こんにゃくなど値段が決められたものはその分小さくなってしまったこと、宇治橋の修理を担当することになり引っ越し費用がかさんだこと、娘の三つの祝いに着物を調えてやったこと、寝酒も飲まず「誠に露命をつなぐばかり」の生活であること、などと訴えは続き、「江戸出立の時二五両持って出たのに、もう五両しか残っていない。神楽坂の留守宅は女ばかりで送金の手続きも分からない。駿河町の三井家経由で、五両拝借願いたい」と頼まざるを得ない。

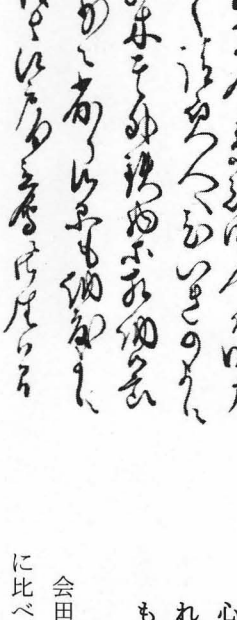
京都御大工頭という上役に、大切に使っていた『象牙の日影時計』と同じものを懇望され、役柄上断りきれなくなる。

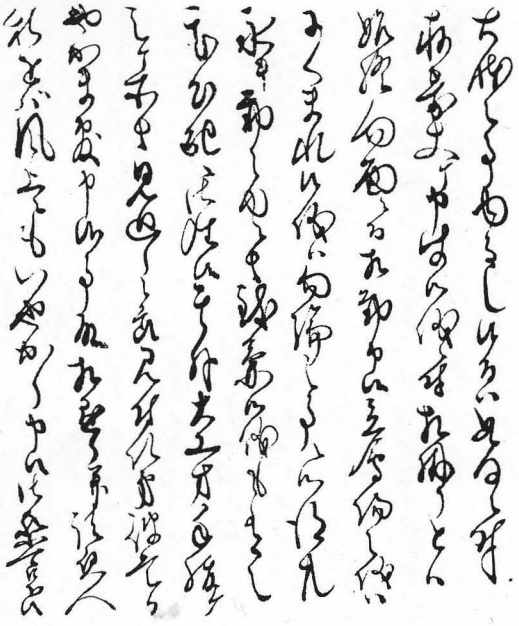
「悪堅く」思われないため、三度に一度は、夜の遊びに付き合わされる。父会田算左衛門は自伝で、「是悪例なり。我是を打ち破らん、と」「予を憎むこと甚だしといえども」「決して其事をうけがわず」「私事に何ぞ多分の金銀を費やすことあらん」と答えたと、その「大丈夫」ぶりを自慢しているが、カリスマ性がなければ出来ないことだ。

妙薫から五両受けとった旨の、二ヶ月後の次の礼状が、彼の最後の書簡になる。

○二三―六　渡辺慎書簡　　伊能妙薫宛

文政二年一二月一七日





建築の請負人は京都の町人で、奉行所のものはとかく請負人に贔屓します。材木や鉄ものを納めるとき、お定めより劣った品を納めたがります。しかし私は江戸からの立ち会いですからそんなことを許すわけにはいかず、言うだけのことは言います。係りの者とはいつもにらみ合いです。現場で憎まれるのはいつものことですが、長い仕事の間には、見逃すこともあるかと、心配です。見回りのときには大工の手抜きを見つけ次第かれこれやかましく申しますので、係りや請負人は私が風上に立つのもいやがります。お察しください。

会田算左衛門の利根川水域での勇ましい監督シーン（和算の人脈　一）に比べると、著しく迫力に欠けるようだが、慎も彼なりの意地を見せ

ている。関東の農民相手と違い、京都人たちは手ごわかったであろう。

翌文政三年父の三回忌があり、浅草寺に算子塚が建てられた(現存)。裏面には渡辺慎の名があるが、彼が出席したかどうかの記録はない。

文政四年七月伊能図上呈のため、高橋景保は伊能忠誨を伴って登城した。忠誨は慎が京都で誂えた熨斗目を着ていたのだろう。登城の列に、渡辺慎はいなかった。供をしたのは天文方の吏員たちだけであった。彼の胸中の無念は、察するに余りある。

翌文政五年、妙薫が亡くなった。渡辺慎が没したのは天保七年である(享年、五一)から、妙薫没後の一四年間、彼は実直な普請役として、現場監督を勤め続けたに違いない。

十四　幸国寺

大谷本『伊能忠敬』には「江戸牛込光国寺(幸国寺なるべし)に葬れり」とある。

日蓮宗　正定山幸国寺は、大江戸線「牛込柳町」駅のすぐ北にある。神楽坂の隣で、この辺は坂が多く、むかし光化学スモッグが騒がれだした頃、排気ガスが淀んで溜まるというので有名だったところだ。駅前からはすぐ坂道で、杖をひく身に、夏も近い日差しがこたえた。

新宿区にこんな幽谷があるかとびっくりするような広い寺で、墓域そのものが湿気を含んだ坂道になっている。二本の銀杏の大樹があり、天然記念物に指定されている。今流行りの立派な永代供養納骨堂ができていて、あまり若くない一組の夫婦が相談に来ていた。

寺務所は人気がなく、やっと出てきたこれも中年の住職は、書類をめくりながら「この寺も焼けましてねえ。過去帳がないんですよ」と言う。御家人の墓がたくさんあったと聞いている。墓石を台座に戻して名前だけは書留め、戒名によって武家らしきものが分類してある。

「でも渡辺家というのはたくさんあるんで・・」と言われた。坂を下りていくと、なるほど「渡邊家之墓」というのが目につく。訪れる人もなく古びて丸くなっている。他人の墓ではまずいかなと思って、大銀杏だけ撮ってきた。

(終わり)

参考文献

「伊能家伝存文書」　〇一七・〇二三　伊能忠敬記念館蔵
『江戸の伊能忠敬』　伊能忠敬研究会編
『伊能忠敬』大谷亮吉著

(紙幅が尽きたので和算の問題は取りやめました)

江戸時代の多摩を歩く

伊能忠敬測量隊の東京多摩地区測量（二）

佐久間　達夫

三月二十三日　曇天、同所（長津田村）出立。無測量一里。相州高座郡、都筑又十郎・江原孫三郎知行所下鶴間村、追分十八日残る㊅印始メ。滝山通八王子道測量。字三谷左滝山道追分、左二町許岡山の上畑地、山中修理之助定俊古城跡、字公所、界川（境川）土橋渡る、幅四間。武相州界也。自㊅印十八町二十四間。武州多摩郡小野田三郎右衛門支配・須藤岩之助・神谷縫殿之助〆三給鶴間村字町谷。左側許、大岡源右衛門支配所・押井佐次右衛門・田中恒太郎三給金森村、左右金森村字西田、左川向相州鶴間村字水口也。武州相州国界川に添て行。左住吉の森、右二町許引込高ケ坂村、田中主計知行所原町田村、駅場、左天神ノ森、左一町許引込、曹洞宗相州大住郡日向村石雲寺末金森山宗保村（院カ）、御朱印高七石三斗余り、境内一町四方。左浄土宗勝楽寺、右制札、昼休名主七郎兵衛、右法花（法華）宗浄蓮寺、左側許須藤岩之助知行所森野村、左法花宗妙延寺、小野田三郎右衛門支配所・倉構内道知行所木曽村、左大山道追分字宿、駅場。左制札、左止宿前測所打止、㊍印残畢ル。自国界一里二十八町四十八間、通計惣測二里十一丁十二間。八半時頃着。止宿百姓団助。夜星測。

三月二十四日　曇天、木曽村出立。字宿測処前㊍印始め。左禅宗木曽山福勝寺、左制札、右府中道追分、是より四里字下矢部、同支配同知行根岸村、木曽村・根岸村入会地所、松平次郎兵衛・松平左源次・沼頼母・神保喜内・柳沢佐渡守五給小山田村字常盤、右府中道左厚木道是ヨリ三里四里。神保喜内・松平次郎兵衛・高井但馬守〆三給小山村字馬場、右小山上一町半引込曹洞宗伸木村永林寺末医王山長泉寺御朱印九石四斗、境内一町四方。字御岳堂、右飯縄権現ノ社、右三十間許引込今夜ノ止宿、真言宗大幡村宝生寺末旋弥山福生寺、境内一町四方、御朱印高拾二石二斗。是より仕越、右道端ノ庵ニテ昼休。左界川の向三町斗引込、相州高座郡小山村内真言宗天伝山蓮乗院、御朱印高八石四斗。右一町半許引込臨済宗立川村普済寺末金竜山宝泉寺、御朱印高九石、境内一町四方。建部六右衛門・久松忠次郎・高井但馬

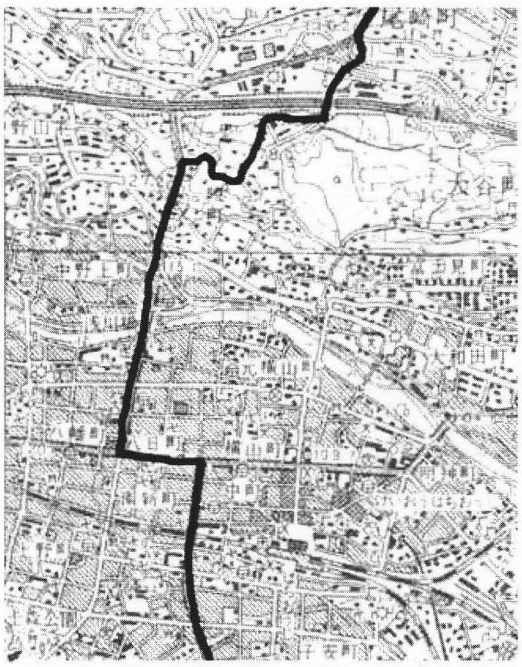


図10　図６の④部、ひよどり山付近の行程

（国土地理院５万分の１地形図「八王子」平成12年発行「青梅」平成９年発行に加筆）

守〆三給相原村字坂下、左大山道追分、当月十五日残シ㊦印ト繋畢ル。通計二里七町二十七間。それより八ツ半時頃小山村へ帰着。止宿御朱印地旋弥山福生寺。

同二十五日　曇天、小山村出立。多摩郡　建部六右衛門・高井但馬守・久松忠次郎三給相原村字坂下㊦印初メ、八王子道測量。字下、右側許鑓水村、左側許宇津貫村、字赤坂、小坂上り字杉山峠、蒔田繁之助知行・藤沢宮内知行片倉村、字車石、字山王坂、左四町許大江備中守師範古城跡、字釜抜、右二町許引込曹洞宗橘樹郡柚木村永林寺末白花山慈眼寺、境内弥陀堂、御朱印高六石。兵江川渡幅二間、左三町引込、臨済宗山田村広園寺末常竜山斟珠庵地蔵領御朱印高五石、左一町許小山上、住吉大明神領御朱印高七石、祭礼七月廿九日、別当真言宗宇津木村竜光寺末土沢山金蔵坊世尊院来光寺ト云フ。字川久保、湯殿川仮橋幅六間、字五輪坂、左右側、建部六右衛門・高井但馬守・長沢直次郎知行子安村・小比企村片側持。左二十町許引込、小比企村枝

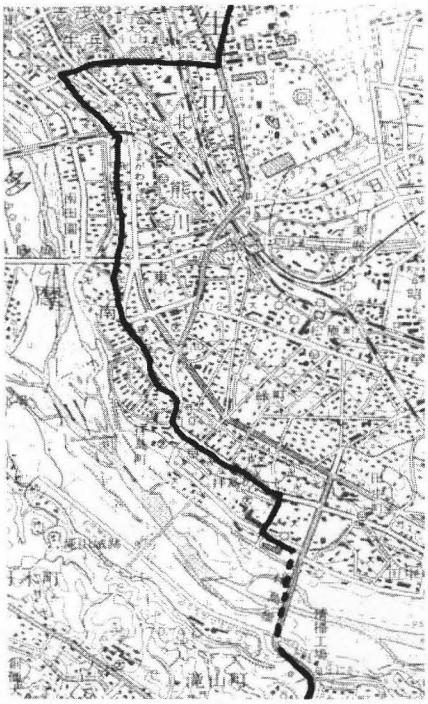


図11　図6の⑤部、拝島―牛浜間（国土地理院5万分の1地形図「青梅」平成9年発行に加筆）

山田ニ臨済宗兜卒山広園寺、此寺芝金地院預リト云フ、輪番持、坊中十ケ寺、境内八町四方、御朱印高拾五石。又左十二町許引込同村内、真言宗大幡村宝生寺末摩尼山萬福寺御朱印高三石、谷川小流を渡、左側許、小野田三郎右衛門支配・水谷弥之助知行新横山村、右子安村左新横山村、両村字十日市場、左一町斗引込新横山村内薬師領御朱印高百石、別当真言宗大幡村宝生院末南指山一乗院観音寺。左右共小野田三郎右衛門支配所、惣号八王子宿横山十五ケ宿入会。人家続き、家数一千二百軒、字寺町宿、左三町許引込町後字上野原新田十五軒。右五町許引込子安村内子安大明神御朱印高六石、別当真言宗安永山福伝寺、右側横山宿、左側馬乗宿、左側八日市宿、甲州街道筋に出て制札に繋ぐ。文化八未年五月五日残、一里二十八町二十四間。これより甲州街道重測。左右八日市宿右三十間許引込禅宗禅東院、昼休山上喜兵衛、左馬駅。四辻追分未年旧測ノ残シ棒杭（榜示杭）に繋ぐ迄重測四町十二間。是より日光道中新測。左右町並、右八日市宿左八幡宿、左右横町宿、左大善寺表門前楼門迄四十五間許、それより本堂迄三十間引込浄土宗滝山壇林観池山大善寺、御朱印高拾石、境内一万八千坪。町界の木戸より極楽寺境内、左時宗四木山宝樹寺、右一町引込浄土宗京智恩院末滝山宝樹山極楽寺御朱印高拾石、境内九千坪。極楽寺境内限り。大沢修理太夫知行八王子本横山村、浅川歩行渡巾四十二間、右浅川向三町許引込、本横山村内真言宗宇津木村竜光寺末医王山妙薬寺御朱印高七石。大沢修理太夫知行中野村、川口川幅六間、左一里半許引込、北條陸奥守氏輝（ママ）古城跡、右五町引込字下中野内真言宗竜光寺末北岸山喜福寺、御朱印高八石五斗。又左ノ方エ見渡ス。遠山凡そ五里半程、御嶽山内式内大麻止乃豆乃天神社、御朱印高二十五石余、当時蔵王権現ト号ス。大宮司金井左衛門、別当真言宗御岳山世尊寺、山上御師三十六軒、山下御師二十軒、登山道八王子ヨリ青梅へ四里、ソレ

ヨリ御岳へ三里ト云。字下中野、左側許西山兵吉知行左入村、左側許蒔田信濃守・川村外記知行滝山村、右側許小野田三郎右衛門支配・久保田忠兵衛・萩原頼母・蒔田八郎左衛門・松平河内守〆五給大谷村、右側許細井佐次右衛門・蒔田信濃守・川村外記〆三給宇津木村、左右滝山村、字中丸、字尾崎、又左側左入村、右側許波多野杢之助知行八日市村枝宇津木村、右二町許引込別村ノ宇津木村内真言宗山城国醍醐松橋無量寿院末増宝山竜光寺御朱印高二十石。左五町許引込滝山村字八幡宿内に曹洞宗椚田村高乗寺末金竜山少林寺、字八沢坂、左右波多野杢之助知行八日市村、玉川渡船水巾三十間、字拝島渡ト云、船賃定一人十二文・一疋十六文。河原巾三町許、此川にて鮎を取、拝島村にて貢上す。川上甲州丹波山ヨリ流、是ヨリ三十里計川下厚木ヨリ青山街道ニ渡ル（傍線部原文ママ）、小野田三郎右衛門支配・岡部五郎兵衛・太田志摩守〆三給拝島村字宿、駅場、字河原口、百六十軒町並、右一町引込大日堂領、御朱印高拾石、本尊大日如来、別当天台宗高月村円通寺末拝島山普明寺、坊中三ケ寺、境内三町四方。名産青梅縞、鮎。右三十間許引込普明寺、右問屋場字中宿、左一町許引込曹洞宗根ケ布村天寧寺末玉王山竜津寺、御朱印高三石、字上宿、人家の限り打止㊤印畢ル。重測限りより一里二十九町二十四間、通計総測三里二十六町二十間三尺。八ツ半時頃着。止宿組頭久兵衛・百姓伝七。

三月二十六日　曇天、多摩郡拝島村字上宿出立。同所㊤印始メ。日光街道測量。左十二町引込玉川向高月村内、天台宗東叡山末恵日山観音院円通寺御朱印高十石。左十四町許引込玉川向小川村内臨済宗八幡山光円寺定蓮寺御朱印高二十五石。左一里許引込沢井フウカク山上式内虎狛神社、小野田三郎右衛門支配・田沢七右衛門・長塩長五郎三給熊川村、左牛頭天王社、左右武蔵野原、江戸水道川上、江戸上水・玉川上水共云。仮橋渡巾六間。川上羽村ヨリ玉川分水トナリ、是ヨリ二里其所に陣屋あり、御普請方交代定詰、流下は江戸四ツ谷天竜寺門前にて樋となる迄是より九里。字牛浜上、右江戸道・左日野道追分、小野田三郎右衛門支配所福生村。右三ツ木道・左檜原道追分。右側許田安殿領・小野田三郎右衛門支配持添〆二給石畑村、左側小野田三郎右衛門支配・武田国之丞・蒔田八郎左衛門〆三給川崎村、左右石畑村、小野田三郎右衛門支配所箱根ケ崎村、駅場、昼休名主次郎左衛門、右江戸道・左秩父道追分是より十二里・二十里、左一町引込臨済宗柴崎普済寺末北山円福寺、狭山が池、下流石橋巾一間、川下砂川村にて四谷上水に入り助水となる由、郡界迄通計二里一町二十一間。入間郡、太田三郎兵衛知行所富士山村、惣名宮寺郷ト云。右二町許引込大野八郎右衛門知行高根村ト云アリ。枝駒形、山田市郎右衛門外新田持添大岡源右衛門支配所・長田右兵衛・伊達庄兵衛・坂部左京二本木村、駅場。右側許大岡源右衛門支配所坊村、土屋勝右衛門知行中野村、大岡源右衛門支配・長野佐右衛門・田安殿領・神田数馬四給小谷田村、田安殿領扇町屋宿、左山王ノ社、左青梅道追分。左三十間許引込曹洞宗大袋村東光寺末光福山長泉寺御朱印高拾石。右一町許引込鎮守愛宕権現ノ社領御朱印高八石、合殿、竜田明神、境内一町四方、祭礼三月廿四日、神主森谷主水。三辻右川越道・左日光街道追分打止、㊛印ヲ残シ畢ル。郡界ヨリ一里三十二町九間。総測通計三里三十三町三十間。八ツ時頃着。止宿組頭太七。

三月二十七日　朝霧深し、四時より晴曇、入間郡田安殿領扇町屋宿出立。同所追分㊛印始め川越道測量。

四　伊能忠敬の測量法

忠敬は地図作製の基礎資料を得るために、昼は距離と方位及び太陽の南中高度を測定し、夜は恒星の方中高度を測定した。また太陽や月、

それに木星とその四小星との交食現象を観測し、経緯度の算出をした。

1　方位と距離の測定

方位と距離の測定にあたっては、まず基点を決め、測線にそって前方曲がり角に梵天を立て、二点間の距離と方位を測定し、それを繋ぎ合わせていった。これを導線法という。また坂道では、象限儀や測縄を使って、坂の勾配や距離を測り、三角比の正接を用いて直線距離を計算によって求めた。なお断崖絶壁の入り江では、こちらの出崎より向こうの出崎までの距離（横切）を数艘の舟を並べて鉄鎖縄（くさり）で測り、その上で入り江に沿った距離と方位を測定した。距離を測る器具として、初期は渋引の麻縄や藤縄などを用いたが、これらのものは気温や湿度の高低によって伸縮があるので、第三次測量以後は鉄鎖縄を用いた。なお第二次測量の三島宿以後に量程車を使用したが、測定地に凹凸があると誤差を生じたので平坦な地以外はあまり使わなかった。方位の測定には半円方位盤や彎窠羅鍼（わんからしん）（杖先方位盤ともいう）などの方位盤を用いた。

しかしこのような導線法による測定では、最大の注意をはらっても、ある一箇所で少しの狂いが生じると長い区間では相当の誤差が出てくる。そこで遠望のできる山頂や岬、島などの方位を交会法によって測定し、誤差を修正していった。交会法とは、二つ以上の観測地点から、同一の観測地物の方位を測定し、地図上で観測地点と観測地物との方位線を引き、その交点の異同によって観測地点の位置を決める方法である。

多摩地区では、富士山、大山（神奈川県）、武甲山（現埼玉県）などが交会法の観測地物として用いられた。

2　天体の観測と緯度・経度の算出

忠敬は、一七年の測量中、経緯度の算出に一四〇七日以上天体を観測している。

緯度を算出するために、宿泊地で一〇坪程度の空き地に象限儀を備えつけ、一晩に五、六星から一〇星以上の恒星の北極出地度（方中高度）を観測し、それを基にして各地の緯度を算出した。また経度は、測蝕定分儀や観星儀（望遠鏡）を使って、太陽や月、木星とその四小星との交食現象を江戸・大坂の暦局と測定地で同時観測し、その時刻差によって算出した。しかし測量期間中、このような現象は数える程しか観測できず、そのために経度はやや正確さに欠けている。従って伊能図と現代の地図の海岸線を比較してみると、伊能図の方の北海道、東北、九州がやや東方に位置している。

（了）

山島方位記　伊能忠敬記念館蔵

文化八年五月四日　甲斐国小仏峠 ㊫ 印で測定

観測地物	測器名	方位	分	秒	測器名	方位	分	秒
富士山左	小方位盤	未	二五	三五		未	二五	五〇
富士山右		未	二六	三〇		未	二六	四五

文化八年五月六日　武蔵国日野宿 ㋹ 印で測定（支隊測量）

観測地物	測器名	方位	分	秒	測器名	方位	分	秒
武甲山		戌	一八	四〇		戌	一八	一五
小仏峠		申	一八	四〇		申	一九	〇〇

文化十三年三月二五日　武蔵国拝島村 ㋑ 印で測定

観測地物	測器名	方位	分	秒	測器名	方位	分	秒
高尾山	半円方位盤	未	〇九	四〇	丙方位盤	未	一〇	〇〇
小仏峠	半円	未	二五	二〇	丙	未	二六	一〇
武甲山	半円	戌	二〇	四五	丙	戌	二〇	五五

伊能塾講座　第一回例会（九月一四日）再録

○講演一「話題になったいくつかの大図写本―海洋情報部所蔵図ほか」

講師・鈴木　純子さん

一、「総覧」刊行と伊能大図

「総覧」刊行までの大図確認状況をふり返り、その後に判明した大図写本を二～五で紹介。

二、海洋情報部「伊能図謄写図」調査」　（写真一）

雑誌『地図』他に詳報した調査結果の概要と併せ、主な地図の写真一四枚を紹介。全一四七枚中忠実な原寸模写六枚、縮小図にも精写図多数。一覧表に記号（○原寸模写。　伊能図式・　平面図（ケバ）式など）を追記。

三、㈱ゴールデン佐渡所蔵「佐渡大図」　（写真二）

佐渡奉行所地方附絵師石井彩蔵（夏海）による文化年間の彩色模写図、原図は奉行所から貸与された享和二年天文方測量図。

四、早稲田大学図書館所蔵伊能図（大図）　（写真三）

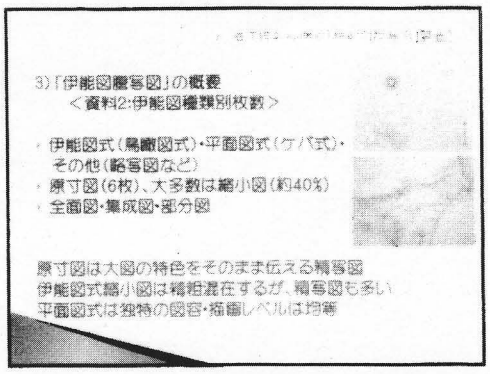
藤原秀之「早稲田大学図書館所蔵伊能図（大図）」（『同大学図書館紀要』五四号）恵贈で判明、塾覧。図郭は異なるが彩色精写図。

五、神奈川県立歴史博物館所蔵「東海道図」　（写真四）

展示会図録（星埜代表購入）から判明、塾覧。神奈川～畑宿辺、当海道沿いのみの彩色精写図。

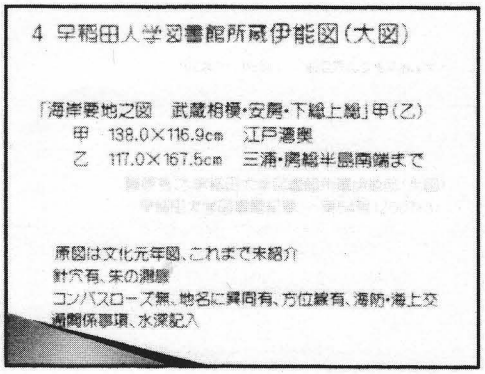
※アメリカ議会図書館ほか国内に現存する数種の大図をまとめた一覧表（次頁）を参照しながら、パワーポイントを駆使して美術的価値のある伊能大図の新たに確認された写本とその由来を詳細に説明していただきました。研究会発足後の伊能図発掘史の分野を勉強することができました。（例会担当　新沢）例会案内・例会報告は七〇頁に掲載

写真一

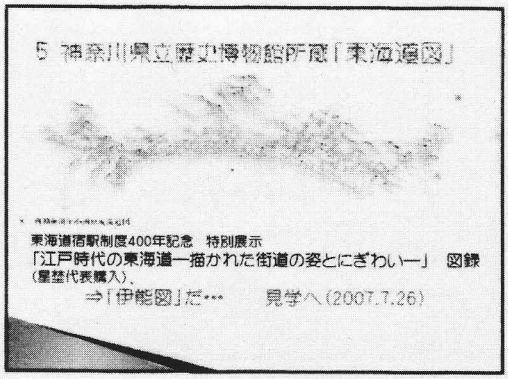


写真二

写真三



写真四



◎ 副本
◇ 稿本
● 写本
○ 模写本
△ 縮小模写図
▲ 部分図
＊ 藻写本の縮小謄写図

現存する「大日本沿海輿地全図（最終本伊能図）」

小図・中図 一覧　〔大図・中図・小図〕 一覧表

図種＼所蔵者	アメリカ議会図書館	国立国会図書館	国立歴史民俗博物館	海上保安庁海洋情報部	山口県文書館	松浦資料博物館	京都大学図書館	成田山仏教図書館	日本写真印刷㈱	英国海事博物館	東京大学総合研究博物館	天理大学付属天理図書館	東京都立中央図書館	国土地理院	日本学士院	東京国立博物館	北海道大学北方史料室	神戸市立博物館	東京国立博物館	阿部正道氏
小図　北海道										●								●	◎	●
小図　本州東部										●			●						◎	
小図　日本西南部						▲				●			●					●	◎	
中図　北海道東部								●	◎		●	○			○	◎	◎			
中図　北海道西部								●	◎		●	○			○	◎	◎			
中図　東北地方								●	◎		◎	○		○	○	◎				
中図　関東地方								●	◎		◎	○		○	○	◎				
中図　中部地方								●	◎		◎	○		○	○	◎				
中図　中国四国地方			○					●	◎		◎	○		○	○	◎				
中図　九州北部								●	◎		◎	○		○	○	◎				
中図　九州南部								●	◎		◎	○		○	○	◎				

凡例
黒色……1996年以前の発見図　青色……1997年以降の発見図　黄色地の枠……本巻収載図
緑色……1996年以降の発見図　赤色……2001年以降の発見図

図種＼所蔵者	アメリカ議会図書館	国立国会図書館	国立歴史民俗博物館	海上保安庁海洋情報部	山口県文書館	松浦史料博物館	京都大学図書館
第145号　岡山	○		○				
第146号　高松	○			＊◎			
第147号　小松島	○						
第148号　室戸	○			▽			
第149号　安芸	○			▽			
第150号　倉吉・新見	○			＊			
第151号　倉敷	○						
第152号　観音寺	○			▽			
第153号　隠岐島後	○						
第154号　隠岐島前	○						
第155号　松江・米子	○			＊◎			
第156号　東城	○			＊◎			
第157号　福山・尾道				△▽			
第158号　新居浜	○			＊			
第159号　高知	○			▽			
第160号　須崎	○			▽			
第161号　清水	○			▽			
第162号　浦戸	○			＊			
第163号　三次	○						
第164号　今治				△			
第165号　大田	○			＊			
第166号　温泉津	○			＊			
第167号　広島	○				▲		
第168号　松山	○			＊			
第169号　柳井	○			＊◎	◎		
第170号　八幡浜・大洲	○			＊◎			
第171号　宇和島	○			▽			
第172号　浜田	○			▽			
第173号　岩国	○				◎		
第174号　益田	○			＊◎	◎		
第175号　徳山	○			＊◎	◎		
第176号　山口	○			＊▽	◎		
第177号　川棚	○			＊◎	◎		
第178号　小倉	○			＊▽			
第179号　中津	○			＊◎			

図種＼所蔵者	アメリカ議会図書館	国立国会図書館	国立歴史民俗博物館	海上保安庁海洋情報部	山口県文書館	松浦史料博物館	京都大学図書館
第180号　日田	○						
第181号　大分	○			＊◎			
第182号　佐伯竹田	○						
第183号　佐伯	○			＊◎			
第184号　延岡	○			＊▽			
第185号　宮崎	○			＊▽			
第186号　宗像	○			▽			
第187号　福岡	○			＊▽			
第188号　佐賀・久留米	○			＊▽			
第189号　唐津	○			＊▽		▲	
第190号　佐世保	○						
第191号　壱岐	○			＊▽		◎	◇
第192号　対馬	○			＊▽			◇
第193号　熊本	○			＊▽			
第194号　椎葉	○						
第195号　八代	○			＊▽			
第196号　島原	○			＊◎			
第197号　小林	○			▽			
第198号　飫肥	○			＊▽			
第199号　都城	○			＊			
第200号　人吉	○			＊◎			
第201号　大村	○			＊▽			
第202号　長崎	○			◎		▲	
第203号　天草下島	○			＊◎			
第204号　平戸	○			＊		◎	◇
第205号　崎戸	○						◇
第206号　小値賀	○			＊		▲	◇
第207号　福江	○			＊▽			
第208号　阿久根	○			＊▽			
第209号　鹿児島	○			＊▽			
第210号　串木野・枕崎	○			＊▽			
第211号　山川	○			＊			
第212号　瀬島	○			＊▽			
第213号　種子島	○			＊▽			◇
第214号　屋久島	○			＊▽			◇

大図 一覧

図種＼所蔵者	アメリカ議会図書館	国立国会図書館	国立歴史民俗博物館	海上保安庁海洋情報部	山口県文書館	松浦史料博物館	京都大学図書館
第1号 色丹島	○			*▽			
第2号 国後島北部	○			*▽			
第3号 国後島南部	○			*▽			
第4号 雛臼	○			*▽			
第5号 標津	○			*▽			
第6号 根室	○			*▽			
第7号 網走	○			*▽			
第8号 常呂	○			*▽			
第9号 紋別	○			*▽			
第10号 枝幸	○			*▽			
第11号 頓別	○			*▽			
第12号 稚内				*△▽			
第13号 天塩	○			*▽			
第14号 利尻・礼文	○			*▽			
第15号 天売・焼尻	○			*▽			
第16号 留萌	○			*▽			
第17号 増毛	○			*▽			
第18号 石狩	○			*▽			
第19号 夕張岳	○			*▽			
第20号 積丹	○			*▽			
第21号 岩内	○			*▽			
第22号 原岸	○			*▽			
第23号 釧路	○			*▽			
第24号 十勝川河口	○			*▽			
第25号 広尾	○			*▽			
第26号 浦河	○			*▽			
第27号 門別	○			*▽			
第28号 苫小牧	○			*▽			
第29号 室蘭	○			*▽			
第30号 長万部	○			*▽			
第31号 森	○			*▽			
第32号 函館	○			*▽			
第33号 瀬棚	○			*▽			
第34号 江差			○	*▽			
第35号 奥尻島			○	*▽			
第36号 松前	○			*▽			
第37号 渡島大島	○			*▽			
第38号 鰺ヶ沢	○			*▽			
第39号 青森	○			*▷			
第40号 野辺地	○						
第41号 大間	○			*▽			
第42号 八甲田山	○			▽			
第43号 弘前	○			*▽			
第44号 八戸	○			*▽			
第45号 久慈	○			*▽			
第46号 宮古	○			*▽			
第47号 釜石	○			*▽			
第48号 石巻	○			*▽			
第49号 二戸	○			*▽			
第50号 盛岡	○			*▽			
第51号 一関	○			*▽			
第52号 仙台	○			*▽			
第53号 白石	○	○		*▽			
第54号 原町	○	○		*▽			
第55号 いわき	○	○		*▽			
第56号 福島	○		○	*▽			
第57号 日立	○	○		*▽			
第58号 銚子	○	○		*▽			
第59号 深浦	○			*▽			
第60号 能代	○			*▽			
第61号 森吉山	○			*▽			
第62号 秋田	○			*▽			
第63号 本荘・大曲	○			*▽			
第64号 横手・湯沢	○			*▽			
第65号 新庄	○	○		*▽			
第66号 山形	○	○					
第67号 会津若松・米沢	○	○					
第68号 白河	○	○					
第69号 宇都宮	○	○	○				
第70号 酒田	○	○		*▽			
第71号 温海	○	○		*▽			
第72号 村上	○	○		*▽			

図種＼所蔵者	アメリカ議会図書館	国立国会図書館	国立歴史民俗博物館	海上保安庁海洋情報部	山口県文書館	松浦史料博物館	京都大学図書館
第73号 新潟	○	○		*▷			
第74号 出雲崎	○	○		*▽			
第75号 佐渡	○			*▽			
第76号 長岡・柏崎	○	○		*▽			
第77号 湯沢	○	○					
第78号 渋川	○	○					
第79号 三国峠	○	○		▽			
第80号 糸魚川	○	○		*▽			
第81号 長野	○	○					
第82号 魚津	○			*▽			
第83号 富山	○			*▽			
第84号 七尾	○			*▽			
第85号 輪島	○			*▽			
第86号 金沢	○			*▷			
第87号 草加・古河・小山	○	○					
第88号 熊谷・浦和・川越	○	○					
第89号 船橋	○	○					
第90号 東京	○	○		*▽			
第91号 木更津	○	○					
第92号 館山	○	○		*▽			
第93号 横浜・横須賀	○	○					
第94号 高崎・秩父	○	○					
第95号 軽井沢・富岡	○	○					
第96号 松本	○	○		*▽			
第97号 大月	○	○					
第98号 甲府	○	○					
第99号 小田原	○	○		*▽			
第100号 富士山	○	○		*▽			
第101号 熱海・三島	○	○					
第102号 下田・大島	○	○					
第103号 新島・神津島・式根島	○	○		*▽			
第104号 三宅島・御蔵島	○	○					
第105号 八丈島	○	○		*▽			
第106号 青ヶ島	○	○					
第107号 静岡	○	○					
第108号 飯田・伊那	○	○					
第109号 木曽福島	○						
第110号 中津川	○						
第111号 浜松	○						
第112号 高山	○						
第113号 郡上八幡	○						
第114号 犬山	○						
第115号 名古屋	○						
第116号 豊橋	○						
第117号 鳥羽	○			*▽			
第118号 岐阜・大垣	○						
第119号 白山	○						
第120号 福井	○			*▽			
第121号 敦賀・小浜	○			*▽			
第122号 舞鶴	○			*▽			
第123号 宮津	○			*▷			
第124号 豊岡	○			*▽			
第125号 彦根	○						
第126号 堅田・関都	○						
第127号 福知山	○						
第128号 和田山	○						
第129号 桑名	○			▽			
第130号 津・松阪	○			▽			
第131号 尾鷲	○			*▽			
第132号 新宮	○						
第133号 京都				*△▽			
第134号 奈良	○						
第135号 大阪	○			*▽			
第136号 篠山・三田	○						
第137号 神戸・明石	○		○	*▽			
第138号 和歌山・洲本	○			*▽			
第139号 有田	○						
第140号 田辺	○						
第141号 姫路	○						
第142号 徳島	○			*▽			
第143号 鳥取	○						
第144号 津山	○			▽			

○講演二「伊能忠敬と箱田良助～菅茶山との交流～」

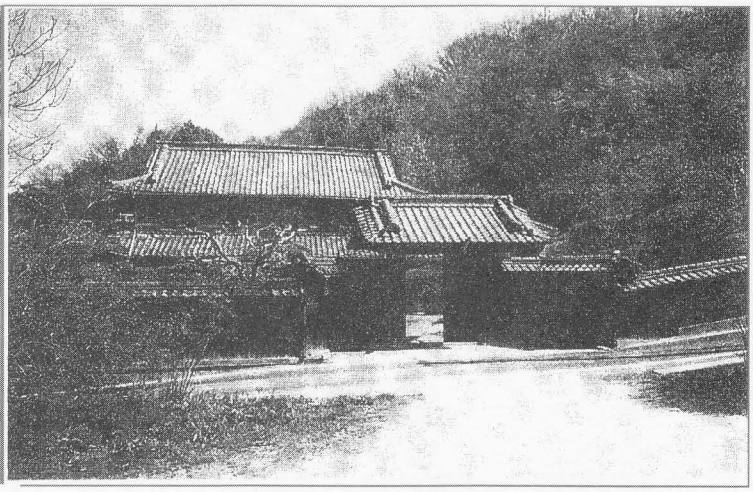
講師・西川　治さん

箱田良助（一七九〇～一八六〇）といえば、備後深安郡箱田村庄屋細川園右衛門の次男である。（中略）箱田良助と伊能忠敬の第七次測量（一八〇九～一八一一、文化六年己巳年八月二十七日～同八年五月八日）以降この測量隊に参加、九州へ向う途次文化六年十一月二十七日の止宿は神辺駅の本陣菅波武十郎、伊能忠敬は福山藩の儒官菅太沖と会談、九州からの帰途文化八年二月十二日には伊能忠敬一行は箱田村に着き、良助の親庄屋園右衛門の家に止宿している。

菅太沖は漢詩人としても著名な菅茶山（かんちゃさん）（一七四八～一八二七）のことで、名は晋師（ときのり）、太沖は通称、茶山は号、本姓は菅波氏、備後神辺の人、京都の那波魯堂に学び、帰郷して私塾「黄葉夕曜村舎」後の「廉塾」（屋敷は現存）を開き庶民教育に尽くした。宗詩を唱道、頼山陽の師でもある。園右衛門とも親交があったので、その孫の榎本武揚の儒学と漢学の素養も父良助を介して廉塾に源流があったと考えられる。さらにこのルーツが後に釜次郎の昌平黌における儒学の学習に反映して、その成績評価になんらか影響したかもしれない。それに洋学に習熟してからも、生涯に多数の優れた漢詩を遺した実績に鑑みて、そのような憶測も許されようか。

ところで、上記神辺における忠敬と茶山との初会談の様子は、菅茶山の日記によると「二十七日、晴、伊能勘解由を本陣に見る。門人二人で見ゆ。伊能、鄭註孝経一部、菓子、二字扇を恵む。留談夜に至る。此れより先、勘解由、しばしば語を寄せて、余を見んと欲す。しかれども公程制有るを以て、往きて見ることを得ず・・・」と、公務旅程中の限られた一夜の尽きぬ懇談の様子が窺える。門人の一人は良助であろうか。

箱田良助の記念碑



庄屋細川園右衛門の屋敷跡

「大日本沿海輿地全図完成に尽力した箱田良助誕生之地」の碑は高さ２ｍの御影石製で揮毫は武揚の曾孫・榎本隆充氏である

筆者は２０００年の秋、岡山県井原・笠岡市地域から広島県神辺町にかけて伊能忠敬一行の測量ルートを探訪、この折にその元庄屋の広大な屋敷跡が現存していることを知り、さらに榎本武揚の親戚である池田家では武揚のさまざまな時期の写真・手紙・自作漢詩の掛け軸などを拝見、細川家代々の広い墓地に詣でることができた

なお、菅波寛は「伊能忠敬と菅茶山の会談について」『伊能忠敬研究』第三十五号に詳しく紹介、菅茶山は会談後に「伊能忠敬先生奉命測量　行次見問賦贈」と題する七言律詩を伊能忠敬に贈った。（黄葉夕陽村舎詩　後編巻三―六所収）（編集部註・一四頁参照）

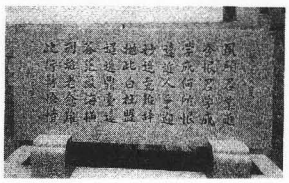
それから一年半、九州からの帰途の折には、菅茶山は鹿二という廉塾の塾生を伊能忠敬の宿に使わしている。

さらにその翌年第二次九州測量の往途中、文化九年一月十二日には再び神辺の本陣（菅波武十郎）に止宿。良助の父親は途中から迎えに来た。忠敬の日記には菅多沖（ママ）も出てきたとあり、菅茶山の同日の日記には、「伊能勘解由、銅版の万国地図を恵む。勘解由を本陣に訪う」とある。（富士川、下七四）。銅版の万国地図とは、文化七年（一八一〇）に伊能忠敬の上司高橋景保（一七八五～一八二九）が作製刊行した「新訂万国全図」（九州以外は伊能図により、エゾ・カラフト・間宮海峡などもかなり正しく図示された、当時では最新の優れた世界図）である。

その後、菅茶山と伊能忠敬および箱田良助との交流はどのようになったのか、気にかけていたが、幸い富士川英郎の大著『菅茶山』（一九九〇）の中でいくつかの関連する記述に出会えた。菅茶山は江戸時代後期の傑出した漢詩人であったので、その交際範囲は驚くほど広かった。文化十一年五月六日、六十七歳の菅茶山は藩主阿部正精の招きを断ることができず、病をおして神辺を出立、江戸へ向かった。その年の六月五日から文化「十二年の二月二十六日江戸を去る日まで、実に多くの著名人と会談している。

菅茶山の日記『東征歴』（『東遊歴』）によれば伊能忠敬と箱田左太夫（良助）とも数回会っている。その中で最も貴重な記録は、箱田から聴いた実地調査に基づく屋久島・種子島・対馬・壱岐・五島の簡潔な比較論である。すなわち「六月十九日、陰寒、箱田良助来たり、三物を恵み、伊能（忠敬）氏の語を伝え、且、西役地方のことを話す、曰く、夜玖高山（屋久島）は田畝無し、人、伐木捕魚を業とす。種島は山低く、野平らかにして、農工内地と異ならず。対馬は硬かく田圃少なし。鰐浦は府中を距つこと十里、大路陸行す。浦は朝鮮を望むこと大約二十里弱。壱岐は田多く、美地、復た高山無し。五島は地最も潤し。土人、南京地方を指示すれども茫々としてみる所なしと云う。是の日、風且雨、・・・・」（一六二～三）

このほか、伊能忠敬と箱田良助との記事は、次のとおりであるが、大抵は同日何人もの客が相次いで来訪。



菅茶山の詩

文化十一年八月十日、晴、箱田良助来飲し、魚酢を恵む。（魚酢は鮨か？）。

十一年九月十四日、晴、伊能勘解由を尋ぬ。（一九三頁）

九月二十六日、箱田左太夫（良助）来る。（省略）

十二月十七日、箱田左太夫来る。（省略）

文化十二年一月四日、晴風、箱田左太夫来る。（省略）

十二年二月一日、陰夜、・・・・・伊能勘解由来訪して、紙を恵む。（伊能忠敬と対面したのは昨年の九月十四日以来のことであった。）

二月十二日、箱田左太夫など、告別（二六一頁）

同十二年五月十九日　大雨　晩晴　伊能勘解由　箱田左太夫の書を得る（神辺）。富士川（下、三二三～三二四頁）は、この書簡の文面を掲載、解説している。その概要は、「門人の左太夫は八丈島のほか六島の測量を終えて無事下田港に着いたので安心ください。これで日本沿海はすんだので、来年中には地図が揃うと思ったが、関東諸城下や奥羽

三越などまだ残っている所があるので、もし仰せつかれば六月ころ出立、来年三、四月ころ帰府となろう。愚老も七十二歳になるので地図の完成を急いでいる。面会は無理と思うので、どうか長生きされて新地図を一覧くださいますように」とある。その二年後伊能忠敬は亡くなり、菅茶山の感想を聴くことが出来なかった。日本の地図歴史上誠に無念である。

（以上『榎本武揚と横井時敬、東京農大二人の学祖』二〇〇八年・東京農大出版会より転載）

谷東平生誕地

大工町　谷研二氏宅

伊能忠敬の足跡・人脈調査に来市

一、井原市大江町、谷東平

谷東平は安永三（一七七四）年大江村崎山の生まれ（現大江小学校）江戸に出て伊能忠敬に地理測量を学び、寛政二（一八〇〇）年伊能忠敬に随従して蝦夷地の測量を始め、全国を測量した。中国地方の測量も担当した。

二、大江町、増屋（池田家）

本現神辺町箱田の細川家と姻戚関係にあり伊能忠敬の門に入り全国測量に随従した細川家長兄右忠太、二男円兵衛と子の榎本武揚関連文書、写真を調査された。海軍中将榎本武揚が従兄弟楠五郎の供養塔婆を造立している。

（大江誌、路傍の石造物史談会）

三、神辺町箱田、細川家

武村充大氏の案内で旧宅へ長い土堀と瓦にカーブのある門細川円兵衛一族の墓参。（略）（『平成いばら』平成十二年九月三〇日第一三一号）

伊能忠敬の足跡・人脈・測量日記考（二）

一、伊能忠敬の事歴（省略）

二、谷東平は本家田郷（現、大江小）から西の崎山に分家した、平八郎正純の孫で、父は栄藏爲純といった。

東平は通称で、実名元純、三十歳の時、神辺の碩学菅茶山から「以燕（もちやす）」と命名された。

和算家としても有名、幼少の時、測量法を大江田上の松岡常入（まつおかじょうにゅう）に学び、大坂江戸に出て伊能忠敬について天文、地理を究めた。

享和元（一八〇一）年、忠敬五七歳、第二次測量「伊豆―奥羽」に東平は二七歳で随行している。

三、箱田良助は谷東平と親類で親交あり数学優秀であった。兄右忠太と良助十七歳が東平に測量隊参加を奨められたようで、第五次山陽地方測量の時、父、園右衛門から忠敬に入門依頼。

文化四（一八〇七）年六月七日付書状を叔父池田喜惣太直行に送り、忠敬宅の生活を知らす。

文化六（一八〇九）年八月第七次測量で九州に向かう時、良助（一九歳）父園右衛門、谷東平連署で誓約書を提出している。

細川園右衛門直知の長男、右忠太　江戸で死亡。

次男、良助、別名左太夫と称す。

文政五（一八二二）年三二歳で幕臣榎本武兵衛武由（婿入り、榎本圓兵衛武規と改名。天文方江戸城暦局に勤めた。妻死亡。幕臣林代二郎の娘琴を迎えて長男勇之助、次男釜次郎（後の榎本武揚）と女三人。三男、彦四郎直義　大江増屋池田家に婿入り、息楠五郎正経と榎本武揚は従兄弟になる。

（『平成いばら』平成十二年十月二六日第一三二号）

伊能忠敬の遺功－地球図・国土防衛・文化外交への貢献－　　A１

04.7.11　西川　治

はじめに：世界図・地球図における日本図は、日本人自身が作製した地圖によって改善されてきた。それによって地球図の補完に貢献してきた。行基図、伊能図、新訂万国全図

：平成時代に甦る伊能忠敬と伊能図、新たな顕彰運動を。

三治郎の夢の実現、時代背景・国際環境、”神武天王以来の大業”の達成、

伊能図の国際的評価、1810年の地球図を補完した「新訂万国全図」、シーボルトとクルーゼンシュテルン。幕末国難時代における遺功、文化外交への貢献、

近代黎明期に輝いた伊能図。

高齢化社会・生涯学習のシンボル、地域興しと地圖の意義。

１）三治郎の夢・地球をはかる。映画、犬吠崎。

２）平成時代の伊能忠敬：

３）乙丑人の縁：伊能忠敬の１８０年後輩、没後２００年２０１８年には９３歳、望み無きに非ず。今年の１０月は東大理学部地理学科入学６０周年。

１。伊能忠敬（1745~1818）の時代環境

－１　発見時代から科学的探求時代へ、James Cook(1728~1779)３回、1768~79、クロノメーター。ゲオルク・フォルスター『世界周航記』

A. von Humboldt(1769~1859)、1799~1804。『新大陸赤道地域の地理学的・自然學的アトラス－天文観測・三角測量・バロメーターに基づく－』パリ1814。

－２　フランス革命政府によるメートル法の制定、子午線の長さの測量、１ｍを１／4千万。Denis Guedj(1987)La Méridienne:la mètre(1792~1799) .Seghers,Paris.

鈴木まや、訳（1989)子午線－－メートル異聞。工作社。（ゲージュはパリ第８大学数学博士、フランス大革命200周年の記念映画の原作。

Jean-Baptiste Delambre(1749~1822),Lalandeの門弟、木星・土星の衛星表。

Pierre Méchain(1744~1804)。パリとダンケルクおよびバルセロナ間の子午線

Marquis de Condorcet(1743~1794)、立法議会の議長の演説「この測量調査は＜あらゆ人々に、あらゆる時代に＞捧げられるものだ」

－３　植民地獲得闘争・開発経営、産業革命

－４　開国を迫られる日本、沿岸警備、異国船打ち払い令、文政8.2.(1825) 起草者は高橋景保（1785~1829)グロビウス、天文方、書物奉行、満州語・ロシア語。

正確な日本図と世界地図「新訂万国全図」1810；船越昭生（1986)『鎖国日本にきた「康熙図」の地理学史的研究』法政大学出版局。

William R.Broughton(1762~1821)、イギリスの航海者、1796,97年に日本・エゾ・南千島・サハリン・沿海地方沿岸を測量、２度室蘭で松前藩士と接触、津軽海峡通過、タタール半島と命名。”A voyage of discovery to the North Pacific Ocean ,London,1804

上記は2004年7月11日に岐阜で表題の講演をした際の資料。今回参考までに配布した。
今例会では、とくに1-2、フランス政府によるメートル法制定のために、ラランデの門弟のドウランブルとメシェンが緯度1度の長さを測量したのと、高橋至時のもとで学び、ラランデの間接的な門弟ともいえる伊能の測量開始とがほとんど同じ時期であったことを詳述した。
上記に掲げた関連文献に追加してKen Alder(2002)“THE　MEASURE OF ALL THINGS”の訳書『万物の尺度を求めて』(2006)早川書房　を紹介したい。（講師　西川治）

江東区に「チュ～ケイさん」

まち案内に忠敬さんのキャラクター活用

こうとう区報
NO.1586
平成20年(2008年)
11/1
毎月1日・11日・21日発行
発行:江東区/編集:広報広聴課
〒135-8383 江東区東陽四丁目11-28
http://www.city.koto.lg.jp
☎3647-9111(代)

富岡地区まちづくりプラン完成

深川回遊促進・無電柱化など賑わいと快適空間を創出

富岡地区は、歴史的な旧跡が多く、門前仲町を中心とした下町を代表する商業のまちです。区ではこの地区で無電柱化モデル事業を進めています。これを契機として「活気あふれる住みやすいまち」を目指して平成17年度からワークショップを実施してきました。区民の方々等による活発な議論を経て、このたび「富岡地区まちづくりプラン」が完成しました。

将来像「みんなでわっしょい！わがまち深川とみおか」

プランでは、富岡地区のまちづくり将来像(キャッチフレーズ)は「みんなで"わ"っしょい！わがまち深川とみおか」です。このフレーズには、「下町の粋と人情の輪があるまち」「水と緑と花の環があるまち」「いつまでも訪れることができる和のまち」という、3つの「わ」の意味が込められています。

回遊ルート設定、情報発信基地

将来像を具現化するため、プランでは2つのプロジェクトを設定しました。

①深川とみおか回遊促進

来訪者に地区全体を回遊してもらうルートを設定し、隠れた地域資源の楽しみを増大させるサインを整備します。

②深川公園前情報エリア

深川公園は、富岡八幡宮、深川不動尊等に囲まれ、重要な位置にあることから、来訪者と地域の方との交流拠点として、また周辺道路の景観も合わせて整備します。来秋オープン予定の「深川東京モダン館」とともに、まちの情報拠点としての役割を担います。

プランをご覧ください

このプランをご覧いただき、無電柱化など富岡地区の未来のまちづくりにご理解をお願いします。【パンフレット配付場所】道路課工事係(区役所隣防災センター3階4番)、こうとう情報ステーション(区役所2階)、富岡出張所、古石場文化センター(区ホームページでもご覧になれます)　問 道路課工事係 ☎(3647)9665

▶富岡地区にゆかりのある伊能忠敬をキャラクター化した「チュ～ケイさん」。看板や立体模型となってまちを案内します

江東区報　平成20年11月11日号

石川支部だより

「能登さいはて資料館」出前展を開催

河崎倫代

能登半島の最北端、石川県珠洲市狼煙町に開館した「伊能忠敬と灯台と民具の 能登さいはて資料館」については、会報四七号で報告しました。小さな私設資料館ですから伊能図を広げるスペースはありません。そこで今回は、二〇〇六年七月にオープンした珠洲市多目的ホール「ラポルトすず」に会場を移し、「出前展」と称して「伊能大図フロア展 北陸編」を企画しました

「伊能ウォーク・金沢」を共催した国土地理院北陸地方測量部の後援と日本地図センターの協力を得て、加賀・能登・越中三国（旧加賀藩領）の伊能大図五枚を床面に展示。透明シートの上から歩いて鑑賞できるようにしました。また、珠洲市教育委員会の後援をいただき、「伊能忠敬」を学ぶ小学六年生、「昔のくらし・今のくらし」を学ぶ三年生を対象に、事前に市内の全小・中学校へ案内を出しました。以下は、ちらしに記載した事項です。

テーマ①　二〇〇年前の能登半島を歩こう！

―　伊能大図フロア展　北陸編　―

一八〇三年夏、能登に伊能忠敬たちがやってきた。復元伊能大図の上を歩いて、二〇〇年前のふるさとを確認しよう。

テーマ②　昔の生活を体験しよう！

わらじを履いて歩こう。薪を背負って二宮金次郎になってみよう。あかりの移り変わりをみよう。

テーマ③　これは 何？

狼煙海岸でひろったさまざまな漂着物から、日本海の今を考えよう。

☆おまけ　禄剛埼灯台を作ろう！

明治十六年（一八八三）七月十日初点灯の禄剛埼灯台を、ペーパークラフトで作ってみよう。

日時　二〇〇八年十一月九日（日）～十三日（木）

場所　ラポルトすず　アトリエ工房（珠洲市飯田町）

入場　無料

主催　能登さいはて資料館（珠洲市狼煙町）

後援　珠洲市教育委員会

　　国土交通省 国土地理院 北陸地方測量部

協力　日本地図センター

初日は日曜日。たまたまホールで上映中の映画「しあわせのかおり」鑑賞待ちの市民が次々に入場。二日目はみさき小学校三年生が来場。用意した草鞋を全員が履いて、伊能大図の測線の上を歩きました。その様子が翌日の北陸中日新聞に大きく掲載されたこともあって、直小学校五年生と郷土クラブ員、飯田小学校三年生、上戸小学校三年生が次々に体験学習に来てくれました。

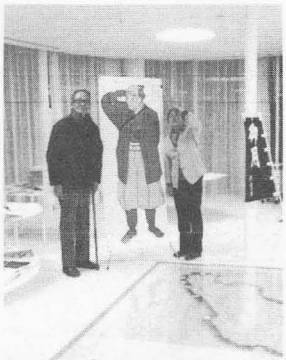
私設資料館のささやかな企画展でしたが、小学生たちの活発な言動に元気をもらい、しあわせな四日間でした。

（かわさき　みちよ・能登さいはて資料館長　石川支部長）

みさき小学校のみなさん

ラポルトすずのアトリエ工房で

市民のみなさんも来場



等身大の忠敬像（日本地図センター原図）

直小学校五年生のみなさん

飯田小学校三年生のみなさん

１３キロのマキを運ぶＴ君

揚げ浜塩田の海水汲み？

二宮金次郎？

上戸小学校三年生のみなさん

お知らせ

例会案内・例会報告 ～「伊能塾」発足～

■ 第一回例会（九月例会）九月十四日（日）実施

○講演一「話題になったいくつかの大図写本」講師・鈴木　純子さん

○講演二「伊能忠敬と箱田良助」　講師・西川　治さん

（※講演内容は六〇頁以下に掲載されています）

◇第一回例会は三連休の中日にも関わらず講師外十五名の会員が出席。和室でしたが星埜代表が「寺子屋みたいでたまにはいいね。」と仰って下さり、さらには懇親会中、忠敬さんの時代にあやかって例会を「伊能塾」と呼んではどうか、というご提案をいただきました。

第１回例会は和室でくつろいで

第２回例会は会議室で和やかに

●第一回例会に出席された荻原哲夫さんが九月二一日ご病気のため逝去されました。謹んでご冥福をお祈りします。（上写真・最奥右が荻原さん）

■ 第二回例会（十一月例会）十一月九日（日）実施

○講演一「伊能家とご縁がありまして」　講師・伊能　陽子さん

○講演二「私の伊能図発見史」　講師・渡辺一郎さん

◇第二回例会は講師外六名の会員が出席。開会に先立ち、前回例会の後に急逝された「伊能研の天文方」荻原哲夫さんを悼んで全員で黙祷をささげました。なお第二回例会の講演内容は次号に掲載いたします。

****

～次回例会のご案内～■第三回例会（一月例会）

○日時　二〇〇九年一月十一日（日）一三時～一七時

○会場　江東区森下文化センター　（第一回、第二回と同じです。）

○内容　講師の方は現在交渉中です。

○通知　詳細が決定しましたら、別途文書にてお知らせいたします。

（例会担当　新沢義博）

****

講師の方、募集！

＊テーマは問いません。＊会員の方ならどなたでも。

時間は約一時間半。日程は二〇〇九年一月、三月（隔月）第二日曜日午後。場所は江東区森下文化センター。パソコンを持参していただければ映写も可能です。

○詳細は新沢までお願いします。

連絡先　〒135－0034　江東区永代２－２９－３－１０３

携帯　０９０－５７６５－８１５２　新沢義博

お便りから

■**鵜飼幸雄さん　市川市**　祝賀会（総会）当日は小生の八一歳の誕生日にて同日にこのような祝日を迎えられ楽しい記念日となり嬉しい催しの日とお喜び申し上げ、嬉しく存じます。

※第五三号四頁「総会出席者」欄でお名前を誤って表記しました。お詫びして訂正します。

■**岡山宣孝さん　杉並区**　元気にやっています。

■**片寄啓さん　富士市**　退職したら皆様の活動に参加したいと常々思っておりますが、未だ仕事の完了がみえず、残念です。

■**津島健治さん　香取市**　「会誌」毎号楽しく拝読させて頂いて居ります。会誌の中に古文書原文―現代語の対訳が一頁でも掲載されると嬉しいのですが。

■**中尾弘さん　草津市**　いつも何かとお世話になりありがとうございます。皆様のご活躍ご健康をお祈り申し上げます。

■**日本ウォーキング協会・木谷道宣さん　文京区**　「ウォーク日本一八〇〇」伊能大河ウオーク。伊能大図展に向けて頑張りましょう！

■**松尾紀成さん　嬉野市**　有明海沿岸の測量はと、当時の潮受け堤防等探しながら勉強しております。

■**宮地滋さん　伊万里市**　念願叶って五月三一日伊能忠敬研究会九州支部春季例会に初参加を致し会員の皆様と一同に会した事を心から喜んでおります。

日々の話題

■**叙勲**　伊能ウオーク名誉隊長・加藤剛さんが十一月三日、二〇〇八年秋の叙勲で旭日小綬章を受章しました。

■**雑誌掲載**　伊能洋さんの随筆「伊能忠敬」が『致知』一〇月号「第二回子孫が語る日本の偉人」に掲載されました。

【一部紹介】「忠敬が大事業を成し遂げた理由の一つに、「夢の持続」が挙げられると思います。冒頭に「人生二山」と述べましたが、忠敬は五十代を過ぎて急に天文をやろうと考えたわけではないはずです。（中略）要するに忠敬の前半生と後半生は全然別のものではなく、一つに繋がっているということです。そして経験したことのすべてを自分の中に取り込んで、何一つ無駄にしない生き方をした人だと思います。」

第2回　「子孫が語る日本の偉人」

伊能忠敬

伊能　洋

■**TV出演**　芳賀啓さんが一〇月一〇日放送・NHK教育テレビ「美の壺」（テーマ・古地図）に出演しました。（下写真・NHKのHPより）

■**TV出演**　猪原紘太さんが一〇月三一日深夜放送・テレビ朝日「タモリ倶楽部」（テーマ・地図サミット2008）に出演しました。

■**新聞掲載**　『読売新聞』九月二六日「江戸文化人の死因診断」に杉浦守邦さん著『江戸期文化人の死因』（思文閣出版）が掲載されました。

蕪村　重症下痢症でなく心筋梗塞

江戸文化人の死因診断

【一部紹介】「診断したのは杉浦守邦・山形大学名誉教授（87）（公衆衛生学）。9年前、豊臣秀吉の死因は慢性尿毒症だったとの新説を打ち出すなど、多くの歴史上の人物の死因を探ってきた。（中略）「江戸時代には、苦痛を治す努力はしているが、病気の診断自体が誤っていて亡くなるケースが多い」と杉浦さんは分析する。

■**新聞記事**　『朝日新聞』八月二五日「なにわ科学の源流―高橋至時・間重富―」に「伊能忠敬」が取り上げられました。

【一部紹介】「伊能による東日本の測量が終わりかけた享和3（1803）年、至時は間重富に向け「伊能はご存じの性格で、そこつなので安心ができない。九州、四国の測量はあなたにお願いをしたい」と書いた手紙を出している。大阪市立科学館の嘉数次人主任学芸員は「至時は当初、伊能のことを本当には信用していなかったようだ」と説明する。天下の偉人も、師匠の前では形無しだった。」文・久保田裕記者

■**雑誌記事**　『WEDGE』九月号に「伊能忠敬」が取り上げられました。

【一部紹介】「日本全土を歩いて測量し、日本地図を作った伊能忠敬。隠居後に天文方に入門し、55歳で測量の旅に出た忠敬は合理的な頭脳を備えた農村生まれの農政家であった。18世紀末、開国に向け胎動する時代においてはもはや四民の区別がなく、個人の力が求められていた。幕府も忠敬の知力と財力に託し地図作成の大役を任せた。17年間にも及ぶ測量の旅では、悪天候は勿論のこと、幕府から派遣された情熱のない役人の統率にも手を焼いた。しかし「元百姓」としての根性で苦難に打ち克ち、知の力を存分に発揮して、海外列強から国を守るための正確な地図を作らんとする志を貫徹させた。」文・中西進（国文学者）

お知らせ

■**静嘉堂文庫美術館03・3700・0007**

◇**「静嘉堂文庫の古典籍　第7回　古地図の楽しみ―江戸時代の町を歩く―」**『伊能図』ほか

2009年2月14日（土）～3月22日（日）

■**国立科学博物館☎03・5777・8600**

◇**「数学　日本のパイオニアたち」**和算家ほか

2009年1月12日（月）まで

◇**常設展**

地球館―江戸時代の科学技術（天文学・測量術・伊能忠敬の全国測量など）

日本館―渾天儀・天球儀・貞享暦など

◇**科学史学校「コペルニクスと太陽中心説の形成」**横山雅彦先生（事前申込不要）

2009年1月24日（土）14時～16時

問合せ先055・220・8396高橋智子

■**八王子夢美術館☎042・621・6777**

◇**「いとも美しき西洋版画の世界展」**

2009年1月27日（火）まで

◇**「特集展示　ムットーニ展」**

2月11日（水・祝）～2月25日（水）

■**伊能忠敬記念館**

☎0478・54・1118

◇**第59回収蔵品展**

期間　2009年1月18日（日）まで

展示品　伊能図・伊豆七島、垂揺球儀　など

◇**第60回収蔵品展**

期間　1月20日（火）～3月22日（日）

展示品　伊能図・関東～中国地方、奈良県付近、半円方位盤　など

◇**『2009地図カレンダー展』**

期間　2008年12月9日（火）～2009年1月18日（日）

展示品　立体的な地図や日本地図、世界地図、古地図など、地図を図案としたカレンダー。

※希望者には展示してあるカレンダーを差し上げます。（一人一部、部数に限りあり　無くなり次第終了）

◇**『伊能家のおひなさま展』**

期間　2月7日（土）～3月22日（日）

展示品　伊能家に伝わるおひなさま2組

（同時期に佐原市内各家々でもお雛様を公開します。古き良き街並みと合わせてご覧下さい）

伊能忠敬研究会御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行っております。

①会報の発行

発表誌　原則として年四回

《会報》―原稿締切と発行予定―

第55号締切12月末　発行2月

第56号締切3月末　発行5月

第57号締切6月末　発行8月

第58号締切9月末　発行11月

②例会・見学会の開催

③忠敬関連イベントの主催または共催

④その他付帯する事業

三、入会方法等　入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、入会金四千円、年会費六千円、合計一万円を左記にお送り下さい。会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、事務局所在地（04年8月事務所が新宿区下宮比町から移転）

〒153-0042　東京都目黒区青葉台4―9―6　日本地図センター2F　伊能忠敬研究会

電話・FAX　03―3466―9752

事務局メール　junko-sz@jcom.home.ne.jp

（07年8月よりアドレスが変わりました）

郵便振替口座　〇〇一五〇―六―〇七二八六一〇

投稿規定　会員の皆様から会報の原稿を募集しております。一回の掲載は、原則として2～8頁です。提出原稿は返却しません。採否は編集部にご一任下さい。手書き、CD、メール添付可。（FD要相談）一頁は二段組31字×26行（400字詰用紙4枚分）、三段組20字×30行です。文字は9ポイントを使用。タイトルは5行分、写真、図表等（返却します）添付可。**話題、情報、近況などのお便りもお待ちしています。**

伊能忠敬研究会のホームページ

「伊能忠敬研究会」公式ホームページ

http://inoh-tadtaka.org/（休止中）

伊能忠敬研究会「資料室」…現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など地図および史料。（担当・坂本幹事）

http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/

「伊能忠敬図書館」…忠敬関係の文献、画像資料。（担当・前田）

http://www.tt.rim.or.jp/~koko

編集後記

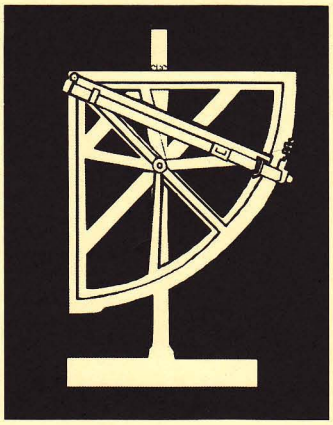
◇今号の巻頭「史跡探訪」および「神石高原町の四基の伊能碑」は広島県にある神石高原町からの話題だが、この町にはまだ訪れたことがなかった。基礎知識を得ようと町の観光案内のサイトを見ると、この地には星居山（ほしのこやま）という標高八三五mの山があり、神秘的な伝説が伝わっていることがわかった。◇それによると、孝徳天皇時代の大化元（六四五）年閏正月元日の夕方、一帯を真昼のごとく明るく照らして天空より星が降ってきた。その現象はその後も幾度となく続き、これを聞いた天皇はその年の八月、この地に滞在して自らこの現象を体験し、この山を「星ノ居山」と命名されたという。◇この現象について、UFOではないかとの説もあるが、科学的に考えると流星群（正しくはダスト・トレイルというそうだが）から隕石が断続的に降って来たとも考えられる。ともあれ興味深い話ではある。◇日本国内はあちこち旅行する機会があるが、まだまだ知らないことがたくさんありそうだ。今後も各地からの情報発信をお願いしたい。（M）

「伊能忠敬研究」第54号© 2008年11月25日印刷11月30日発行 編集 前田幸子 発行 星埜由尚 印刷㈱リョーイン
〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2F 伊能忠敬研究会 Tel &Fax 03-3466-9752

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.54 2008



TOPICS I

Historic Spots about Inoh Tadataka (4) — Matsui Yoshinori 1

Tadataka's Gyro-Compass — Editorial Department 2

New Found Documents about Inoh's Servey in Tezen Museum — The San-in Chuo Shimpo 4

Special Lessons with "The Large-Scale Inoh Maps" in Togane — Chiba Nippo 4

TV Location of "Inoh's Mesurement with Ropes on the Sea" — Tanko-Nichinichi Shimbun 5

Exhibition of "The Large-Scale Inoh Maps"in Higashikawa — Hokkaido Kensetsu Shimbun 6

New Character "Chukei-san" in Koto Ward — Koto Ward 67

TOPICS II

Four Stone Monuments in Jinsekikogen Town — Matsui Yoshinori 8

Place Names and Landscapes in "*Inoh Daizu Soran*" (8) — Hoshino Yoshihisa 16

FROM VISITORS' REGESTERS — Inoh Yoko 36

ARTICLES

Tadataka's Grand-grandfather Inoh Toyoaki — Sakuma Tatsuo 27

Study of Inoh Tadataka (4) — Ishiya Haruka 38

Personal Connections of "Wasan"(4) — Ando Yukiko 48

Inoh's Survey in Tama(2) — Sakuma Tatsuo 56

INOH-JUKU

Some Manuscripts of "The Large-Scale Inoh Maps" in the News — Suzuki Junko 60

Inoh Tadataka and Hakoda Ryosuke — Nishikawa Osamu 63

BRANCH REPORT

Exhibition of "The Large-Scale Inoh Maps" in Suzu — Kawasaki Michiyo 68

MEETING ROOM

Informations about Regular Meetings — Shinzawa Yoshihiro 70

Letters from Members Daily Topics and Informations — Editorial Department 71

Edited and Published
by
THE INOH TADATAKA SOCIETY